
ウルトラマンブレイブ～魔導師との遭遇～

ハナト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンブレイブ〜魔導師との遭遇〜

【Nコード】

N8824Q

【作者名】

ハナト

【あらすじ】

別宇宙で異変が起こっている！その原因を調査するため、別宇宙へと向かうこととなった新人ウルトラマン、ブレイブ。彼が降りたのは、地球という星の海鳴市だった。ブレイブと、リリカルなのはのキャラクターたちが織り成す、壮大な物語。

ウルトラマンブレイブ〜魔導師との遭遇〜始まります！

注：これは作者の処女作です。

序章（前書き）

始めましての方も、そうでない方も、どうも、ハナトです。

今回はずっとやってみたかったウルトラシリーズとなのはシリーズの合作です。

うまくできるかわかりませんがどうぞ、よろしくお願いいたします。

では、どうぞ！

序章

M78星雲 光の国

ここで、一人の新人ウルトラマンが宇宙警備隊本部に向かっていた。シルエット、もしくは遠目に見ればその顔はウルトラマンメビウスに酷似している。

だが実際は耳の上と頭の天辺にアイスラッガーのようなものが付いている。

ボディデザインやプロテクターはウルトラマンゼロと同じだが、プロテクターは金、赤と青のところが銀、銀のところが赤になっている。

全体的にゼロに似ているが、最大の違いは目である。ゼロのように鋭い目ではなく、メビウスやウルトラマンに近い丸く優しいような目である。

そんな彼が突然宇宙警備隊本部に呼ばれた。

現在、ようやく大隊長の部屋の前まで来たところである。

「お呼びですか？大隊長。」

彼の目の前にいるのは現宇宙警備隊大隊長である、ウルトラマンゾフィーである。

「ああ。実は君に、別の宇宙へと向かってもらいたい。」

「別の宇宙、ですか？」

「そうだ。その宇宙にある星で、異常な事態が起こっている。その原因を調査してもらいたい。」

「でも、なぜ自分なのですか？別宇宙なら専門であるゼロ兄がいるのでは？」

彼の言うゼロ兄とはウルトラマンゼロのことである。かつてダークロプス軍団が光の国へやってきたときに、偶然ゼロに助けられ、以来ゼロ兄と呼んで慕うようになった。そんなゼロは現在、「ウルティメットフォース・ゼロ」という、別宇宙を中心とした活動を行う組織を作った。ならば、ゼロが行くのが適任ではないのだろうか？

「そうなんだが、なぜかゼロと連絡がとれないんだ。そこで、君に頼みたいと思った訳だ。」

「ですが、自分は非才の身です。他に適任がいるのでは？」

「……メビウスの言っていた通りだな。君が思っているほど、君は凡人ではない。それに、君だけのもの、君だけにしか見つけられない物を見つけてきてほしい。」

「自分にしか……。」

「そうだ。かつてのメビウスがそうだったように、かけがえのないものを見つけてほしい。」

「……わかりました。宇宙警備隊候補生、ブレイブ、別宇宙へ行きます！」

「うむ。」

そう言って大隊長室を後にしようとしたが

「これを持って行け。」

目の前にメビウスブレスが青くなったものと、マックスギャラクシーが赤くなったものが出された。

「これって、メビウス教官の……！」

「それをつけていくといい。」

「ありがとうございます！大隊長！」

青いメビウスブレス、ブレイブブレスを左腕につけ、赤いマックスギャラクシー、ブレイブギャラクシーを右腕につけた。

「これで別宇宙にいけるのか……。」

自分の両腕を見た後、上を見上げ、宇宙へと飛び立った。

そしてマルチバースへと突入した。

激しい衝撃が体を襲ったが、しばらくすると抜けることに成功した。

そこに広がっていたのは、自分のいた宇宙とさほど変わらない宇宙へ抜けた。

「この、太陽系第三惑星、地球・・・・・・・・あ、ここか。」
青い星、地球を眺めるブレイブ。

「よし！」

そしてそのまま、大気圏に突入した。

序章（後書き）

評価・感想お待ちしております。

キャラクター紹介（前書き）

今回はブレイブについてです。

イメージしづらいですが、それでもよければどうぞー！

キャラクター紹介

名前 ウルトラマンブレイブ ヒビノ・ユウキ

身長 45メートル

体重 4万5千トン

年齢 不明・人間だと15歳前後の青少年

見た目 顔はメビウスを中心に、尖っているところをアイスラッガーにした感じ。ボディはゼロを中心に、赤と青のところが銀に、銀のところが赤くなつた感じ。人間体は165センチくらいの端正な顔立ちをした青少年。とくにベースにする人間が見つからなかったため、ほぼやけくそでやってみたところ、意外とうまくできた。

性格 メビウスに育てられたせいかな、少々天然が入っている。また、誰の言うこともすぐに信じ、誰に対しても笑顔を絶やさない。冷たいものが苦手。

必殺技 ブレイブシュート

メビウムシュートと全く同じ。ブレイブプレスを回転させ、腕を十字に組んで発射する。

スラッガートリオネーション

三本のBスラッガーを使って攻撃する。

スラッガーシューティング

二本のスラッガーを弓形にして、ゼロインサードのような一本を矢にして打ち出す。

ブレイブスピッキク
メビュームスピッキクのブレイブ版

武器 ブレイブブレス

Bスラッガー（×3）

ブレイブギャラクシー

普段は鳥型で、自由に行動すること

ができる。あとしゃべれる。

キャラクター紹介（後書き）

こんな感じです。

ブレイブの絵を書いてくださる方募集します。

いれんですけど……。

次回は本編です！

第1話 初めての戦い（前書き）

どうも、ハナトです。

ようやく本編突入です。

読みづらい点があるかもしれませんが、それでもいい方は、どうぞ
！

第1話 初めての戦い

第97管理外世界、地球

海鳴市の山奥に、一筋の光が落下した。

その光から出てきたのは、ウルトラマンメビウスと酷似した顔をしているが、体はウルトラマンゼロに似ている銀色のウルトラマン、ブレイブがいた。

「ふう、ここで合ってる？レクシー。」

右腕についている鳥型のメカに話しかける。

『ああ。問題ない。』

レクシーというのはこのメカ、ブレイブギャラクシーのことである。

「さて、まずは何をしようか？」

『そうだな。とりあえず……』

そう言っつてブレイブの腕から離れるレクシー。

『その姿はまずいだろ。』

その姿、ウルトラマンの姿のことである。

『ここで見た人間の姿を借りろ。』

「え？人間なんて見てないよ？」

これはレクシーも予想していなかった展開である。

『お前！あれほど見ておけって言っただろ！だからわざわざ昼間の国を選んだんだよ！』

「えゝ！？そんなの知らないよゝ！見とけて風景のことじゃないの？」

『んなわけねーだろ！』

そんなやりとりをしていると

ピコン、ピコン

胸のカラータイマーになる。

「うわゝ！？どうしよう！時間がゝ！？」

『落ち着け！もう何でもいいから人間イメージしろ人間を！』

「え？えゝつと・・・・・・・・（たしかメビウス教官の人間体が、こんな感じかな？）」

そしてブレイブが光る。

その光がやみ、そこに立っていたのは

「どうかな？」

端正な顔立ちをした、15歳前後の少年である。

『いいんじゃないか？なかなかイケメンだし。』

「一応メビウス教官の人間体をイメージしたんだけど。」

『うーん……そう言われれば心なしか似てるな……。』

そんなやり取りをした後、山を降りた。

山を降りて数分、町にたどり着いた。

『まずはねぐらの確保だな。』

レクシーがブレイブに話す。

ちなみに今のレクシーは人間からは鳩に見える。

つまり

ブレイブは、一般的には「鳩と話しながら歩く少年」という風に見られているのだ。

「でもさ、何をすればいいの？」

『それは私にもわからない……』

しばらく話しながら歩いていると、レクシーが何かの気配をキャッチする。

『おいブレイブ！宇宙人だ！』

「宇宙人！？」

思わず大声を出してしまう。

周りの視線が痛い。

『こつちだ!』

そんなものにせず（というか気づいてない）レクシーの後を追う。

走って数分、人気のない裏地へ出た。

そこにいたのは眼鏡をかけてスーツを着た男性と、筋肉粒々で厳つい顔したスキンヘッズの男がいた。

「おや、こんなところにウルトラ戦士とは珍しい。」

スーツの男性が声をかけてくる。

「お前、ダークゴーネか？」

ブレイブがにらみつける。

「おや、良く気づきましたね。あなたとは初対面だったはずですが？」

「ゼロ兄が言ってた。そしてそっちはアイアロンか。」

「ふん！なかなか鋭いガキだな。」

「お前達の目的は何だ！？んで、ベリアルがいるのか！？」

「ベリアル？ああ、そんなやつもいましたね。」

「なに？」

その言葉に驚くブレイブ。無理もない。ダークゴーネもアイアロンもカイザーベリアルという凶悪なウルトラマンの部下だからだ。

「どういうことだ！？」

ブレイブがダークゴーネをにらみつける。

「今は教えられません。それより、」

そう言つて手から黒い玉を出すダークゴーネ。

「こいつの相手でもしていてください！」

そう言つて玉を上に向けてる。

中から宇宙怪獣ベムラーが現れる。

だが、ベムラーが青く光り、姿が変わる。

腕と尻尾が長くなり、頭には角が生えた。

「なにをし……！」

ベムラーに気を取られてる間に、ダークゴーネたちはいなくなっていた。

「くそっ！」

『ブレイブ！今はあいつだ！』

「……そうだね。レクシーは流れ弾がみんなに行かないようにしておいて。」

『分かった。気をつけろよ。』

「うん！」

そう言つてレクシーと分かれた後、左腕にブレイブブレスを出現させる。

その中心にあるサークルを回転させる。

そして左腕を高く上げ叫ぶ。

「ブレイザー！！！」

ブレイブの体が光に包まれる。

その光が大きくなり、中から45メートルの巨人、ウルトラマンブレイブが出てきた。

「セアッ！」

メビウスと同じ構えをしてベムラーに対峙する。

ベムラーが青い光弾を連射してくる。

それらを全て頭に付いた3本のブレイブスラッガーの内2本を手にとって切り裂いていく。

そのままベムラーに突っ込み、スラッガーを振り下ろす。

だが腕で受け止められ、至近距離で光弾を喰らう。

「ゼアアア！」

吹っ飛ばされ、ビルにぶつかる。

（強い！ベムラーって、こんなに強いんだっけ……？）

すると、ベムラーの胴体に青く輝いている部分があるのに気づく。

（あれが原因か……。なら！）

ふらつきながらも立ち上がり、ベムラーをにらむ。

そして持っていた2本のスラッガーを向き合わせ、巨大な弓の形にする。

そして頭の天辺に残っていた最後のスラッガーをセットし、巨大な弓矢ができる。

（ゼロ兄の技をまねて作った新技、決めてやる！）

矢に光が集まる。

ベムラーも光弾を乱射するが、そんなもの効かない。

「ハアアアアアア！ゼアアアアアアア！！」

矢を発射し青く光るところに性格に当てる。

青い宝石が体から出て、途端に弱るベムラー。

ピコン、ピコン

ブレイブのカラータイマーも点滅する。

（これで決める！）

3本のスラッガーを頭に戻し、ブレイブブレスを構える。

サークルを回転させ、両腕を水平に伸ばした後、上に上げる。

「ハアアアアアアア・・・」

そして降ろしつつ十字に組む。

「セアアアアアアアアアアアア！！！！！」

オレンジの光線、ブレイブシュートが発射される。

喰らったベムラーが爆発するが、青い宝石は無事だった。

「ハア・・・ハア・・・」

肩で息をしながらも、その宝石をつかむ。

その瞬間ブレイブは光り、消える。

ブレイブがさっきまでいたところに、一人の少年が立っていた。

ブレイブの人間体である。

荒い息をしながらその場にひざを着く。

「はぁ．．．はぁ．．．。け、結構きつかったなぁ．．．。」

そのまま倒れてしまう。

その右手には青い宝石が握られていた。

「．．．．これって、一体．．．？」

そのまま少年は気を失った。

その少年の傍に、一人の少女が立っていた。

第1話 初めての戦い（後書き）

いかがでしたか？

実はまだヒロインを決めていません……。

みなさんは誰がいいですか？

もしよろしければ、なのは、フェイト、はやての中でお答えください。

この3人以外の選択肢はありません。

もし何も票がなかったら作者があみだくじか何かで決めます。

ではまた！

第2話 師匠の言葉（前書き）

どうも！遅くなりました、ハナトです！

一応ヒロインが決定しました。

今回はそのヒロインとその仲間、そしてあの人とあの人が少しだけ登場します。

誰かは本編で！

では、どうぞ！

第2話 師匠の言葉

真っ白い何もない空間

ブレイブ（人間体）はそこに立っていた。

「この空間は……誰かの長距離思念対話空間？」

そうつぶやいていると、背後から声がする。

「そう。良く覚えてたね。さすがだ。」

「この声……。」

背後に振り返ると、そこに立っていたのは

「メビウス教官！」

ブレイブの師匠である、ウルトラマンメビウス（ヒビノ・ミライ）がいた。

「久しぶりだね、ブレイブ。見送りできなくてごめんね。」

苦笑いしながら謝るミライ。

「そんな！教官がこうしてきてくれただけで大満足です！……ところで、何をしに来たんですか？」

「いや、ちょっと世間知らずの教え子のことが気になってね。」

「世間知らずって……。」

「はは、まあ地球人はいい人が多いから、うまくやっていけると思うよ。」

「はい！ありがとうございます！」

元気にお礼を言うブレイブ。そんなブレイブを見て微笑んだ後、ミライはこう続けた。

「覚えていてくれ。最後まであきらめず、不可能を可能にする。それがウルトラマンだってことを。」

「分かってますよ。」

それを聞いて安心したミライは「そっか。」といった後

「この星での、君の日々の未来に、幸をあらんことを。」

そう言っただけで空間から消えた。

ブレイブは

「日々の、未来……。」

そう繰り返していた。

その頃、光の国

ブレイブとの会話が終わった後、メビウスは一人宇宙を眺めていた。

「気になるのか？」

後ろから声がする。

「セブン兄さん。」

そこに現れたのはブレイブの尊敬するゼロの父、かの有名なウルトラセブンだった。

セブンはメビウスの隣に立った。

「彼はまだ未熟です。それに、彼は戦士としては優しすぎます。それが良いところなのですが、その心を利用されないか心配で……。」

「だが、やつを推薦したのはお前じゃないか。」

「そうなんですけどね……。本当は地球でいろいろなものを学んでほしいんですけど、その分だけ心配もあつて……。」

「それが、親心というものだろうな。」

「かも、しれません。」

そう言つてまた宇宙を見上げる。

（無理だけはしないでくれよ、ブレイブ。僕の――）

戻って地球、海鳴市のとあるマンションの一室

「う、うゝん、ここは？」

一人の青少年、ブレイブが目覚めた。
その横で、長い金髪をツインテールにした少女が顔を覗き込んでいた。

「あ、気が付きました？」

「君が、僕をここへ？」

「いえ、私が倒れてるの見つけて、アルフ、私の友達が運んできてくれました。」

「そっか、ありがとう！」

起き上がり、バツと勢い良く、深くお辞儀をする。

「あ、えと、どういたしまして……………／／／／／」

あまりにハッキリとしたお辞儀に少し照れている。

そのとき

「フエイトゝ、今帰ったよ……………！」

犬のような耳と尻尾を生やした割と背の高い女性が入ってくる。

と同時にブレイブを睨みつける。

その視線に何事もなく対応するブレイブ。

「あ、あなたがアルフさんですか？」

「そうだけど。」

まだ警戒している。

「助けていただいて、ありがとうございます！」

さっきと同じように深くお辞儀をする。

「へっ？」

さっきの殺気はどこえへやら。ブレイブのお辞儀に思わずすっとなきょうな声を出すアルフ。

金髪の少女、フェイトの方を見ると、苦笑いを浮かべている。

「とりあえず、あんた何者だい？」

殺気はといて普通に話しかける。

「あ、知ってると思うけどあたしがアルフ。そっちはフェイトな。そう言って自分とフェイトを指す。」

「あなたの名前は？」

「えーっと……。」

必死で考えるブレイブ。

（くそ、何でもこういうときにレクシーはいないんだよ！）
そんなことを考えていると

『ヒント！ブレイブはこの国では勇気って意味だ！』
レクシーの声がする。

窓の外に、レクシーがいた。

（ありがとう、レクシー！えっと……………うん、これだ！）

「ヒビノ・ユウキです！」

フェイトたちにそう名乗る。

「ユウキっていうんだ。」

そうして互いの自己紹介をした後、窓を開けてレクシーを入れる。

「その鳩、ユウキのかい？」

「鳩？……………ああ、うん、そうだよ……………」

鳩というのはレクシーのことである。

「あの、何でユウキはジュエルシードを持ってたの？」

フェイトがさつきから聞いたかったことを口にした。

「じゅえるしーど？」

ユウキはわかっていなかった。

「えーっと、その手の青い宝石のこと。」

ユウキの右手を指す。

「ああ、これ？さっきのベムラーとの戦いで見つけたんだ。」

「ベムラー？」

「うん、あの怪獣のこと。」

「何であんたがそんなこと知ってんだい？」

「へ？だって僕がそのときいた巨人ですから。」

何とビックリさらつと正体をばらした。

「「ええ~~~~~~~~!!!!!!??.?」」

フェイトとアルフの声が木霊す。

「まあ、それはいいとして」「よくないよ!」「これがどうかしたの?」「フェイトを流して質問する。少し言いにくそうにしていたフェイトだが

「あの、それを私にください。」

そう告げた。

「別にいいけど、どうして？」

「え？」

「これは怪獣をより凶暴にできるほどの力を持つてるんだ。そんな危険なものを、どうしてほしいと思ったのか気になってね。」

「……………母さんの頼みで……………」

「お母さんの？」

小さくうなづくフェイト。

それを見て、聞いたユウキは

「ううゝ、グスツ、エグツ……………」

泣いていた。

「ふえ？え、えと……………！」

「ユ、ユウキ、大丈夫かい？」

「グズツ……………うん。何か、すごくお母さん思いなんだなあと

思ったら感動しちゃって……。」

それを聞いたフェイトとアルフがキョトンとしていたのは言つまでもない。

その後、少し落ち着いたユウキは

「さて、それじゃあ僕らはそろそろ……。」

そう言つて失礼しようと思つたら

「えっ？」

フェイトに行つちやうの？的な目をされた。

「いや、さすがにずっといるのは良くないんじゃないよ。」「いいの？」

「うん、私とアルフだけしかいなくて、ちょっと寂しかったし。」

それを聞いてうーんと唸つた後、

「わかった。それじゃあしばらくお邪魔するよ。」

と、いうことになった。

そしてゆっくりしようと思ったが

「キイイイイイイイイイイイ！！！！」

外から声がする。

そこにはなんとエレキングがいた。

「あれは？」

「エレキング！？！」

驚いていると、エレキングが青く光る。

「またジュエルシードか！」

光が止むと、そこには大きな爪と漆黒の翼をはやしたエレキングがいた。

「しかたない、レクシー！」

『おう！本日二回目でしかも夜だ！さつさと決めるぜ！』

今まで空気になっていた『空気いうな！』レクシーを呼ぶ。

ブレイブブレスを構え

「さあ、行くよ！相棒！」

『ああ！ってなぜにフィリップ！？』

レクシーの突っ込みを無視し

「ブレイーーーーブ！！」

変身するユウキ。

それに続いて巨大化し、ブレイブの右腕にくつつくレクシー。

「セアッ！」

エレキングに突っ込むが、三日月状の光弾を放たれる。

一瞬よけようとするブレイブだが、後ろにフェイトのマンションがあるのを思い出しもろにくらってしまう。

「グッ……！」

そのまま尻尾で首を絞められ、電撃を喰らう。

「ゼアアアアアア！」

ピコンピコン

カラータイマーも鳴り始める。

（やっぱり、エネルギーが足りない。）

マズイと思ったそのとき

「ユウキ！」

フェイトの声が聞こえた。

「ユウキ！がんばって！」

（フェイトちゃん……。うん！）

自分に気合をいれ、尻尾を握り締めるブレイブ。

そして

「ハアアアアアアア……ゼアアアアアアア！」
尻尾を引きちぎる。

「キイ!?!」

尻尾を切られ苦しむエレキング。

たまらず空に逃げようとするが

「逃がすか!レクシー!」

『おうよ!』

鳥の形でくつついていたレクシーが、翼を前にやり、剣の様な形になる。

それに手をかざすと、翼に沿って光の刃ができる。

「僕のビッグバンは、もう、止められないよ?」

そう言って右手を腰に添え、左出を前に出す。

「ギャラクシイイイイイ!!カノン!!」

そう叫ぶと同時に左腕を引いて右腕を前に出す。

すると光の刃から光線が出る。

それがエレキングを貫き、爆発させる。

そこに残ったジュエルシールドを掴み、フェイトのマンションに戻るブレイブ。

それをじつと見ていた黒い陰。

「一日に二回の戦闘、それに夜なのにここまでとは……。なか
なかですね。」

それはなんと人間体ダークゴーネだった。

「まああのお方の敵ではありませんがね。」
そっぴい残してその場から消えた。

第2話 師匠の言葉（後書き）

いかがでしたか？

ちよつと詰め込みすぎた気がしますが……（汗）

そんなことは気にせず、今回はユウキことウルトラマンブレイブに来ていただきました！

ユ「初めまして！（あのお辞儀）ヒビノ・ユウキです！よろしくお願ひします！（ミライスマイル）」

いやゝ、ほんとに師匠そっくりだ。で、どうだった？久しぶりの師匠とお話は？

ユ「うん！すごくうれしかったよ！ずっと教えてきてくれた人だからね。すごく尊敬してるし！」

うんうん！喜んでもらえたならいいや。では、そろそろ例のアレを。

ユ「はい！次回、タイトル未定！

無限大の勇気が、未来を開く……。」

第3話 ユウキの朝ごはん（前書き）

すごく久しぶりの更新です！

いやゝ、天然キャラって動かしづらい（笑）

今回は後のキーパーソンが登場します。お見逃しなく！

第3話 ヌウキの朝ごはん

「ふわぁーあ、・・・・・・・・あれ？ベッドにいる？」

ブレイブことビビノ・ヌウキは目を覚ました。だがなぜ自分がベッドにいるのか理解できなかった。

そして自分の横にもう一つの膨らみがあるのに気付く。

布団をめくってみると、すやすやと寝息を立ててフェイトが寝ていた。

それを見て少し微笑んだ後、布団から出て、フェイトに布団をかけなおす。

リビングに行くと、アルフがドッグフードをむさぼっていた。

「アルフさん、おはようございますー！」

地面に頭が付きそうな勢いで挨拶するヌウキ。

それに若干驚きつつも

「おはよう、昨日は良く眠れたかい？」

と返す。

「はい！おかげさまで。．．．ところで、それは？」

ドッグフードを指差す。

「これ？朝ごはんだけど？」

いたって普通に返す。

「．．．．．損してます！」

ビシッとアルフを指差す。

これにはアルフもかなり驚く。

「せっかく地球にいるのにカレーを食べないとは何事ですか！損してます！地球を損してます！」

もはやだんだん意味分からなくなってきているが、なんとなく言いたいことは伝わる。

まあようはカレー食おうぜ！ってなことだが。

「まあちゃんとした食事をしたほうがいいってのはあたしも思ってたんだけどね。フェイトがいいって言うんだよ。それに……。」

「それに？」

「……あたしもフェイトも、料理できないんだよ……。」

沈んだ声で話す。

それを聞いたユウキは

「分かりました！今日の朝ごはんは僕が作ります！」

「え？ちよつ「行つてきます！」お金あんの？……って行つちやつた……。」

マンションから少し離れたところ

勇気はコンビニに向かって走っていた。

途中でレクシーに会う。

「あ！レクシー、どこ行ってたのさ！」

『お前の個人情報を捏造してきた。』

ほい。と言つて保険証をユウキに渡す。

『それぐらいないといろいろまずいからな。それと、お前はここではヒビノ・ユウキ15歳。だからな。複雑な事情により学校には通つてはいないって設定の。』

「ん、ありがと。」

保険証をポケットにしまう。

『んで、お前はそんなにあわててどこ行こうとしてたんだ？』

「じつはかくかくしかじか……。」

『ふむふむ……なるほど。でもな、カレー作ったって、お金が必要だぞ？』

「えゝ！？そんなの持ってないよ？」

『お前ほんとノープランだよな。そう言うと思って、ちゃんと用意してきたぜ！』

そこから2万3千円をとりだし、ユウキに渡す。

「ありがとう！でもこれどうしたの？」

『なんか一芸やったらくれた。』

「へゝ。」

コンビニで買い物を済ませたユウキは、フェイトのマンションに帰ってきた。

「ただいま〜！」

『俺、参上!』

ちなみに、レクシーはフェイトやアルフにも元の姿で見れるようにしてある。

「あ、ユウキ!どこ行ってたの?心配したんだよ!」

フェイトが詰め寄ってくる。

「ごめんごめん、今からカレーを作ろうと思ってね。キッチン借りていい?」

「ふえ?あ、うん、いいけど・・・。」

手洗いうがいを済ませ、キッチンでカレーを作り始めるユウキ。

「ねえアルフ。」

「なんだいフェイト?」

「ユウキ、大丈夫かな？」

「それはあたしも思ったよ。なんかあいつって」

「不器用そう……。」

見事にフェイトとアルフの声が重なる。

レクシーは外で太陽エネルギーをチャージしてる。

「うゝ……包丁で指切ったりしないかなあ？あ、やけどしちゃうかも……。あうゝ……。」

そわそわしながらユウキが来るのを待つ。

「フェイト、少し落ち着きなって。大丈夫だよ。」

多分……。」

やはり不安なアルフであった。

「できた！」

その声に二人が背筋を伸ばす。

フェイトにいたってはまだ朝食をとっていないので我慢の限界だ。

「はい、どうぞ！」

3人分のカレーをテーブルに置く。

ユウキが手を合わせ

「いただきますっ！」

と元気よく言った。

見よう見まねでフェイトたちもそう言い、カレーを一口口に入れた。

「どうかな？」

ユウキが感想を求める。

「あ……。」

「あ？」

「おいしい！」

「うまいこれ！」

アルフが勢いよく食べる。

フェイトも少しずつではあるが、スプーンが止まらない。

「「おかわり！」」

その後、1週間×3食カレーだったか……

別の日、フェイトたちは出かけており、レクシーは稼ぎに行ったため、ユウキは一人屋上にいた。

ブレイブの姿に戻り、プロテクターにエネルギーをためる。

地球は光の国より太陽エネルギーが弱いため、こまめにエネルギーをチャージしないと、ブレイブのような新人は戦うことができないのだ。

ある程度チャージが終わった後、レクシーに進められた図書館に行った。

一般常識をある程度身につけさせるためである。

そこで本を眺めていたとき、一人の少女が目にとまった。

脚が弱いらしく、車椅子に乗っている。

そのため高いところの本がとれず、必死に手を伸ばしていた。

ユウキは急いでその子に駆け寄った。

「これ？」

本を指差しながらたずねる。

「あ、はい、そうですう……。」

少し訛りがあつたが、ユウキには分からない。

はいと言って本を渡した後、他にとりたい本をとってあげた。

その後本を借り、ユウキは車椅子を押していた。

「何から何までありがとうございますう。あ、私八神はやていいます。よろしければ、お名前を……。」

「ヒビノ・ユウキ！よろしくね！はやてちゃん。」

笑顔でそう答えるユウキ。

「はい、ユウキさん。……あ、ここまででええですよ。兄が来ましたので。」

視線の先には、兄と思われる人物がユウキに頭を下げていた。

ユウキも頭を下げ返す。

「そつか。またね、はやてちゃん。」

「はい。あの、今度良かったら家にいらしてください。お礼がしたいので。」

「あはは、お礼なんていいよ。まあ、あそびに行くだけだったらいいよ。」

「はい。それじゃあ。」

そう言って兄と共に帰っていった。

「やっぱり兄っていいね。」

そうつぶやくユウキ。

「はやて、さっきの人は？」

「ん？ヒビノ・ユウキさんゆつてな、とっても感じのええ人やったよ！」

帰り道、兄と共にそんな話をするはやて。

「そっか、確かにいい人そうだったな。」

「どっかの誰かさんと違ってな！」

ニヤつきながら車椅子を押す兄を見上げる。

「はやて、それどっいう意味だ？」

「あはは、冗談だよ。翔兄いは私にとつたら最高の兄や!」

「はやて……。サンキュ……。」

恥ずかしさで最後の方は声が小さくなる翔。

「でもユウキさん、どうか翔兄いに似とつたんよね。どこやる?」

「俺に聞かれてもなあ……。」

このときは、まだ誰も知らなかった。後にこの兄妹が物語に大きくかかわることに。

そして、青年の腕に不思議な形のブレスレットがついていたことに。

第3話 ユウキの朝ごはん（後書き）

いかがでしたか？ブレスレットの青年、八神翔とは一体何者か？

後、今日から仮面ライダーオーズの小説も書き始めました。そのせいで更新が超不定期になりそうですが、もしよろしければ見てください。

ではでは、次回の更新でお会いしましょう！

番外編 ブレイブの過去？（前書き）

久々の更新だぁ・・・・・・・・。

今回はブレイブの生い立ちについてです！

なんとあの方が親・・・・・・・・！

番外編 ブレイブの過去？

今からちょっと前のこと。

後にウルトラ銀河伝説と呼ばれる対戦が行われたとき。

悪のウルトラマン、ベリアルがザラブ星人の手により脱獄し、光の国に反旗を翻したあの事件。

そのとき、僕はベリアルに連れ去られた。

母さんの力を使い、ベリアルは怪獣軍団をよみがえらせた。

「母さん、僕行かなくていいの？」

ベリアルを見ながら、僕は母さんに聞いた。

「ええ。まだ時ではないわ。」

最近母さんはそればかりだ。

時が来る。

もう少しで勇者が現れる。

そんなことばかり言ってる。

まあ僕は力がないので、どうすることもできないけど。

ここから出られないし。

ウルトラセブンの命が消えようとしたとき、一人のウルトラマンが現れた。

見たことも……

いや、一度だけある。

随分と昔、力を欲しかった人だ。

昔はよんだ心があったのに、今は澄み切ってる。

「母さん、この人が？」

「ええ。さあ、貴方が力を授けるのよ。」

「はい、母さん。」

その人が伸ばした手に、僕も手を伸ばした。

その人が持っていた武器が弓形に変わり、倒れていた他のウルトラ戦士も立ち上がった。

そしてみんなの力でベリアルは倒された。

僕らはさっきの人に元の場所に連れてきてもらった。

「タロウさん、お疲れ様。」

そう言っ僕は彼の氷を溶かした。

母さんはもう光を星全体に送っている。

そのとき、さっきの戦いに参加していたウルトラマン、メビウスさんがセブンさんを連れてきた。

「—— よ、どうかセブン兄さんに、再び命の灯火を。」

僕らに言ってくる。

そして母さんはセブンさんに光を送った。

蘇ったセブンさんにお礼言われたが、母さんはメビウスさんを残した。

「さあ、貴方の動くときが来ました。」

「え？」

「今こそ、真の戦士として生きるときです。さあ、行きなさい、我が息子よ！」

「母さん……わかりました。」

母さんに言われた通り、体を構築しながらメビウスさんの前に出た。

体はあのと時の勇者の姿を、顔は今いるメビウスさんを元に、勇者の姿を足したもの。

体を覆っていた光が止み、自分の姿を眺める。

うん、イメージ通りだ。

「メビウス、貴方にはこの子を育てていただきたいのです。」

母さんがメビウスさんに頼む。

「なぜ僕なのですか？」

当然の疑問だと思う。

「貴方が強さと優しさを兼ね備えた戦士だから……。」

「……分かりました。」

そして母さんのところから離れ、軽い自己紹介をした。

「えっと、君は？」

「僕は……。」

まだ名前がなかった。

「そうだな〜……………ブレイブっていうのはどうだい？」

ブレイブ……………

「はい、いいと思います。」

「よし、じゃあこれからよろしく、ウルトラマン、ブレイブ！」

「はい！メビウスさん！」

その後はまあ、結構大変だった。

メビウスさんが教えてる訓練校に通い、戦士としての基礎を学んだ。
なにより大変だったのはディフレーター測定と呼ばれる日だった。
体内のディフレーター因子の量をしらべるのだが、僕が計測する
と……………

バジッ！

計測器が壊れた。

そりゃそうだろう。

ディファレーター因子の塊なんだから。

その後あの時選んだ勇者、ゼロさんに助けられ、目標にするのはまた別のお話。

それから時々僕は母さんのところに行っている。

プラズマスパークタワー

「母さん、今日も大変だったよ。」

『そう、でも、逃げ出しちゃ駄目よ?』

「分かってるよ。僕は逃げない。だって……。」

ゆっくり立ち上がる。

「母さんの、プラスマスパークの息子だからね。」

番外編 ブレイブの過去？ 完

番外編 ブレイブの過去？（後書き）

いかがでしたか？

そう、ブレイブはプラスマスパークから生まれた純粹な光の塊です。

その後のお話はまた別の機会に……。。

ではまた！

第4話 一つきりの命（前書き）

火山怪鳥バードン 登場

登場怪獣とタイトルはメビウスと同じですが、決定的に違うところが・・・。

第4話 一つきりの命

今日もユウキは朝早く目覚めた。

軽くストレッチをした後、朝食を作り始める。

ユウキは食事当番になっているのだ。

さすがにカレーは自重したが。

いつもなら3人分作るのだが、今日はフェイトとアルフが温泉に行
ってしまっているため一人分だ。

フェイトが最後まで

「ユウキ、出歩くときは車に気をつけてね？食事もとりすぎちゃ駄
目だよ？体調悪くなったらいつでも連絡してね？火傷とかにも気を
つけてね？包丁で怪我しないでね？」

とか言ってたのもいい思い出だ。

今日はご飯と味噌汁と卵焼きという朝食だった。

（うーん、レクシーもないしヒマだなあ……。）

と思っていたが、まあそんなにヒマが長く続くわけもなかった。

別の場所

山の頂上に、スーツを着た眼鏡の男性が立っていた。

「さあ、目覚めなさい！バードン！」

右手から出した青い球体を火口に打ち込んだ。

その中から聞こえる甲高い泣き声に笑った後、影の中に消えていった。

海鳴市

（ん？この感じ……。）

ユウキは妙な気配を感じていた。

そしてベランダに出ると、火山怪鳥バードンがこちらに向かってきていた。

（レクシー！聞こえる！？）

レクシーにテレパシーを送る。

（ああ。バードンだろ？こっからも見えてる。）

（また流れ弾が当たらないようにしてってくれる？）

（大丈夫なのか！？バードン相手に一人で？）

（教官が言ってた。最後まで諦めず、不可能を可能にする。それがウルトラマンだって！）

（・・・分かった。任せたぞ。）

（うん！）

そしてブレイブブレスを左腕に出す。

「ブレイーーーーブ！！」

サークルを回転させ、光に包まれる。

「シェア！」

ブレイブの姿に戻り、空中でバードンの軌道を変える。

くちばしを掴んで放り投げ、海に落とす。

（とりあえず、火炎だけでも封じないとね。）

海上でファイティングポーズを取る。

バードンも立ち上がり、こちらを睨みつける。

「シェア！」

パンチを食らわせ、バードンがよろめく。

「ハア！ハッ！」

連続でパンチして、バードンを吹っ飛ばす。

（おかしい。バードンってこんなに弱いのか？そんな訳……）

そう考えていると、バードンが青く光り始めた。

（まずい！）

ブレイブは焦るが、バードンは苦しみ始めた。

「キエエエエエー！」

しばらく悲鳴を上げた後、光が止む。

そこにいたバードンは、先ほどと全く変わっていなかった。

（なんでだ？なんでバードンは姿が変わらないんだ？）

以前のベムラーやエレキングは姿が変わり、強力な力を手に入れた。

だが今回は逆だ。

姿は変わらず、逆に弱っているようにも見える。

そのとき、ブレイブの耳に何者かの声がした。

（たすけて！）

（えっ！？）

一瞬その声が誰から発されているのか分からなかった。

（たすけてっ！）

再び声がした。

そこにいるのは、じつところこちらを見ているバードンだけだった。

「まさか……君なのか？」

ブレイブの問いに、ゆっくり頷く。

「……そうだね。苦しいよね。いきなり起こされて、変なの埋め込まれて……。」

ギョツと拳を握り始めるブレイブ。

その心には静かにダークゴーネたちへの怒りがわいていた。

（この子は元々、この星の怪獣なんだ。ずっと目覚めなかったから確認されてないだけで。本当はこの星が大好きなんだ。）

その思いが伝わってきたブレイブは、バードンにこう言った。

「待ってて。今助けてあげるから……。」

ブレイブスラッガーを2本つなげ、巨大な弓にする。

最後の1本を矢としてセットし、構える。

「スラッガー……シューティング!」

矢を放ち、ジュエルシールドをバードンから離す。

（今だ!）

バードンに何かを投げる。

そしてバードンは丸い光に包まれ、ブレイブの手に戻った。

（カプセルをもらっというて良かった。）

その手にはウルトラセブンが使っているのと同じ形のカプセルが握られていた。

ジュエルシールドを掴み、家に戻った。

その後帰ってきたフェイトに散々聞かれたのは言うまでもない。
（主に過保護の意味で）

この日、ユウキに新たな仲間が加わった。

第4話 一つきりの命（後書き）

と言うわけで、バードンが仲間に加わりました！

というか最近なのは要素が少ない・・・。

次回はなのは要素を多めにしたいと思います！

第5話 デバイスの作り方（前書き）

ユウキが壊れた子になった・・・。

第5話 デバイスの作り方

ことの発端は、ユウキのこの一言だった。

「ねえねえ、フェイトちゃんがいつも磨いてるそれ、なんなの？」

朝のふとしたときにユウキが聞いたことがそれだった。

「これ？これはバルディツシュっていう、私の大事な相棒だよ」

いつものフェイトからは想像もできない『相棒』という単語に、ユウキは少し驚きを見せる。

「バルディツシュ……」

「そう。デバイスっていう、私達魔道士の杖みたいなものかな？」

「ふえ……」

それを聞き、顎に手を当てて考える仕草をするユウキ。

静かに時計に秒針の音と、アルフの寝息が聞こえる……。

「それだっ!!」

突然ユウキが左手を上に掲げて立ち上がる。

いきなり大声を出したので、アルフが飛び起きる。

「フェイト！何事だい!？」

「ア、アルフ……わかんない……」

起きてきたことにリアクションしたは良いが、それ以上言葉が見つからず口を閉じるフェイト。

そんなものにかまわずユウキはレクシーを呼び出す。

「レクシー、光の国から色々持って来てたよね？」

『んあ？これのことか？』

レクシーのクリスタルの部分から様々な工具が出てくる。

どこかで見たことある様なのもあれば、どこでも見ないような異形の物まで様々だった。

「光を魔力に変換するプロセス．．．となるとB - 2561とG - 5910をベースにして．．．」

何か急にブツブツ呟きだすユウキ。

「あ、あれはどうしちゃったんだい．．．？」

「さ、さあ．．．．．？」

『突っ込まないでやってくれ．．．』

その冷やかな目線に気付くことはなかった。

マジかこの人！？

「ほら！」

その手にはアイスラッガーに似た形の道具があった。

「これが……？」

「ユウキの……？」

『デバイス……？』

見事な連携でしゃべるフェイト、アルフ、レクシー。

「うん！」

無茶苦茶良い笑顔で言うユウキ。

それにちよつと赤面しながらもフェイトは

「あう／＼／あ！な、名前はなんていうの？」

できるだけそれを悟られないように話をそらした。

まあバレッバレだけどね

「フェニックスブレイブだよ！」

フェニックスブレイブ。

それはユウキことウルトラマンブレイブの師匠でもある、ウルトラマンメビウスが地球人、そしてウルトラマンヒカリと一体化することとで誕生した奇跡の戦士である。

「あれ？でもなんでユウキは急にデバイスを作ろうと？」

アルフが当然の疑問をぶつける。

「ん？いや、僕一人じゃジュエルシードの封印ができないので・・・ずっとフェイトちゃんに頼りっぱなしなのも悪いかな」と思ったので・・・」

頭をかきながらバツが悪そうに言うユウキ。

「そんな・・・気にしなくて良いのに・・・」

若干寂しそうなフェイト。

なんて言うか親離れしようとしてる息子を見る様な目でユウキを見る。

「あ！で、でも！まだ試作品だから、しばらくはフェイトちゃんに頼ることになるけど・・・良い？」

慌てたユウキ（アルフから何とかし！というの様な殺気は来ていない。来てないっいたら来てない）は、即座にフォローを入れる。顔の前で手を合わせ、かわいらしく小首をかしげるユウキ。

それに一気に目を輝かせたフェイトは、その日はご機嫌だったという・・・。

おまけ

どこかの一軒家。

「ひとつ！ハラペコのまま学校に行かぬこと！
ひとつ！天気の良い日に布団を干すことお！
ひとつ！道を歩くときは車に気をつけることつ！
ひとつ！他人の力を頼りにしないことお！
ひとつ！土の上をはだしで走り回って遊ぶことおお！！」

と、裸足で布団を干しながら青年は叫んでいた。

「兄ちゃんづるさい……」

窓から車椅子に乗った少女——八神はやて——が眠そうに兄——八神翔——に言った。

「いい加減慣れろ！ずいぶんたつんだから！」

「ちよつと前まで無かったやん……」

そんな会話が日常化している八神家の風景。

彼のブレスレットは未だ光を放っている……。

第5話 デバイスの作り方（後書き）

はたして翔は何者なのか！？

あのプレスレットは何か！？

その謎はしばらく明かされません・・・。

第6話 兄の救援（前書き）

今回は説明台詞ばかりです。

しかもちよつと詰め詰めになつてしまいました・・・。

ですがラストにあの方が登場です！

第6話 兄の救援

「ゼアッ！」

ヒビノユウキことウルトラマンブレイブは、レギオノイドα3体を相手に戦っていた。

「邪魔をするなあああ！！！」

ブレイブがキレている理由、それはつい先ほど、フェイトと高町なのはと名乗る魔道士がジュエルシードをかけて戦おうとした際、クロノと名乗る魔道士が現れ、それを止めた。

そこまではいい！

その直後にレギオノイドが現れ、3人を狙って攻撃し始めた。

それを見たユウキが変身し、今に至る。

「ゼエエエエアアアア！！！」

レギオノイドを殴り飛ばすブレイブ。

一方フェイト達の方では、フェイトがこの隙にジュエルシードを取ろうとした際にクロノが攻撃し、ひと悶着起こっている様だ。

「くらえ！」

ブレイブがブレイブスラッガーをカラータイマーの横に装着し、両手をその水平に添える。

「ブレイブ！ツインシュウウウツト！！」

ブレイブ最大級の技を放ち、レギオノイドを一掃した。

人間体に戻ったユウキは、すぐにフェイト達の元に駆け寄った。

（ユウキ！）

アルフからの念話が届く。

（アルフさん！フェイトちゃんは！？）

（大丈夫、何とも無い。それより、あたし達は一旦撤退するけど、あんたはどうするんだい？）

（あの真っ黒の人と話してみる。二人の友達っていうのは伏せといったほうがいいかな？）

（そうしてくれると助かるよ）

（うん！じゃあフェイトちゃんにちゃんとご飯食べてしっかりお休みって伝えといてね！）

（あいよ！）

念話を終え、クロノがユウキの方に歩み寄ってくる。

「君も同行願おうか」

「言われなくてもそのつもりだよ」

一向はクロノの所属する、アースラと呼ばれる戦艦に転送された。

アースラ内

アースラの中に入った。

そのときにユーノというフェレットが人間の姿になり、一悶着あったが気にしない。

そのさいユウキが「ザラブ星人!？」とか言ってたのも気にしない。

「艦長、連れてきました」

「ご苦労様、クロノ」

そこはまさに和風、といった部屋だった。

啞然とするのはと、目をキラキラさせるユウキ。

何この温度差。

「さて、まずはこちらから話そうかしらね」

ユウキ達はジュエルシードについての説明を受けた。

ロストログアと呼ばれる、危険なものとして指定されている。

（ウルトラキーみたいなもんかな？）

コーノがそれを発掘し、輸送してる途中で船が事故に遭い、ここまですべて来た。

ジュエルシードを21個集めて発動すると、何かもうすごい事が起こること。

「以上です。何か質問は？」

「様はウルトラキーの悪い奴ですね！」

『は？』

「いえ、続けてください」

「続けると言っても、次は君の事を聞きたいのだが」

「あ、私も・・・」

なのはも初対面である為、ユウキの事は何も知らない。

「あの巨人の姿はなんだ？」

「あゝ、見られてたか……」

反省っ！と頭を叩いた後、ユウキは自分、もといウルトラマンについて話し始めた。

元は人間と同じ姿だった。

だがあるとき、その星を照らしていた太陽が爆発した。

闇が星全体を覆い、人々も絶望し始めていた。

だが当時の科学者達は人工太陽を完成させ、永遠の光を手に入れた。

そして住民達はその星を、『光の国』と呼び始めた。

だがそれだけではなかった。

何者かの手によって人工太陽の光に細工が施され、彼らは超人の姿になってしまった。

「とまあ、ここまでが一般的なウルトラマンの説明。大丈夫？」

みんな頭を抑えたり、うーっと唸ったりしているが、ユウキは話続ける。

「中でも僕は特殊でね、その人工太陽から産まれたんだ」

プラズマスパーク

「太陽から？」

「そつ。それで任務を帯びてここに来たつと」

説明を終え、皆が情報を整理していたとき、クロノが口を開いた。

「それはロス「ロストロギア」ではないですよ？」なぜだ？」

「じゃあ逆に聞きますけど、皆さんがドラゴンばかりいる世界に行ったとして、そのドラゴンが危険で強いからって、ロストロギア扱いしますか？」

「それは……」

「そういうことです。以上でよろしいですか？」

一応確認を取る為全員を見渡す。

そこで艦長であるリンディが尋ねた。

「貴方は私達の味方なのかしら？それとも……」

「僕は人間の味方ですよ。いつだって」

そう言ったユウキは、立ち上がって一礼し、誰もいない所でテレポ
ートして地上に戻った。

地上

降りてきたユウキは、公園をブラブラ歩いていた。

そこでピタッと止まり、後ろを睨む。

「そろそろ出て来てもいいんじゃないか？ダークゴーネ！」

木の陰からゆっくりダークゴーネ（人間体）が出てくる。

「ほう、この私に気付くとは、中々の腕前で」

「何が目的だ！」

さっきまでとは打って変わり、鋭い口調で問うユウキ。

「それをしりたければ……っ！」

手から何かを発射する。

それがみるみる姿を変え、ウルトラマンゼロに似たロボット、ダーククロス3体に変わった。

「あいつらを倒し、自分でこちらまで来て下さい」

ぬるりと影の中に消えるダークゴーネ。

「待て！」

ユウキが掴みかかるが、その腕は空を切る。

その間にも、ダーククロスは町へ進んでいつている。

（バードンはレクシーと一緒にだし、そのレクシーはまだ充電中か……）

連戦で疲れが残っているが、ブレイブブレスを左手に出現させ、サクルを回す。

「ブレイーーーーブ!!」

叫ぶと同時に腕を上げ、ユウキがブレイブの姿に戻っていく。

「ゼアッ!」

ゆつくりとダークロプス達に対峙する。

『ウルトラマンブレイブを確認。破壊する』

リーダーらしき機体が指揮を執り、ブレイブを囲んだ。

「ハアッ!」

ブレイブの拳をいとも簡単に避け

「ダッ!」

同時に鋭い蹴りを叩き込む。

「ゼッ……」

ふらついたところに

「デアッ！」

光線を浴びせ、ブレイブのカラータイマーが点滅する。

（まずい……エネルギーが……）

ブレイブが膝を突き、両手で体を支えている中、ダーククロプス達が迫ってくる。

一体がスラッガーを振りかざした瞬間、それが爆発する。

「せあ？」

ブレイブとダーククロプス達が首を傾げていると、上空に何者かが浮かんでいた。

「まったく！どうして俺の弟共はこうも手がかるんだ！？」

その戦士の口調は荒っぽく、それでいて優しさを感じた。

「もしかして貴方は！」

ブレイブは心当たりがあるようで、その戦士に向かって叫ぶ。

「ゼロ！ウルトラマンゼロ！セブンの息子だ！！」

ウルトラマンゼロがそこに現れた。

第6話 兄の救援（後書き）

ゼロ！ゼロ！ゼロ！ ゼロ！ゼロ！ゼロ！はるかな星がふる
　　さ　と　だ　！

・・・ゼロの人間体の名前どうしよ・・・？

第7話 ゼロの失態（前書き）

日々野未来さんから零斗の、ディワールドさんからランの名前の使用許可をいただけたので、足してみました。

第7話 ゼロの失態

「ゼロ！ウルトラマンゼロ！セブンの息子だ！！」

ウルトラマンゼロと名乗った巨人は、急降下してダークロプス達を吹き飛ばした。

「大丈夫か？ブレイブ」

「うん・・・ありがとう、ゼロ兄」

「ああ！」

立ち上がったダークロプス達を睨みつけ、疾風の如く殴りつけていく。

「はっ！こんな量産型に、俺のビッグバンが止められるかよぉ！」

ゼロスラッガーをプロテクターの横に装着する。

「ゼロ！ツインシューーーット！！」

ただの一撃でダークロプス2機を破壊するゼロ。

二人の体が光に包まれ、人間体になる。

ゼロの方は、かつて借りていた『ラン』という青年と同じ姿である。

「ふう、ありがとうゼロ兄、助かったよ」

「うんにゃ、レイにはおよばねえ」

「所で何でここに？ニート？」

「お前意味分かって使ってたんだろうな？」

「うん！働いてない暇な人のことだよね！」

「分かった上で俺に言ったと・・・。

まあそこはいい！ウルティメットフォースゼロはな？多次元宇宙を専門に活動してるんだよ」

「知ってるよ」

「つまり！ここも管轄内ってことだ！」

「おおー！！」

妙に納得するユウキ。

「んで、しばらくは地球に留まる事になったから」

「ほんとに！？じゃあ人間名は決めてあるの？」

「おう！」

自信満々に胸を張るゼロ。

「モロボシ・レンだ！」

ドヤ顔でユウキに言うレン。

だがユウキは……

「ええー！？似合わないー！」

めっちゃ嫌そうな顔をしていた。

「んだと！？お前これランと分離してからずっと考えてたんだからな！？？」

・・・この人暇だろほんととは。

「まあゼロ兄が良いなら僕は止めないよ」

「お前何様だこら」

最近ユウキが天然毒舌キャラになってる気がする……。

「それじゃあさ、僕が住まわせてもらってる子の家来る?」

「いや、さすがにそこまで弟に世話になるわけにはいかねえからな。自分で探すさ」

「そつか。・・・あ! フェイトちゃん待ってるから帰るね!」

「おう! 気をつけろよー! 迷子になるなよー! 知らない人に着いてくなよー! ちゃんと飯食えよー! 横断歩道は手を上げろよー! なんつーかもつ無事にたどり着けよー!」

半分ぐらいユウキには届いてないのだが、それでもこの男はしゃべり続ける。

・・・ブラコン?

「さて、暗いし宿でも探すか!」

久々に弟分に会いスキップしながら進むレン。

「あれ？ゼロ兄・・・もといレン兄はお金あるのかな？
まあ大丈夫だよね！」

何気に適当なユウキである。

「・・・大丈夫だよね？」

やっぱり心配だった・・・。

その頃のゼロ

（やべえ・・・）

早速ピンチに陥っていた。

（金が、ねえ！）

真剣な顔で止まっている為、通行人には『真剣にアスファルトを見つめるイケメン』ということで見られている。

人通りもなくなり、街灯がポツリと道を照らす中、レンの身に異変

が起きる。

（グッ・・・あっ・・・）

思わずその場に倒れてしまうレン。

（なんだ？体に力が入らねえ・・・。やっぱりブレイブが心配だから
ってレギオノイド1000体抜きはきつかったか？）

こいつ能力無駄にしてるよ！って思った人、そつと挙手ノ

そこに、栗色のツインテールをピョコピョコ揺らしている少女が近づいてきた。

「だ、大丈夫ですか!？」

レンに駆け寄り、顔を覗き込む少女。

「あ、ああ。なんでか知らねえけど体に力が入んねえんだ・・・」

「ええ!？えと、えと、こついつときは110番だっけ!？」

パニックに陥り、警察に突き出そうとする少女。

・・・うんもうそれでいいよ。

「だいじょ【グウ】な、なんだ！？敵襲か！？」

突然鳴った音に警戒するレン。

「あの、それってお腹が空いてるだけなんじゃ・・・？」

「腹が、空く？」

高町家

「すみません、何か飯も作ってもらっちゃって・・・」

「ううん、気にしないで」

先ほどの少女、高町なのは家にお誘いを受けたレンは、そこで夕食を恵んでもらった。

「レンさん！お家どこですか？」

頬を赤らめレンに質問するのは。

お譲ちゃん、こんな変な奴に惚れちゃダメだよ。

「え？あ・・・と・・・」

（やべー！なんて説明すりゃいいんだ！？）

あーとかうーとか言いながら言葉を選ぶレンに、なのははしまった！という顔になる。

「ごめんなさい！私、その、無神経なこと聞いてちゃって……」

「え！？いや、あのな・・・」

「お母さん！レンさんここで暮らしてもいいよね！？」

「うええ！？ちよ、ちよとま」

「そうね。レン君、今日から貴方の家はここよ」

「い、いやだから……」

「レンさん！もうみんな家族ですからね！寂しくなんかいいですかね！」

「話を聞いてくれええええええ！！！」

レンのその叫びが聞こえることは無かった。

一方テストロッサ家

「ただい「ユウキ!!」へアッ!？」

突然のタツクルに思わず素の掛け声を出してしまうユウキ。

「ユウキ!大丈夫!?怪我とかしてない?知らない人に何かされてない?事故に遭ってない?なんていうか何事もなく帰ってこれた?」

「うん。大丈夫だから離してフェイトちゃん。痛い・・・」

「あ、ごめん・・・」

ユウキがバキバキ言うほどの力で抱きついていたフェイトから解放

され、大きく息を吐くユウキ。

「心配かけてごめんね。僕はこの通りピンピンしてるから」

「うん。良かった・・・」

「さ、ご飯食べよ!」

「うん!」

こうして、テストロッサ家のドアは閉じられた。

「そっだ!今日はカレーに・・・」

「「ごめん無理」「」

八神家

黙って翔が夜空を見上げていた。

（来たのか、ゼロ・・・）

ブレスレットが強く輝く。

「翔兄い？」

はやてが目を擦りながら近づく。

「なんだはやて？夜更かしすんなってあれほと言ったろ？」

「翔兄いに言われたかないで・・・。それより、じゃん！」

枕を出すはやて。

「あ、それ俺の・・・」

「一緒に寝よ？」

小首をかしげて尋ねるはやてに苦笑いしながら

「はいよ」

窓を閉め、二人で寝室に向かった。

(ま、今の俺には関係ねえか)

第7話 ゼロの失態（後書き）

しばらくは（残念な）ゼロのキャラ紹介も兼ねた日常編になります。

・・・ほんとはゼロってあんなバカでしたっけ？
なにか見失ってる気がする・・・。

番外編 キミの温もり（前書き）

とある家族のお話です。

ちよつとネタバレがありますが、それでも良い方はどうぞ！

番外編 キミの温もり

彼女と出会ったのは9年前。

いや、厳密には8年と10ヶ月くらいか。

最初は観察が目的だった。

多次元交点観測員として・・・。

だがあるとき、彼女の両親はこの世を去った。

たった一人、当時2歳だった娘を残して。

俺は見てられなかった。

少しでも、彼女の傍にいてやりたい。

せめて立派になるまでは、自分が面倒を見てやろう。

いつしかそんな感情が芽生えた。

俺は6歳前後の子供姿をとり、彼女と過ごし始めた。

『八神翔』と名乗って。

まだ幼かった彼女は、俺を本当の家族だと思い込んだようだった。

そこから、兄妹としての生活が始まった。

原因不明の麻痺により彼女は足がうまく動かせなかった。

そのため友達はおらず、唯一俺という存在だけが心安らげる場所だったのだろう。

彼女はかなりの甘えん坊に育った。

それでもいい。

彼女が安心できるなら、俺はいつまでだって傍にいてやる。

ある七夕の日、『笹の葉』とやらに『短冊』とか言うものをぶら下げ、願い事を書く日だ。

そのときの彼女の願い事はこうだった。

『しょうにいのおよめさんになりたい』

一瞬驚いた。

俺が本当の兄ではないとばれたかと思った。

だが、『にい』と書いてる時点でそれは無いと思い、その考えを捨てた。

また去年の『クリスマス』と呼ばれるイベントの日、俺は用事で一日中家にいなかった。

行く前は平気平気！と言っていた彼女だが、俺が帰ってきた途端に泣きついてきた。

なんでいてくれなかったのか！？

なんで自分を一人にしたのか！？

その言葉の一つ一つが胸に突き刺さった。

そのとき俺は彼女に聞いた。

何が欲しい？

欲しいものは俺が買って来てやる。

そしたら彼女はこう答えた。

「物なんていらぬ。ただ翔兄が傍にいてくれれば」

それを聞いて、俺は彼女に誓った。

「もう、寂しい思いはさせない」と。

そして俺は、この力を捨てた。^{ひかり}

だから今起こっていることなど、俺には関係ない。

そう、関係ないんだ・・・。

「翔兄い、なに見とるん？」

「ん？日記だ。昔からつけてるな」

「へえ〜。みしてみして〜！」

「ダメだ！人の日記は見るもんじゃない」

「ええ〜！翔兄いのケチケチ〜！」

「そんなこと言う子にはおはぎ作ってあげません」

「ウソウソ！翔兄い大好き〜！愛してるっ！」

「兄ばなれできない子にもあげません」

「ええ〜！？翔兄い、私に死ねいうとるん！？」

「バカなこと言うな。俺がはやてにそんなこと言うわけないだろ？それにそんなこと軽々しく口にするもんじゃない！」

「は〜い・・・」

「よし、素直だからおはぎ作ってやろう」

「うわ〜い！ありがとっ！翔兄い！もう私メロメロや！いよっツンデレ！」

「はいはい分かったから抱きつくのやめような。んで、誰がツンデ

レだ!？」

俺とキミの日常は、まだ続く。

キミに温もりを与えるため、キミがくれるぬくもりを守る為・・・。

番外編 キミの温もり（後書き）

ほのぼのとした感じを出せてたでしょうか？

感想等いただけると嬉しいです。

では次回、【レンの地球生活】でお会いしましょう！

第8話 レンの地球生活（前書き）

レンのといっときながら結構違う視点もあります。

第8話 レンの地球生活

「いらっしゃいませー!」

にこやかに客に挨拶をする18歳〜19歳くらいの青年。

整った顔立ちに似合った鋭い目つき。

それでいて優しさを感じる不思議な男性。

名をモロボシ・レンと言った。

3日前から翠屋で働いているこの青年、本当はただの高町家の居候人である。

誤解から招いたこの状況なのだが、本人がいくらいつても聞く耳もたれず、結局住まわせてもらっている分働くということで本人が（勝手に）納得した。

とはいっても

「ありがとうございました〜！」

この接客態度、一瞬本人もウルトラマンであることを忘れてそうだ。

「あの〜、すみません…」

一人の女性客がレンにおずおずと声をかけてきた。

「はい？」

「あの、一緒に写真とってもらっていいですか？」

それを聞いた途端、来ていた女性客の目の色が変わる。

「はい、いいですよ」

ほがらかに了承し、女性客のケータイで写真を共にとるレン。

もちろんの如く、彼はその意味を理解していない。

ガシヨ、と言う音が鳴り、女性客のケータイに写真が保存される。

「次私もお願いします！」

「私も！」

「あたしも！」

「拙者も〜！」

「あたしもあたしも〜！」

一体何人がレン目当てだったのだろうか…。

つてか一人一人称がおかしい人いなかった！？

そんな事が日常化しつつある翠屋。

もちろん、働くときはしっかり働いている。

「レン君、もう今日は上がってよいわよ」

「いえ、もう一段落するまでは…」

そう言って働き続けるレン。

お客が数えるほどになり、人通りも少なくなったところで彼はようやく仕事を終えた。

町をぶらぶら歩いていると、10人中10人が振り返る。

例え男性であってもだ。

本人はそんなこと知る由も無く、鼻歌を歌いながら歩いていた。

「フフフフーン、フフフフーン、フフン！」

とりあえずこの星での基礎知識が必要と言っことで、図書館に向かっていた。

「はて？」

何もない空き地で一人佇む青年。

モロボシ・レン。

「ここはどこだ？」

絶賛迷子中である。

「やっぱ桃子さんに付いて来てもらえばよかったかな？」

今更のように自分の行いを反省するレン。

「まあなっちまったもんはしょうがねえ！ここの地理を覚える良いチャンスだ！」

あげく開き直って歩き始めた。

「フフフフン、フフフフン、フフン」

どうやら彼の頭の中でリピート再生がおきている様だ。

「着いたぜ俺！」

堂々と図書館の前で叫ぶレン。

周りの目が痛い……。。

図書館に入り、様々な本を読み漁る。

自分のいた宇宙と大きな違いはウルトラマンや怪獣が空想の産物である程度だった。

『ジープの全て』と書かれた本を片手に、図書館を後にしようとするレン。

そこですれ違った少年と少女に、なにか違和感を感じたが、それがあまりにも普通の兄妹に見えたので気のせいだと判断し、高町家に帰宅した。

「はやて、今日は何を借りるんだ？」

車椅子を押す12〜13歳くらいの少年。

「んゝ、『星から来た男（下巻）』かなゝ？」

車椅子に乗る少女は、少年にそう言った。

「お前好きだなゝ」

「えゝ？だって兄ちゃんみたいやん！」

そんな会話をしながら二人は本棚の間を進む。

（今のがゼロか…。すまねえ、今の俺は戦えない。いや、戦わない
……………）

帰ってきたレンを、なのはが手厚く出迎えてくれた。

「おかえりなさい！レンさん！」

飛びつきながら赤い頬でレンを見上げるなのは。

「おう、ただいまなのは」

その頭をわしゃわしゃと撫でながら靴を脱ぐレン。

その後手を洗ってからうがいをし、ベッドに転がりたいが外に出た服なので遠慮する。

……滅茶苦茶馴染んでるなおい！

「レンさん！一緒に風呂入ろっ！」

「おおいぞ！」

この際2方向から殺気が飛んできたが、人間の殺気程度でビビるレ
ンではないのでスルーして風呂に入った。

「ユウキ、目に入らない？私がやるっか？」

「フェイトちゃん、大丈夫だから……」

物語の主人公とヒロインはこんな感じだった。

「あはははっ！兄ちゃんくすぐったいで」

「何言ってるんだ笑ってるくせに」

「く、くすぐりたいからやてひやはははは！こ、このスケボー！」

「ほう、兄に向かって良い口の利き方だな？は、や、て？」

「きゃはははははっ！ごっ、ごめんにゃさい」

一方こちらの兄妹は一步間違えれば犯罪になるようなことをしていた。

……なにしょんねあんた。

風呂を上がつたレンは、テレビでドラマを見ていた。

丁度キスシーンになったとき、レンが口を開いた。

「なあ、あれってなんなんだ？口なんか食ってうまいのか？」

その言葉に、高町家が固まる。

「えっ！？あ、あれ！？」

（やべー、地球人じゃないってバレちまったか！？）

内心めっちゃ焦るレン。

「レン君、あれはね？好きな人にする愛情表現なの……」

心の傷に触れないように、桃子が優しく答える。

「あ、そうなんですか……」

ほっと一息つくレン。

だが本日二つ目の爆弾を投下する。

「ならなのはともするか？」

「にやっ！？／／／／」

ボンツと顔を紅くしたなのは。

「「そうはさせるかあああああ！……」」

「うあああああ!？」

そんな悲鳴が聞こえたとき。

同じ番組を見ていたテストロッサ家。

「ねえフェイトちゃん、あれって何なの？」

「え、えーっと、好きな人にする行為っていうか…ねえアルフ？」

「あたしに投げないでくれ…レクシー、説明してやって」

『ワタクシニンゲンノコトバワツカリマセーン』

誰一人答えを導き出せなかった。

「うーん……フェイトちゃん、ちょっとやってみようよ」

「ええええええゝ！？／／／／／」

「いやなの？ならアルフさん」

「ちよっ！？な、なななななに言ってるのさ！？／／／／／／／／／」

あげく爆弾投下。

「あゝ。苦しい。翔兄いが人工呼吸してくれんと死んでまう。」

「好きな人ができるまでキスはとっとけ」

「私は翔兄いの奥さんやからええもん！」

「はいはい……」

「あゝ、もしかして照れとる？」

ニヤニヤしながら兄の顔を覗き込むはやて。

確かに顔がほのかに赤くなっているが、

「ほう、まだくすぐられたいようだな」

「えっ！？ちよ、翔兄いタイムタイムたんまああああっはははは
はは！！」

… 一 応 翔 が 正 常 な 神 經 の 持 ち 主 ら し い。

第8話 レンの地球生活（後書き）

次回、【翔とはやての午前中】
お楽しみに！

第9話 翔とはやての午前中（前書き）

翔はやの出番が少ないと言う……。

そして最近この小説が目標を見失いつつある…。

第9話 翔とはやての午前中

A M 5 : 3 0

八神翔、起床。

ダジャレではない。断じて。

「う…ん…」

眠い目を擦りながらリビングに行く。

キッチンで妹が朝食を作っているのが見える。

「あ、くすぐりフェチの兄ちゃんお目覚めか！」

明るく誤解を招く様な事を言う。

早く通報しないと！

「誤解を与えるようなこと言ってんじゃねえ」

顔を洗い、妹の手伝いをする。

「兄ちゃん？　またこないだみたいに火傷せんでな？」

「あ、あれはマグレだマグレ！」

「いつも同じこと言うてるやん…。マグレが数十回も出ればそれはもう奇跡やで？」

「うっせー！」

無造作にフライパンを動かす翔。

どうやらこの男、不器用な様だ。

「あゝあゝ、もう…。ほんまに火傷しても知らんで？」

「しねーよー！」

…朝だけはどっちが年上か分からんな…。

「あつちいゝ!」

.....
バカがいる.....。

その頃、海鳴市の山奥で……………

「デヤアアアアア!!」

「セアアアアアア!!」

ゼロ（等身大）とブレイブ（等身大）のキックがぶつかっていた。

「くう……」

「おりゃああああ!!」

ブレイブが押され始めたところで、ゼロが威力を上げる。

「うわああああ!!」

吹っ飛ばされ、木を何本かへし折る。

「あいたたたた……」

そのまま変身を解き、ユウキの姿になる。

「ったく、保有エネルギー量が多いのに体術は全然だな」

レンの姿になり、ユウキに近づきながら注意する。

「あはは……まだまだだね……」

「ま、お前はこれから伸びる種の状態だ。まだ強くなれるよ」

ユウキに手を貸しながら励ますレン。

「プラスマスパークなんと言っても、母なる太陽の息子なんだからな!」

「……うん！」

朝の特訓を終え、お互いの居候先に帰ろうとする。

「そついえばレン兄いは今なにやってんの？ ニート？」

「お前意味わかんないなら使つなよ……結構傷つくんだぜ？」

レンの顔を見ればニートニートって……。

お前天然なのか毒舌なのかどっちだ？

「むうゝ、意味くらい知ってるよゝ！ 部活やってない人でしょ？」

「誰だこいつにけいおん！ を読ませた奴は！？」

テストロッサ家

「ただい「ユウキィ！」… ってまゝばふぁぁ!？」

フェイトがとても良いタツクルをぶちかます。

「大丈夫だった？ あゝこんなに痣作って…。ここなんて血が出ちやつてるよ？ こんなに汗も掻いて…。立てなくなるまで特訓するなんて…」

「いや、最後のはフェイトちゃんんだけど…?」

相変わらずだった。

ってか子供っぽいユウキと大人びたフェイト……精神年齢は近いのか？

同・高町家

「ただいま」

「おかえりなさいっ！　レイさん、お風呂沸いてますよ！」
頬を赤らめながら元気良くなのはが出迎える。

「お、サンキュ〜！　風呂は良いよな〜！　43 がベストだな！」

……………ナンデスト？

「ちゃんと43　ですよ！」

……………ナンデスト？

さて、視点を今回の主役に戻すでしょう。

あいつらはダメだ…………。

朝食も取り終え、絶賛暇もてあましタイムとなっている八神家。

そもそも二人だけではできることが制限されている。

こちらは翔の思考回路。

（あゝ、暇だな……。なんつーかグリッターゼペリオンソルジェントフォトンストリームクロスパーフェクションライトニンググノアギヤラクシーカノンコスモミラクルアタックウルティメイトファイナルゼロヒマってぐらいヒマだな……）

何言ってんだこの子？

続いてはやての思考回路。

（あゝ、暇やな…。うーん……………そや！）

「翔兄い、ちよおソファ―座らせてくれへん？ お尻痛くなくても
うて…」

「おう、分かった」

そう言っではやての正面に回る翔。

そしてはやてを抱えようとした瞬間

「ていゝ」

「のべはっ！？」

翔の上に馬乗りになるはやて。

その目は嫌らしいほどに輝いている。

「は、はやて？」

何やら嫌な汗が翔の背中を駆け巡る。

そのはやてはクッククク…と笑いながら翔の耳元に口を近づける。

「翔兄いゝ、こないだ滅茶苦茶私のことくすぐってくれたよね…
……？」

「はやて！？ ちょっと、落ち着けっ！ 話せば分かる！」

「全軍攻撃開始〜！」

この日、八神家の近所からは2人分の悲鳴（笑い声）が交互に聞こえてきたとか…。

「ねえフェイトちゃん、結局きすつてなあに？」

「え、えつとね、えつとね………？」

まだ引きずっていた。

もうしちゃえよお前ら……。

第9話 翔とはやての午前中（後書き）

翔君はくすぐりフェチなんかじゃないですよ？（笑）

次回、【決戦の序章】
お楽しみに！

第10話 決戦の前触れ（前書き）

後半にちよつとしたおまけ付き。

第10話 決戦の前触れ

とある海の上

二人の少女が激しい戦いを繰り広げていた。

片や栗色の髪をツインテールにした少女、『高町なのは』
片や長い金髪をツインテールにした少女、『フェイト・テストアロツサ』

お互いの持つている全てのジュエルシードを賭け、二人は空を駆けていた。

同じ頃、海鳴市の別の場所で……………

ヒビノ・ユウキと、モロボシ・レンは、ダークゴーネの人間体に呼び出されていた。

「なんの用だ!？」

レンが睨みつけながら聞く。

「我々の計画が、既に始まっているということを伝えようと思いついてね」

「なに!？」

計画。

その言葉にユウキとレンが大きく反応する。

「どつという意味だ!」

ユウキがいつもより鋭い口調で言い放つ。

「それはまたいずれ……」

そう言つて影の中に消えようとするダークゴーネ。

「待て!」

ユウキが飛び掛る。

が、

「良いのですか？ 大事な少女が落ちようとしていますか？」

振り向くと、なのはのスターライトブレイカーを食らったフェイトが、今まさに海へと真つ逆さまに落ちていこうとしていた。それにユウキ達が気を取られた瞬間に、ダークゴーネは消えた。

そんなもの気にせず、ユウキはブレイブブレスのサークルを回した。

「ブレイブ！！」

ウルトラマンブレイブ（等身大）になり、フェイトの元に全速力で駆けつける。

海にダイブする寸前でキャッチし、上に上がって顔を覗く。

『フェイトちゃん、大丈夫？』

「ユウキ……ありがとう……」

疲れからか何なのか、若干顔の赤いフェイトを心配しつつ、クロノに呼び出されアースラに向かった。

ユウキ
side

アイ
スラ内

モニターの奥に、一人の女性が立っていました。

フェイトちゃんの言葉から察するに、フェイトちゃんのお母さんらしい。

まずこの時点で、一つ頭にきた。

さらにその奥に、フェイトちゃんそっくりの姿をした女の子が入ったカプセルがあった。

フェイトちゃんはその子、アリシアちゃんの記憶を持った人造生命体。（本人は人形と言っていた）

ずっと娘扱いして、ジュエルシードを集めさせていたが、それも今日で終わり。

……なんだろう？

自分で自分を抑えられない…。

『私はねえ、フェイト。ずっとあなたが、大【ドゴオオオンン】ザ——』

無意識の内にウルトラ念力を発動し、モニターを破壊した。

「ユウキ？」

少し顔が青ざめているフェイトちゃんが、僕の顔を覗き込む。

「……ゼロ兄、行くよ。あの腐れ外道を倒しに」

「ああ」

僕とレン兄が出ようとするが、クロノ君達に説明を求められる。

「簡単だよ。フェイトちゃんのお母さん、プレシア・テストロッサは

もう、死んでいる」

「えっ……………」

フェイトちゃんには少し辛いかもしれないけど、それが現実なんだ。

「あいつは、プレシアさんの姿をしているけど、中身は全然違う……」

僕の言葉を、レン兄が引き継ぐ。

「暗黒皇女、クイーンベリアル」

~~~~~

ちよつと息抜き、ゼロのイラストを描いてみました。

> i 2 2 0 5 1 — 2 7 7 1 <

レン

「まあ、テマリよりマシだな」

あれは酷かったからな…。

## 第10話 決戦の前触れ（後書き）

次回、【ブレイブの新価】  
お楽しみに！

注！

次回のウルトラマンブレイブですが、何と………

あ、打ち切りじゃないですよ？

ブレイブがチート化します。

具体的なスペックは

タイラント>>>>>>>>>>ブレイブ

ゼットン>>>>>>ブレイブ

アーマードダークネス>>ブレイブ

こんな感じです。

フォーム名は『チートブレイブ』！

…いや嘘です。

まあなので次回は、チート系が苦手な方は読まないほうが良いと思います。

一応デメリットもつけますが。

では、チート系を許せるという方のみ、次回をお楽しみに！

## ブレイブのイラスト（前書き）

その名の通り！

## ブレイブのイラスト

今回はブレイブのイラストだ！

> i 2 2 1 0 4 — 2 7 7 1 <

ユウキ

「何かデザインが劣化版ゼロ兄いだね」

元々そういう設定だし。

レン

「しかしプロテクターとブレイブプレスは雑だな」

しょうがないじゃん、難しいんだから…。

ユウキ

「でも、これが僕なんだよね！」

そう！ ハナトのブレイブだ！

……あくまでハナトのブレイブだけだな。

ユウキ

「？ どゆこと？」

他の所で書かれるブレイブはこの見た目じゃないってことだ。

レン

「他にブレイブなんか居たか？」

自分の知る限り一人。

ユウキ

「まあプラズマスパークから産まれたのは僕だけだけどね」

そらそーだ。

んじゃ、最後の挨拶よろしく。

ユウキ

「次回は僕がとんでもないことになります！ それを許せるという方は次回をお楽しみに！」

レン

「俺達とクイーンベリアルとの戦いもお見逃し無く！」

ユウキ・レン

「「ばいばい！」」

## 第11話 ブレイブの真価（前書き）

原作を1周しかしてないので大分無理やりです……。

ブレイブ無双は一瞬しかありません。  
お見逃し無く！

## 第11話 ブレイブの真価

暗黒皇女クイーンベリアル。

それはかつてベリアルが皇帝<sup>カイザー</sup>ベリアルと名乗っていた頃の、ベリアル<sup>の嫁</sup>。

必然と皇女となる人物。

そのためアイアロンやダークゴーネとも繋がりがある。

奴らを蘇らせたのはクイーンベリアルで間違いないだろう。

プレシアさんを見た瞬間に、そのことに気がついた。

だからこそ許せなかった。

フェイトちゃんの……娘が母親を思う気持ちを利用していたことが！

ウルトラマンブレイブ 魔道士との遭遇  
第11話 ブレイブの真価

## 時の庭園

僕はそこにたどり着いた。

禍々しい門が目の前に佇んでいた。

それを破ろうとブレイブブレスを出した僕の前に、大きなロボットに見える奴等が大量に出現した。

中にはレギオノイドも混ざっている。

「どうやら敵さんの本拠地らしいな」

とレン兄い。

「……行くよ、レクシー。ブレイブ!」

ブレイブブレスのサークルを回し、ブレイブの姿に戻る。

「ええ〜〜！？ ユユユ、ユウキさんがウルトラマン！？」

足元でなのはちゃんが素っ頓狂な声を上げてる。

…あれ？ 知らなかったの？

まあいいや。

「レクシー！！」

『おつよ！！！！』

レクシーが僕の胴体と同じくらいの大きさになり、それを身体に装着する。

赤いウルティメットイージスの様な鎧をまとう。

ブレイブ・ギャラクシー。

これが僕の最強形態。

そのせいで数体の敵の標的になる。

ま、それでいいんだけどさ。

「……………雑魚に、用は無い」

ブレイブスラッガー2本を手に、力を抜いて構える。

次の瞬間、僕は機械兵達の背後に立っていた。

右から順番に、爆発音が聞こえてくる。

振り向いて見ると、機械兵達を全滅させていた。

「急ぐっ！」

門を最小限のエネルギーで破壊し、中に突入した。

「……ユウキって、あんなに強かったんだ……」

とフェイトちゃん。

「……こんな心無い力、強い何て言わないよ……」

正義を持たない力がどれほど危険なのか……。

たいていの人は知らないんだよね……。

走り続けると、タイラントやゼットン、EXレッドキングといったどこから連れてきたのか分からない奴等が大量に出てきた。



なのはちゃんがまた素っ頓狂な声を上げる。

「悪いなのは、今まで黙ってて……。やっぱ、怖いよな…」

ゼロ兄いからは寂しさが伝わってくる。

でもなのはちゃんは首を横に振った。

「それでも、レンさんはレンさんです。私の大好きな……」

「っ！ ……ありがとな」

いい感じの会話をしてるところに、空気を読まずダーククロスや機械兵達が現れる。

「時間が惜しい。ここは僕に任せて先に行ってくれ」

クロノ君が僕らを先に行かせようとする。

でもこの数を一人じゃ………！

そうだ！

「頼むよ！ バードン！」

カプセルを投げると、中からバードンが出現する。

「クロノ君と一緒に、ここ頼める?」

『お任せあれ!』

心強い返事を背中に、奥へ進んだ。

途中でなのはちゃんは駆動炉を封印する為に別のルートへ行き、僕とゼロ兄とフェイトちゃんとアルフさんが最深部へと辿り着いた。

「見つけたぞ！ クイーンベリアル！」

ゼロ兄が鋭く吼える。

プレシアさんの身体をしたそいつは、薄気味悪く笑い声を上げた。

「ははははッ！ もうばれてるのね。なら良いわ」

プレシアさんの身体を禍々しい光が包み、姿を変える。

ベリアルより筋肉質ではないが、女性みたいな体型になった巨人。

「母……さん……？」

それを間近で見たフェイトちゃんの顔がどんどん青ざめていく。

「アルフさん、フェイトちゃんをお願いします」

「ああ。任せときな」

暗闇から現れたダークゴーネと、物陰から出てきたアイアロンと対峙する。

「一応名前を聴いておいてあげるわ」

「ゼロ！ ウルトラマンゼロ！ セブンの息子だ！」

ゼロ兄が名乗った後、教官の言葉を思い出す。

『今日から僕が、君の――』

とても嬉しかった。

でも、それを名乗る気は無かった。

僕なんかじゃ、もったいないと思ったから…。

でも、今は違う。

胸を張って、こう名乗る。

「ブレイブ！ ウルトラマンブレイブ！ メビウスの家族だ！」

教官であり、兄でもあり、父でもあるあの人。

その背中を、今こそ越える！

## 第11話 ブレイブの真価（後書き）

本当は息子って名乗らせるといふ手もありましたが辞めました。

メビウスからしたら、息子でもあり弟でもあり弟子でもある存在なのでこれで合ってますし。

次回、【誓いの炎】

お楽しみに！

メビウスの弟で、誓いで、炎です。

あのフォームっきゃないですよね！

## 第12話 誓いの炎（前書き）

今回、ユウキにとっては悲しい事件が起きます…。

## 第12話 誓いの炎

時の庭園

内部では、激しい戦闘が行われていた。

「フェイトちゃん、離れて！」

アイアロン、ダークゴーネとの戦闘を繰り広げていたブレイブは、フェイトを安全圏まで下がらせる。

一方ゼロも、クイーンベリアルと激しくぶつかり合っていた。

「セアッ！」

ブレイブスラッガーを飛ばすが、ダークゴーネは影の中に入り込み避ける。

アイアロンの方も、硬い甲羅でそれを弾く。

「くっ……」

戻ってきたスラッガーを突き合わせ、ツインソードとして構える。

「ハッ！ セアッ！！」

甲羅を向けてくるアイアロンの、同じ所を何度も斬りつける。

ピシピシと輝が入っていく。

（よし！）

狙い通りに進んでいる為、ブレイブは油断していた。

最後の一撃を放とうとした時、何かに身体を拘束される。

「シュアッ！？」

黒い触手。ダークゴーネの腕だった。

その触手からブレイブのエネルギーが吸い取られていく。

「シュアアアアアッ!!」

力が抜け、ツインソードを落としてしまう。

「ユウキ!」

フェイトがサンダーバスターを放つが、あっさりと弾かれてしまう。

「そんなっ……」

「壊れろ! 消えてしまえ!」

アイアロンがフェイトに向かってアイアロンソニックを放つ。

「やめろおおおおおおお！！！！」

ブレイブが全身に力を込めるが、エネルギーを吸い取られている今では触手をちぎることはできない。

「きゃあっ！！」

フェイトが顔を覆い、爆音と共に土煙が舞い上がる。皆が直撃したと判断する。

だが、フェイトは無傷だった。

「なんだとっ！？」

アイアロンは驚きを隠せなかった。

そのアイアロンとフェイトの間に入っていた存在。

それが……………

「レクシー!？」

ボディから火花を散らし、あちこちに輝が入っているレクシーが浮かんでいた。

『…まったく、しっかりしろよ……。大事なもんぐらい、ちゃんと守れよ……。』

そう言い残したレクシーは、ガラスの様に碎けて光の粒子となる。

エネルギーが吸い取られているのも忘れ、ブレイブは呆然と立ち尽くす。

レクシーの光を掴みながら、フェイトはユウキに声を飛ばす。

「ユウキ！ 戦って！」

それに続く様にアルフが言う。

「ユウキ！ しっかりしなよ！」

クイーンベリアルにエメリウムスラッシュを叩き込みながらゼロも叫ぶ。

「バカ野郎！ ぼーっとしてんじゃねえ！」

我を取り戻したブレイブの身体に、炎が宿る。

「ぐおおおおおっ！？」

その熱で触手が少し溶け、思わずそれを引っ込めるダークゴーネ。

全身に炎を纏わせながら、ブレイブが呟く。

「分かったよ、レクシー……」。

大事なものは、全部守ってみせる。この手で……

この光で……」

炎がはじけ飛ぶと、ブレイブの姿が変わる。

プロテクターと、ブレイブスラッガーの両側面にファイヤーシンボルが描かれる。

身体の銀の部分が赤く、赤い部分が銀になる。

ウルトラマンブレイブ、バーニングブレイブへと変わった。

「僕のビッグバンは、もう、止められないよ……」

静かにそう言うブレイブ。

「ほざけ！ アイアロンソニックウー！！」

再びアイアロンソニックを放つ。

ブレイブの身体の前にも、巨大な火球が現れる。

うつすらとメビウスの輪を描きながら。

（教官、貴方の技を借ります…）

それを一気に打ち出す。

「メビュームバーストッ！！」

放たれた火球はアイアロンソニックを打ち破り、その身体を貫いた。

「バカな……！！」

そう言った後、アイアロンは大爆発を起こした。

「はぁ……はぁ……」

ブレイブの方も、肩で荒い呼吸をする。

その背後から、ダークゴーネが忍び寄る。

「ユウキ！ 危ない！」

フェイトの悲痛な声が耳に届く。

（あの様な巨大なエネルギー弾を放った後で、ロクに動けるはずが無い！）

そう考えていたダークゴーネ。

だが、それはミスだった。

振り向き様に、ブレイブの右腕に金の槍が握られていた。

「あつ…」

「あれって…？」

フェイトとアルフには、何か心当たりがある様だった。

その槍を、ブレイブは投げつける。

「フォトンランサー！」

フォトンランサーがダークゴーネの身体を貫く。

すれ違った瞬間、ダークゴーネが爆発を起こす。

クイーンベリアルと戦っているゼロに合流したブレイブ達。

「残っているのはてめーだけだ！」

ゼロが力強く指差す。

だが、クイーンベリアルは君の悪い笑い声を上げた。

「くくくつ、それで勝ったつもり？」

「なんだと!？」

クイーンベリアルの周りに、ジュエルシードが集まる。

「見なさい！　これが我の真の姿！」

それを吸収し、巨大化していく。

やがて、アークベリアルの中身のクリスタルが青くなった状態、  
『デストロイベリアル』へと変貌する。

「ゴアアアアアアアアアアッ!!」

その不気味な叫び声が響き渡った……。

N  
E  
X  
T  
  
F  
I  
N  
A  
L  
  
S  
T  
A  
G  
E

## 第12話 誓いの炎（後書き）

次回で無印編は終わりになります。

次回、【心からの言葉】  
お楽しみに！

ぜひ最後までよろしくお願い致します。

## 最終回 心からの言葉（前書き）

無印編最終回です！

ここまで読んでくださった方ありがとうございました！

A、S編もよろしくお願い致します。

## 最終回 心からの言葉

おぞましい咆哮をあげるデストロイベリアルを相手に、ゼロとブレイブは苦戦を強いられていた。

口から強力なデスシウム光線を放ってくる。

ブレイブとゼロは同時にバリアをはってそれを防ぐ。

「シュ……アアアア……」

「くっそ……」

二人の頑張りも空しく、バリアに痺が入っていく。

そして

「ゴガアアアアア！」

バリアが破られ、光線が二人に直撃する。

「「うあああっ！！」」

壁に激突し、力なく倒れる。

二人のカラータイマーが残りエネルギーの限界を知らせる。

「ユウキィ！」

薄れ行く意識の中、ゼロは必死に思考をめぐらせる。

（なぜだ？ ジュエルシードを26個吸収した程度でエメラナ鉱石  
数万トン分の力を発揮できるのか…？

……まさか！）

ゼロはある結論に行き着いた。

「こいつ、ここそのものからエネルギーを吸収してるのか！？」

「っ？ どういうこと？」

「ここが破壊でもされない限りは、あいつのエネルギーが途切れる  
ことは無い……」

衝撃の言葉を口にする。

それに対しデストロイベリアルは…

「今更気がついたところで遅い！ さあ、我が旦那の敵、とらせてもらおうぞ！」

再び口に黒いエネルギーを溜める。

（まずい、ここで避けたらフェイトちゃん達に直撃する…）

ふらつきながらも、フェイト達を庇うようにして立ち上がるブレイブ。

今まさに光線が発射されようとした瞬間…！

「うぐっ……うおおお！？」

デストロイベリアルに異変が起きる。

背中のクリスタルの光が弱まっていく。

「何が起こったの？」

そう呟くフェイトの持っていたバルディッシュのコアが光、銀の十字架の様なものが現れる。

そこから銀色の巨人が現れ、デストロイベリアルの顎を蹴り上げる。

「がふっ…」

着地した戦士を見て、ゼロは叫んだ。

「ミラーナイト！」

ミラーナイトと呼ばれた巨人はゼロ達のほうを向き

「私だけではありません！」

そう言うや否や、天井が轟音と共に破壊される。

「がっしゃー！」

煙を突き破つて、赤い戦士が如意棒の様な物でデストロイベリアルを叩く。

上からゆっくりなのはとユーノを手に乗せたロボットが下りてくる。

「グレんファイヤー！ ジャンボット！」

なのはを降ろしたジャンボットと、グレンファイヤーが集まる。

「貴様らは……!？」

デストロイベリアル問いに、まずグレンファイヤーが答える。

「俺達は……！」

「「「ウルティメイトフォース・ゼロだっ！！！」」」

名乗りを上げると、壁を突き破ってバードンとクロノが姿を現す。

[illegible]

再びおぞましい咆哮をあげ、デスシウム光線の準備をする。

「させるかつ！」

グレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボットがデストロイベリアルを攪乱する。

その隙にゼロは、ウルティメイトブレスレットを掲げる。

「ウルティメットイージス………セットアップ！」

その掛け声と同時に、ゼロの身に白銀の鎧が装着される。

それを空中で分解し、別の形に合体させる。

巨大な弓矢がゼロの右腕に装着され、その巨大な弦を引っ張る。

ブレイブも頭の上で両手を合わせ、両腰に拳を添える。

その際にブレイブの身体が七色に光る。

「これがっ……！」

「俺達のっ……！」

ゼロの方も全てのクリスタルが輝き、エネルギーの満タンを示す。  
そしてブレイブも右腕を開いて前に突き出す。

「光だああああ……！！！」

ファイナルウルティメイトゼロと、ブレイブのストリウム超光波が  
合わさり、デストロイベリアルルの身体を貫く。

「おおおおのおおおおれええええええええええ！！！！！」

断末魔を上げ、デストロイベリアルルの身体が大爆発を起こす。

だが、その紫のカラータイマーだけが動き、どこかへ逃げようとした。

「こんな脆い奴等に、負けるはずが無い……！」

そのままどこかへ逃げようとしたが、そのカラータイマーに輝が入る。

「なっ!？」

そのことに驚いた瞬間、音を立ててカラータイマーが割れる。

その置くには、光の剣、ブレイブブレードを出したブレイブが立っていた。

「脆かったのはお前の方だ……」

## 海鳴市

海が良く見える場所で、この小説の主要メンバーが顔をそろえてい

た。

なのはとフェイトが互いを見つめあう中、他の者（ユウキ、アルフ、レン、ユーノ、クロノ）は少しはなれたところで見ている。

「……おかしいな。話したいこと、いっぱいあったのに……。フェイトちゃんの顔見たら、全部忘れちゃった……」

薄く笑を漏らすなのはにつられて、フェイトも笑みをこぼす。

「そうだね。私も、言葉にならない……。でも……」

「えっ？」

言葉が続いていたことに、驚きの声を上げるなのは。

「嬉しかった。真っ直ぐに向き合ってくれて……」

「うん、友達になれたら言いなっと思ったの！」

飛び切りの笑顔でそう言うのはからは、こちらにも喜びが伝わっ

てくる。

「でも、今日はこれから出かけちゃうんだよね……」

「…そうだね。少し長い旅になる…」

「また会えるんだよね!？」

「……うん…少し寂しいけど、やっと本当の自分を始められるから」

ユウキからしたら、フェイトがこれを言えたことに喜びを隠せなかった。

昨日から何度も自分にそう言っていたからだ。

「来てもらったのは、返事をする為……」

「えっ？」

「君が言ってくれた、『友達になりたい』って言葉…」

「うん! うん!」

「私にできるなら、私にできるなら! ……でも私、どうしたらいいか分からない…。だから教えて欲しいんだ。どうやってたら友達になれるか…」

「簡単だよ。友達になるの、凄く簡単!」

この後、なのはは飛び切りの笑顔で

「名前を呼んで。最初はそれだけでいいよ。君とか、貴女とかじゃなくて、ちゃんと相手の目を見て…」。

私、高町なのは! なのはだよ!」

「なの…は？」

「うん！」

「なのは…」

「うん！ フェイトちゃん！」

その光景を見て、ユウキは……。

「うわあああああん！！ よがっただよお…」

リットル単位で涙を流しながら見ていた。

「おまつ！ 涙拭け！」

一通り言葉を交わした後、フェイトとアルフ、クロノは転送ポートに乗った。

ユウキはそれに同行するらしい。

「そうだ」

フェイトが何か思いついた様な表情をする。

「ユウキも、名前で呼んで？」

「えっ？」

「ちゃん付けじゃなくて、フェイトって…」

恥ずかしそうに頬を染めながら言うフェイト。

普通なら気恥ずかしいところだが、この男は違った。

「分かったよ、フェイト」

意識してはいないが、かなりの良い顔であっさりと名前を呼ぶユウキ。

それにますます顔を赤くするフェイト。

「あう……や、やっぱりちゃん付けで……」

「ええ……!?」

そんなやりとりをした後、フェイトはなのはと言葉を交わし、ユウキはレンと拳をぶつけ、それぞれこう言った。

『それじゃ、また』

E  
N  
D

同時刻

八神家

一家の主、八神はやての所有する鎖で閉じられた本。  
それが不気味にゆれた。

ほんの一瞬空が割れたのは、まだ誰も知らない……。

N  
E  
X  
T  
  
A  
  
N  
E  
W  
  
S  
T  
E  
A  
G  
E

## 最終回 心からの言葉（後書き）

さて、A、S編からは『今日のエースな一言』と言うコーナーを設けたいと思います。

ウルトラマンに關係する名台詞や歌詞の一部などを毎回紹介するというコーナーです。

皆様の参加お待ちしております！

では、次回のA、S編第1話もお楽しみに！  
いよいよ翔の正体が明かされます！



## 幕間 それぞれの未来

アースラ side

部屋の戸をノックする音がする。

「フェイトちゃ…フェイト、入るよ？」

まだ慣れないのが、「フェイトちゃん」と呼びそうになるのを寸前で止める。

「いいよ」

帰ってきたのはアルフの声だった。

中に入ると、ベッドで寝ているフェイトの横に、アルフが座っていた。

「あ、寝ちゃったんですね…」

その寝顔を愛しそうに見つめながら、持ってきた果物を机の上に置く。

その際、なのは達からのビデオレターが目に残る。

高町なのは。

彼女がフェイトを変えてくれた。

レンの口調も心なしか柔らかくなった気がする。

その優しさに心の中で感謝していると、アルフが話し始める。

「昨日届いたんだけどさ、フェイトったら何回も見返して…最後には涙流しながら寝てたからね…」

まあしょうがないけどさ、と続けるアルフの横に、ユウキも腰掛け

「フェイト、僕が会ったばかりの頃より明るくなりましたからね。なのはちゃんのおかげです」

「それもあるけど、あたしはやっぱりユウキが居てくれたからだと思っよ」

「僕が、ですか？」

突然自分の名前が出てきたことに、ユウキは驚きを隠せない。

「昔はさ、あたしがなに言ってもろくに食事もしてくれなくて……。でもユウキが来て、ユウキがご飯を作ってくれて……。それからフエイトが良く笑ってくれるようになったんだよね……」

ちよつと気恥ずかしそうに頬を掻くユウキだが、そんなことを知らないアルフは話し続ける。

「なにより、ユウキじゃなかったらダメだったのかも知れないね」

「？　どういう意味ですか？」

「それは自分で考えな」

「はあ……？」

うーんと唸りながら首を捻るユウキを見て、アルフはくすりと笑った。

そして何かを思いつく。

「ねえユウキ？」

「はい、なんでs yむがつ!？」

振り返ったユウキを、思いっきり抱きしめるアルフ。

「ああ、やっぱりこの抱き心地最高♪ フェイトが可愛い可愛い  
言うことも分かるよ♪」

ユウキを抱き枕が何かと勘違いしてるのか、抱きしめながらリラック  
スしてしまう。

対するユウキは、両頬に当たるやたら大きくて柔らかいものを感じ  
る暇も無く、呼吸困難に陥っていた。

「もっ、んがもっ！ んごもっんごっ！ （ちよっ、アルフさ  
ん！ 苦しいですってば！）」

この後、意識が覚醒したフェイトによってアルフがぶっ飛ばされ、  
ユウキがもふもふされたのは言うまでもない。

海鳴市 side 1  
喫茶翠屋編

今日も今日とて忙しく働くレン。

最近ウルトラマンとしての姿よりエプロン姿の方が似合いつつある…。

そんな彼は、ウルティメイトフォースゼロはどうしたのか？ と思っただ方もいることだろう。

バツサリ言っちゃえば、彼はこの宇宙の地球を勤務先に指定した。様は地球限定の警備隊である。

別に自宅警備員とかではない。決して。

その夜、レンとなのははテレビを見ていた。

その際、レンがポツリと漏らす。

「なあなのは、お前本当に怖くないのか？ 俺一応宇宙人だぞ？ 結構でかいしそれなりに強いし…」

お前の場合それなりどころの騒ぎじゃないだろ！  
という突っ込みはこの際置いておこう。

対してなのはは、

「前にも言いましたけど、レンさんはレンさんであることにかわりはありません。確かに驚きましたけど、それでも怖くは無かったです」

その言葉にレンは目頭を熱くしながら、ふと思ったことを口にした。

「ところでなのは？ 何で俺には敬語なんだ？」

「ふえ！？ だ、だって年上ですから…」

「でも家族だろ？ 溜め口でいって、な？」

「か、考えておきます…」

そう言ってドラマに集中した。

運悪くラブシーンだった為、なのは的にはかなり気まずかったとか…。

海鳴市side  
八神家編

はやての部屋

「んじやはやて、始めるぞ?」

「う、うん……久々やから、そつとやってな……？」

「おう……」

「ひゃうっ！」

「あ、悪い、痛かったか？」

「い、痛くはないんやけど……ちよおくすぐった……あつ……」

「我慢しろ。もうちつと奥まで入れるぞ」

「うあつ……ちよ、翔兄いゝ……」

「おい、変な声出すなっ」

「せ、せやけど……あ、そ、そこはっ……らめえ……」

「なにしてんだてめえええええええ！！！」

「あぼらすつ！」

何かをやっていた所に、割り込んできた赤毛の少女がゲートボールのスティックの様な物で翔をぶっ飛ばした。

ぶっ飛ばされた翔は、青い悪魔の名前を叫びながら壁に上半身を突き刺した。

部屋に勢い良く入ってきたもう二人の女性が、慌ててはやてに駆け寄る。

少女の方は、こちらを向いている翔の尻をボコス力叩く。

「主はやて！ ご無事ですか！？」

「はやてちゃん、何もされてない！？」

「シグナムもシャマルもヴィータもちよお落ち着いて！ 翔兄いはただ耳掃除してくれとっただけやから！」

「はっ！！？？」

良く見ると、はやての周りには大量の綿棒や、耳掃除用のオイルがぶちまけられている。

そして明らかにはやては翔に背を向けて寝ていた痕跡がある。

ピンクの髪をポニーテールにした女性、短い金髪の女性、赤毛を三つ編みにして二つに分けた少女の背中を、冷や汗がダラダラとたれる。

そしていい具合に痙攣している翔を見て、口をそろえてこう言った。

「「すみませんでしたああああああ……！」」

「がふっ……」

**幕間 それぞれの未来（後書き）**

え？ ノクターン？ なにそれそれっておいしいの？

シークレットボタンを見て思いついたネタです！  
引っ掛かった人は拳手をノ

A、S 編第1話 突然の始まり（前書き）

いよいよA、S 編です！

今日のエースな一言

「俺のビッグバンは、もう止められないぜえ！！」 by ゼロ

これって書く人によって大分違いが出ますよね。

→のパターンや

「俺のビッグバンはあ、もう、止められないぜえ！！」

とか。

A、S 編第1話 突然の始まり

「一つ！ ハラペコのまま学校に行かぬこと！

一つ！ 天気の良い日に布団を干すこと！

一つ！ 道を歩くときには車に気をつけること！

一つ！ 他人の力を頼りにしないこと！

一つ！ 土の上を裸足で走り回って遊ぶこと！

おっし！ 洗濯物終わりい！」

「翔兄い、ちよお5時間くらい黙っとって」

「おまつ！ 俺に死ねと言ってるのか！？」

「大丈夫、翔兄いは強い子やから」

そんなバカな会話をしているのは、八神家の日常茶飯事。

だが、それはあくまで表の話。

その裏は、まだ誰も知らない……。

ウルトラマンブレイブ 魔道士との遭遇  
A、S 編第1話 突然の始まり

早朝

高町なのはは、空き缶を使い、アクセルシューターの練習を行っていた。

それを遠目に見つめるのは彼女の兄貴分、『モロボシ・レン』

彼はアクセルシューターを見ながら、見よう見まねで青いエネルギー球を作り出していた。

もつとも、なのはほどの数も勢いも無い劣化版だが。

二人は目を瞑り、精神を集中した状態でアクセルシューターを動かす。

「リリカルマジカル……！」

「えっ！？ えと、ゼロゼロレオゼロ……？」

マネセンでええわ！

二人とも身体に負担を覚えつつも缶に順調に球体を当てていく。

「ラスト……！」

最後の一撃を当て、ゴミ箱に向かっていく。

が、箱の淵に弾かれ缶は空しく地面を転がる。

「ああ……」

なのはから落胆の声が漏れる。

「まだだあ!!」

レンはウルトラ念力を使い、二つの缶をゴミ箱に叩き込む。

別にそこまでせんでもええだろ。

なのはは自分の相棒<sup>デバイス</sup>、レイジングハートに採点してもらい、今日の反省を始める。

「おいレイジングハート、俺は何点だ!？」  
【0点です】  
「ライ」

同時刻　アースラ内

クロノ、フェイト、アルフ、ユーノ、そしてもう一人。

5人は明日行われる裁判の最終確認を行っていた。

「じゃあ最終確認だ。被告席のフェイトは、裁判官の問いにそって答えること」

「うん」

「今回はアルフも被告席に入ってもらおうから」

「分かった」

「僕とフェレットもどきと不思議ちゃんは証人席だ」

「分かった……ってお「G I G !」ユウキさん……」

反論しようとしたユーノの言葉を、ユウキと呼ばれた青少年が遮った。

最終チェックを終えた後、4人は各々の部屋に戻った。

ユウキとユーノ、フェイトとアルフが同じ部屋なのだが…。

「僕にはユーノ・スクライアって言う立派な名前があるんだぞ…」  
なにやらぶつぶつ言っているユーノと、

「ウルトラマ〜ン ♪ ブ〜レイ〜ブ ♪  
ウルトラマ〜ン ♪ ブレイ〜ブ ♪」

何か歌っているユウキとで温度差が激しかったとか…。

夜のこと

海鳴市 市街地

突然、レンの体を不思議な感覚が襲う。

（この感じ………結界！？）

「なのは！」

上の階にいるなのはの声をかける。

レイジングハートもそれを感知したようで、二人は外へ出た。

しばらく待っていると、謎の球体がなのはに向かって拘束で飛来してきた。

「っ！」

それをすんでの所で防ぐ。

だが反対側から赤い服を着た少女がハンマーの様な物を振りかざしてきた。

「テートリヒ、シユラアアアック！！」

それを反対の腕で器用に防ぐのは。

「てめっ！」

見かねたレンが飛び掛るが、足元に光弾を打たれて引き下がる。

「なにもんだ！？」

その方向を見ると、銀色の巨人が構えて立っていた。



「くっ……」

組み合わせでは押されつつあるジョーカー。

「ざっけんじゃねえええ!!」

ジョーカーのカラータイマーが強く光り、ゼロを押し始める。

「なっ!?!」

「ぶつとべえええええっ!!」

その言葉通り、ゼロをぶつ飛ばしてビルに激突させる。

「うおおおおお!!?!」

ビルにぶつかり、身体に激痛が走る。

中を見ると、なのはが丁度プロテクションを砕かれたところだった。

「！　なのはあ！」

「余所見してんじゃねええええ！！！」

ジョーカーが横からスペシウム光線を打ち出し、それを食らって吹っ飛んでしまう。

「ぐっ…あっ…」

大分ふらつきながらも何とか立ち上がる。

だが、体力的には向こうに分があった。

（ちくしょう……）

心の中で悪態をつき、目の前の巨人を睨む。

左腕のブレスレットを槍の様な形に変えたジョーカーが迫る。

なのはの方も、死を覚悟したその瞬間。

ゼロの方では上から金の光が降り注ぎ、なのはと赤い少女の間に金髪  
の少女が割ってはいる。

赤い少女は一旦距離をとり、金髪の少女を睨む。

「仲間か……!？」

その問いに、金髪の少女は短く、けれど鋭く答えた。

「友達だ…！」

ゼロの方では、金の光が降り注いだ後、メビウスに似た巨人が降りてくる。

「てめえ、そいつの仲間か!？」

ジョーカーも似たような問いをするが、こちらは対照的に大きく名乗った。

「ブレイブ！　ウルトラマンブレイブ！　ゼロの弟だ！」

ウルトラマンブレイブが、今降り立った……！

A、S 編第2話 戦いの嵐（前書き）

今日のエースな一言

「過去は変えられないが、未来なら変えることができるかも知れない……」by 姫矢

これ良いセリフなんですけど、言われた弧門は怒ってどっか行っちゃったんですね……。

## A、S 編第2話 戦いの嵐

「セアッ!」

ブレイブがジョーカーを殴り飛ばし、そこにゼロがエメリウムスラッシュを叩き込む。

「ウアッ!」

そして二人でゼロキックとブレイブスピニングキックを決める。

「ガッ……」

ゼロは横目でなのはの居るビルを見る。

ユーノが何か手から出している。

恐らく回復魔法だろう。

その人間の何万倍も発達した耳に聞こえてくるなのはの声は、ひどく弱弱しかった。

「てめえ! 何でなのはにこんなことしやがった! ああ!?!」

なのはの様子を見てゼロはガチギレる。

「うるせえよ……てめえらには関係ねえだろおおお!」

再び突っ込んでくるジョーカー。

そこに空が割れ、中から赤くて巨大な角の生えた超獣が現れる。

「バキシマム！？」

ブレイブが驚きの声を上げる。

バキシマムとは、バキシムの強化形態である。

それがブレイブに向かって襲い掛かる。

「おい！　なんでバキシマムが出てくんだよ！？」

「俺に言っな！」

ゼロとジョーカーがそんなことを言いながら戦い続ける。

「ハッ！」

ブレイブがブレイブスラッガーを向き合わせてツインソードにする。それを振り回し、バキシマムの巨大な角とぶつかって火花を散らす。

が、至近距離で火炎放射を食らってしまう。

「セアアアアッ!?」

身体から煙が出て、ブレイブが力無くその場に倒れる。

「ブレイブ!」

ゼロが近付こうとするが、ジョーカーがゼロに八つ裂き光輪を放つ。

「ちっ!」

それをゼロスラッガーで打ち破り、そのままゼロキックをかます。

「くうううう……」

それを食らって吹き飛ばされるが、何とか踏みとどまる。

このとき、全員のカラータイマーが点滅する。

（くそぉ……）

焦ったジョーカーは、右の拳にエネルギーを溜め始める。

「ぜ……ア……」

立ち上がったブレイブは、フェイトがピンクの髪をポニーテールにした女性に吹き飛ばされるのを目撃する。

「フェイトオ！」

ビルに落ちる前に受け止めようとするが、バキシマムの巨大な角が発射され、身体を貫かれる。

「がはっ……」

そのままブレイブはユウキの姿に戻った。  
その腹からは大量に血が出ている。

（レン……さん……離れて……）

ゼロの頭になのは声が響く。

（なのは？）

見ると、胸から手が生えた状態のなのはがスターライトブレイカーを放とうとしていた。

「おいゼロ！」

ジョーカーのほうを向くゼロ。

「勝負は預けとくぜ！」

拳を大地に叩き込み、辺りに閃光が走る。

「スターライト………ブレイ、カー！！」

極太のピンクの光線が天空に向かって放たれ、結界が破壊された。  
その隙にジョーカー達は脱出した。

そしてゼロはレンの姿になり、ユウキを回収して他の仲間を拾った。

「ただいま」

「あ、皆おそろいか」

翔が家に入ると、はやてが柔らかい声で出迎えてくれた。

「皆お疲れみたいやけど、大丈夫なん？」

全員『うつ…』と言う表情になる。

「大丈夫だ。お前が気にすることじゃねえから」

翔がはやての頭をなでると、一瞬くすぐったそうな表情になり、その後は何事も無く食事を取った。

現在、はやて達が風呂に入ろうとしていたのだが

「シグナムもどや？」

「いえ、今日は遠慮しておきます」

「お風呂好きが珍しいじゃん」

「そういう日もある」

「ぶ〜ん、じゃあ翔兄いd「断る」ぶ〜ぶ〜！ 最近翔兄いノリ悪いで〜」

はやての文句を無視し、シャマルに無理やり風呂に運ばせる。

「んでシグナム、実際のところなんで風呂入んねんだ？」

その言葉に、シグナムは服の裾を捲る。

そこには、一つの傷跡があった。

「先程の魔道士か」

ザフィーラが今作で始めて口を開く。

「ああ」

それを床に胡坐を書いて下から覗き込む翔。

「…………ピンク、か…」

「なっ!？」

慌てて服の裾を降ろすシグナム。

「あれ？ 勘で言っただのに…?」

翔の背中に冷や汗がダラダラと流れる。

「レヴァンティン!」

【えい】

「みぎゃああああああああっ!?!」

N I C E   E N D ♪

A、S編第2話 戦いの嵐（後書き）

次回、久々に『あの人』登場！

A、S 編第3話 師弟の戦い（前書き）

今日のエースな一言！

「最後まで諦めず、不可能を可能にする。  
それが、ウルトラマンだ！」 by メビウス

### A、S 編第3話 師弟の戦い

バキシマムの角に身体を貫通されたユウキは、何とか一命を取り留め現在は普通のベッドで寝ている。

なのはと再開の喜びを分かち合ったフェイトは、ユウキの様子を見に来た。

「ユウ……キ……？」

「あ、フェイト……」

何とユウキは状態を起こしていた。

「ダメだよユウキ、まだ寝てないと……」

「これくらい平気だよ」

心配するフェイトをよそに、明るく拳を握って見せるユウキ。

だが、ほんの一瞬だけ辛そうな表情を見せる。

フェイトはそれを見逃さなかった。

「ほら、まだ寝てなきゃ」

「いや、だからだいじょ……フェイト……ちゃん？」

突然フェイトに抱きつかれ、思わずちゃん付けで呼んでしまう。

「もう……無茶しないでよ……ユウキが刺されたの見たら、私……おかしくなっちゃいそうで……」

泣きながら話すフェイトに、ユウキは少しテンパってしまふ。

あわあわと両手を動かした後、結果的にフェイトの頭をなでて落ち着かせるという答えに行き着いた。

「ごめんね、心配かけちゃって……僕はもう、負けないよ。本当の戦いは、ここからだからね……」

「……………うん……」

その後安心したのか、フェイトはユウキに抱かれたまま眠ってしまった。

（ロクに休んでなかったもんね……）

その寝顔を愛しそうに撫でた後、自分の布団に入れて自身も眠りに着いた。

犯罪……………ではないですよ？

多分……………。



「ここは……また長距離思念対話空間？」

金の光に包まれた空間に浮いているユウキ。

その正面に、ウルトラマンメビウスが姿を現す。

「教官！」

ユウキが嬉しそうに声を上げるが、メビウスはいたって冷静に言い放った。

「ブレイブ、光の国に戻るんだ……」

「えっ……？」

喜びにバタバタさせていた手足を止める。

「どういっ……」

「今君の居る地球に、途方も無い脅威が迫りつつある……」

「だったらなおさら、僕が居なければ！」

「今の君が望めば、命を落とすのは確かだ……」  
「っ！」

冷たい宣告をされ、黙ってしまうユウキ。

やがて、意を決した様にメビウスを睨む。

「構いません。地球の人達を守れるなら、僕の命なんて！」  
「ブレイブ！」

しばらく睨み合いが続く。

そして、メビウスがブレイブに向かって構えた。

「どうしても残るなら、その想いを見せてみる……」

いつもの柔らかなイメージのあるメビウスと違い、かなり冷徹になっている。

だが、それが彼にとっても辛い振る舞いであることを、ユウキは知らない。

「……分かりました」

ブレイブの姿に戻り、メビウスと対峙する。

「僕は……貴方を超える！」

メビウスの懷に突っ込み、アッパーを繰り出す。

「甘いよ……」

それを片手で受け止め、胴体に膝蹴りを連打する。

「ガハッ……」

それを振り払い一度メビウスと距離をとる。

お互いに同じ構えを取り、ブレイブシュートとメビウムシュートがぶつかり合う。

が、徐々にブレイブシュートが押され始める。

「ク……ウウウウ……」

そして威力が増したメビウムシュートを食らい吹き飛ばされる。

「クソッ」

ブレイブブレードを出し、メビウスに突撃する。

メビウスもメビウムブレードを出して迎え撃つ。

二本の橙色の剣がぶつかり合い、激しく火花を散らす。

一度深くぶつけた後、お互いに押し合う。

（今だ！）

ブレイブがブレイブスラッガーに手を伸ばし、奇襲を仕掛けようとした瞬間、メビウスが剣を引き、前のめりに倒れてしまう。

「ゼツ!?!」

何とかすぐに後方へ飛ぶが、倒れた瞬間にブレイブブレードが折れてしまう。

「ハア……ハア……」

意識の中とはいえ、まだ傷の癒えていないブレイブは息が上がっていた。

（僕は……ここにいたい……。フェイトや、皆と一緒に過ごして生きたい!）

ブレイブが強く願った瞬間、ブレイブの身体が燃え上がる。

「ハアアアアアアアアアア!?!」

そのままメビウスに掴みかかり、全エネルギーを開放する。

「セアツ!?!」

ブレイブが大爆発を起こし、メビウスに大きなダメージを与える。光の粒子が集まり、それがブレイブの形になる。

お互いにカラータイマーが点滅し、肩で荒い呼吸をしている。

やがて、ブレイブが力尽きた様に倒れた。

そこにメビウスが歩み寄る。

そして

「はい」

赤いナイトブレスをブレイブの右腕に付ける。

「教官…?」

メビウスを見上げながら、意味が分からないと言っ声を出すブレイブ。

「ごめんね、君の最後の実力テストをやらせてもらったよ」

後頭部を掻きながら言っメビウス。

「そ、それじゃあ!」

「うん、合格だ」

今までの疲れは何処へやら、ブレイブは立ち上がり、ピョンピョン飛び跳ねる。

「だが忘れないでくれ。

命を懸けて戦っのは、笑顔でまた、仲間達に会っためだっ言っこと。

それと…」

ブレイブの肩に手を置く。

ブレイブの目を見ながら、メビウスはこっ言った。

「僕も皆も、いつでも君の事を思っっているよ。

君は一人じゃない」

「はい!」

そう言った後、空間が消え、ブレイブは現実に戻された。

目を覚ますと、左腕にブレイブブレス、右腕にはナイトブレスがついていた。

それを左手で握りながら呟いた。

「ありがとうございます……父さん……」

横で寝てるフェイトを見て微笑んだ後、再び眠りについた。

光の国

メビウスは、自分のメビウスブレスを撫でていた。

「ブレイブ……」

さっきまでフルボッコにしていた奴の名前を呟く。

（やっぱり僕にはレオ兄さんと同じことはできないな……）

後輩に甘い自分を反省するメビウスであった。



### A、S 編第3話 師弟の戦い（後書き）

メビウスのキャラが違って驚かれた方、すみません。

メビウスは結構無理してアレをやってます。

実際はもっと温厚です。

今回は第2話と展開が似てましたがいかがでしたでしょうか？  
では、次回もお楽しみに！

A、S 編第4話 昔の話（前書き）

今回は会話文が少なくて読みにくいですが、ご了承ください。

## A、S 編第4話 昔の話

朝

フェイトが眼を覚ますと、横にユウキの姿が無かった。

慌てて飛び起き、ユウキを探しに行くフェイト。

廊下で会ったレン、なのは、ユーノ、アルフ、クロノと共に、アースラを走り回ってユウキを探した。

しばらく探した末、一旦食事を取るようになった。

そのとき！

フェイトの眼に、一人の少年が映った。

にこやかな笑顔でエプロンと三角巾を身に纏い、鼻歌を歌いながらカレーを作る少年の姿が。

フェイトは壊れたブリキ人形の様な動きでクロノの方を見る。

「クロノ、ちょっとカレー買って来てくれる？」

「いや、なんでば「買って来てくれる？」……分かった」

その殺気を見た瞬間、誰もが思った。

（怖っ！！）

アルフは尻尾の毛が逆立ち、ユーノは頬を引きつらせ、なのはにいたってはレンの後ろで「あわわわわわ……」と繰り返している。レンですら怖いと思うほどだったので相当だろう。

ってか動けたクロノが凄い……。

カレーをフェイトの前に置き、フェイトはそれを一口食べる。

（間違いない。ユウキのカレーだ）

このときのフェイトは、本局執務官もビックリな洞察力と鋭い眼光を放っていたという。（後、クロノ・ハラウン談）

おもむろに端末を開き、厨房に繋ぐ。

「すみません、このカレーを作った人をお願いしますか？」

『あ、はい！ ユウキくん、お呼びですよ！』

『はい、今行きます』

奥から聞こえてきた声、そしてユウキという単語……。

確信が持てた。

なのは曰く、「普段人見知りなフェイトちゃんがあんなに行動的だったのはあのときが始めてかも……」とのこと。

「あ、このカレーを作ったヒビノ・ユウキです！ よろしく願いし……じゃなかった、お口にaimせんでしたでしょうか……？」

ちよつとしよげたトーンで、にこやかに瞑っていた眼を開く。

そこには、周りから見れば眩しすぎる、見られてる方からしたら寒気を感じるといふ不思議な笑顔を向けたフェイトがいた。

途端、ユウキの体を大量の冷や汗が駆け抜ける。

「フエ、フェイト！？　ど　ど　ど　ど　ど　ど　ど　う　し　た　ん　に　よ　！　？　」

言えてない言えてない。

「ユウキ？　無茶しないって約束したよね？　よね？」

「で、でもねフェイト、これくらい無茶に入らないよ！？」

軽く腕を曲げてみせるユウキ。

だが、その顔がほんの一瞬苦痛に歪んだのを、フェイトは見逃さなかった。

「……無茶してるじゃん」

「い、いや、今のハユウキ？」　申し訳ございませんでしたあ  
！　！　」

最後の一押しに、華麗な土下座を見せるユウキ。  
他人の眼？

そんなものをこの子が気にすると思いますか？

この後、ユウキがフェイトにこっぴどく叱られたのは言つまでも無い。

お説教が終わった後、ユウキは泣いてて何も言えなかったという。

「ちょっとやりすぎたかな…………？」

「ちよつとどころの騒ぎじゃないの…………」

## 八神家

はやて、ヴィータに挟まれ、翔が寝ている。  
おいそこ代われ。

……何てことはこれっぽちも思っていないデスダ。  
ごほん……。

その翔はと言うと、寝ぼけてすっかり闇の書に触れてしまった。

「ふじっ！？」

途端、闇の書から眩い光が放たれ、翔はその場から消えた。

その後なんやかんやあり、フェイトはなのはの家の近所に引っ越した。

以前使っていた方をユウキが使おうとしたが、フェイトと一緒にここに住もうと言われ断念する。

最も、先程のことではユウキがフェイトに頭上がないと言っている。大きい。

そしてなのはとフェイトがわいわいきゃっきやしている頃、ユウキはポケットを探っていた。

「そろそろ、こいつの出番が来るかな……？」

バルディッシュ待機モードの、色が白銀になった様な道具を握っていた。

詳しくは第5話、【デバイスの作り方】参照。

真っ暗な空間。

そこで翔は目を覚ました。

「どこだ……？　ここは」

辺りをキョロキョロと見回すが、何も無い。

すると突然、目の前に映像が流れる。

戦乱の最中、次々と人を殺していく騎士達が居た。  
翔は、その姿に見覚えがあった。

「シグナム？　シャマル、ザフィーラ……ヴィータまで……！？」

自信の家族の姿が映っている事に、動揺を隠せない。  
今の自分が知る彼女等の目ではなく、彼が何度も見てきた、殺人鬼

の目をしていた。

また、シグナムが一人の男性を切り落とす。

「やめろ……やめろやめろやめろおおおおお！！」

それが映像である事も忘れ叫ぶ翔。  
途端、映像が消える。

「すまない、今の映像は貴方には刺激が強かったようだ……」

暗闇の奥から、美しい銀髪の女性が現れた。

「あんたは……？」

警戒する様にその女性を睨みつける翔。

「吟遊詩人、とでも言っておこうか……」

そう言う女性の顔は、どこか寂しそうに見えた。  
まるで、あのときの彼女みたいに……。  
それを見た翔は、黙って拳を握り締めた。

「……な、なあ！ さっきのは、なんだったんだ……？」

無理やり話題を作る翔。

「……今は、貴方方が闇の書と呼ばれる魔道書の記憶……はるか  
昔、古代ベルカの時代の……」

「古代、ベルカ……」

その夜、レンは外で一人星を見上げていた。

「レンさん、どうしたんですか？」

なのはがやって来て、レンの横に立つ。

「うんにゃ、こうして星を見てるとき、故郷の事を思い出すんだよ

な……」

「レンさんの、故郷……？」

「そういえば、まだ話してなかったな。俺の罪……」

口を真一文字に結んだ後、レンは口を開いた。

「昔な……」

同じ頃、ユウキもベランダで星を見上げていた。

その腕には、なぜかブレイブブレスが出現している。

「ユウキ、お風呂開いたよ……？」

「うん、クロノ君に先入ってって言うてあるから」

「そっか……」

そう言っユウキの横に並ぶ。

「なに考えてたの？」

「ちよっとね。昔の事さ……僕が、今よりもっと未熟で、もっと、弱かった頃……」

「昔の……こと？」

まだ幼いフェイトからすれば、昔、と言われてもあまりピンと来ない。

首をかしげていると、意を決したようにユウキが口を開いた。

「昔ね……」

しばらく銀髪の女性から昔話を聞いた翔は、やがておもむろに喋りだした。

「昔話してもらったんだから、こっちも話さねえとな……」

何も無い空を見上げ、口を開く。

「昔……」

昔、一人のウルトラマンが居ました。

そのウルトラマンは、偉大な『ウルトラ兄弟』の称号を持つ戦士の

息子でした。

ですが彼はそんな事知らず、教導等もばっくれて生活していました。今思うと、寂しかったのかも知れません。

あるとき、そのウルトラマンは訓練校でトップの成績をキープしていました。

誰もが彼の実力を認めていました。

そう、実力だけは……。

それで気を良くしたそのウルトラマンは、絶対に触れてはならないと言われている、大事なものに手を出そうとしました。

が、寸前で一人のウルトラ戦士がそれを止めました。

そしてそのウルトラマンは、磁気嵐の激しい惑星で、厳しい修行をする羽目になってしまいました。

それはそれは過酷でした。

重たい拘束具を付けられ、師匠は手加減も無くボコボコにしてきて……。

そんなある日、彼はあるものを見ました。

訓練中に、岩の下敷きになろうとしていた、小さな生き物です。

彼は咄嗟に動き、その生き物を救いました。

その瞬間、自分の父親からの最後の願いを乗せた形見が飛んできました。

事態を把握した彼は一気に飛び立ち、父親の元へ急ぎました。

が、彼がついたときには、彼の父親は息を引き取ってしまいました。

彼は怒りを押さえ、全宇宙を支配しようとした強大な悪に向かって

いきました。

そのとき、かつて触れそうになった大事なものに、真の勇者として選ばれました。

彼は仲間と共に、何とかその悪を倒しました。

ですが、戦いはまだ終わってませんでした。

しばらく故郷で弟分を鍛えたり、復活した父親と特訓したり、傷ついた故郷の復興に尽力したり、至って平和に暮らしていました。そのとき、再び故郷が襲われました。

彼は父親と共に何とかそれを撃破しましたが、根源は別の所に居ると知りました。

彼はその悪を追う為、一人遠くへと旅立ちました。

それはそれは不安な旅でした。

何しろ今から自分の行く場所は、一度行って帰ってきたものは居ないと言われる場所だからです。

ですが彼は、弟分の言葉を思い出しました。

『最後まで諦めず、不可能を可能にする。それが、ウルトラマンだ！

——なら大丈夫！ 僕が保障します！ 今はこんな事しか出来ないけど、笑顔でまた、仲間達に会えますから！』

その言葉に、彼は胸が熱くなりました。

そして自らを奮い立て、とうとう主悪の根源が住む場所へと到着したのです。

そこで新たな仲間と出会い、何度も傷つき、何度も倒れました。ですが、彼は諦めませんでした。

たとへ勝つ事が不可能な戦いでも、彼の心は折れませんでした。その『諦めない』と言う心に反応し、伝説の巨人が力を与えてくれました。

もちろん、仲間達の協力のもと。

そして彼は悪を打ち倒し、新しい組織を作りました。

一度故郷に戻った彼は、弟分も遠くへ旅立ったと言う話を聞きました。

途端、彼は弟分を追って飛び立ちました。

自分を救ってくれたのは、彼だから。

せめてもの、恩返しをしたい。

その思いで……。

そうして彼は、たどり着いたのです。

掛け替えの無い星、『地球』に……。

「そのウルトラマンって、もしかして……！？」

「そう、それが……」

昔、一人のウルトラマンが居ました。

そのウルトラマンは生まれ方が特殊な為、家族が居ませんでした。

ですが自分を引き取ってくれた人が、自信の事を父さんと呼んでも良い、と言ってくれました。

でもそのウルトラマンは中々そう呼べませんでした。

まだ自分がその人の息子には相応しくないと判断したからです。

そこからは、その人、教官に指導してもらった毎日でした。

しばらくして、彼は中々能力が向上してきました。

そして隊長の命を受け、出現した超獣を倒す為別の星へ飛びました。彼は我武者羅に戦いました。

が、結果はもちろん敗北。

その超獣はまだ生きており、彼が倒さなければ意味が無いと言われました。

ですが彼は既に自信を無くしていました。

でも、教官の言葉を受けて立ち上がることができました。

『最後まで諦めず、不可能を可能にする。それが、ウルトラマンだ！』

その言葉を胸に、彼はひたすら特訓を重ねました。

そして再び超獣に戦いを挑み、何とか勝利する事ができました。

ですが、戦いはまだ終わってはいませんでした。

教官と共に彼は任務に出かけましたが、宇宙人の罠に嵌り、彼を庇った教官はどこかに連れ去られてしまいました。

しばらくして、教官が別の惑星で滅茶苦茶に暴れているとの報告を受けました。

責任を感じた彼は、単身教官を止めにいきました。

大好きな教官、父親を攻撃するのは非常に辛い事でしたが、彼は何

とか勝利を収め、教官を悪の手から救い出しました。

その功績が認められ、彼は別宇宙に旅立つ事になりました。  
憧れの兄貴分が行ったという、別宇宙。

彼は教官とおそろいの武器を授かり、宇宙へと飛び立ちました。  
そしてたどり着いたのです。

掛け替えの無い星、『地球』に……。

「その、ウルトラマンって言うのが……?」  
「そう、それが……」

昔、一人のウルトラマンがいました。

そのウルトラマンは、偉大な『ウルトラ兄弟』の称号を持つ戦士の  
息子でした。

彼も努力家で、毎日真面目に教導に取り組んでいました。  
ですがある日、故郷が凶悪な敵に氷付けにされてしまいました。  
そのとき任務で故郷を離れていた彼は、悔しさに拳を握り締めまし

た。

そして根源を倒そうとしましたが、それは同期の問題児が解決してしまいました。

あぐく訓練校の話題も新人の話で持ちきり。

彼は悔しかった。

なぜ皆自分を見てくれないんだ？　なぜこんなに自分は努力してるのに、それを評価してくれないんだ？

そう思った彼は、誰にも言わず故郷を出ました。

そして一人ではたどり着けないはずの場所、『マルチバース』と呼ばれる場所に、無理やり突入しました。

その影響で、彼の体は深刻なダメージを受けました。

そして彼は現地の種族の体を、自分なりに複製し、それになりきりました。

力を失った彼は、しばらく一人の少女の兄として暮らしていました。もちろん、血は繋がっていません。

でも、彼女は彼を兄貴と信じていました。

彼女が7歳のとき、彼は彼女に言いました。

自分は、君の兄ではないと……。

でも、その行いは間違いでした。

彼女からは『嘘つき』『化け物』『消えろ』『二度と自分の前に現れるな』などの言葉を言われ、彼は大変ショックを受けました。

ですがそれは彼女も同じことで、深刻なまでに暗くなってしまうしました。

そこで彼は、再び嘘を付きました。

さっきの言葉が嘘だという、二重の嘘を……。

それから言うもの、二人は仲良く暮らしていました。  
彼からすれば、いつ正体がばれるかと、毎日怖いものですが。

「そしてその彼が……」  
「そう、それが……」

「俺だ／僕だ」

夜はまだまだ長い……。

A、S 編第4話 昔の話（後書き）

多分続きます。

## キャラクター紹介2

名前：ヒビノ・ユウキ

外見年齢：15歳

実年齢：不明

変身アイテム：ブレイブブレス

本来の姿：ウルトラマンブレイブ

デバイス：バルディッシュ・ブレイブ

### 備考

本編主人公。

メビウスとゼロに憧れ、その姿を模してプラズマスパークから生み出された純粋なディフレーター因子の塊。人間形態もほぼ無理やり作った為、大きな欠陥が……。

メビウスを師や父の様に慕い、ゼロとは兄弟の様な関係を築いている。

その性がメビウス同様世間知らずで天然な性格。

地球に来てすぐベムラーと戦い、初の地球戦での影響が戦闘終了直後に意識を失ってしまう。その際にフェイト・テストロッサに助けられ、現在まで同居して生活している。

当のフェイトとは、一緒に寝たり風呂に入る仲。本人はただのスキップとしか思っていないが。

尚フェイトとアルフの食生活に不満を抱いた為、料理を含む家事全般を自分の仕事としてこなしている。好物はカレーで、一度作り出

ずと一週間止まらない。

フェイトの母、プレシア・テストロッサに化けたクイーンベリアルとの戦闘で、共に地球に来た仲間のブレイブギヤラクシー（通称レクシー）を失う。

それを切欠に、戦闘スタイルが周りを意識したものに変わっている。必殺技はブレイブシュート、ブレイブツインシュート。

名前：モロボシ・レン

外見年齢：19歳

実年齢：不明

変身アイテム：ウルトラゼロアイ

本来の姿：ウルトラマンゼロ

備考

ウルトラマンゼロが人間の姿を模した姿。惑星アヌーで出会った青年ランと模している。

本家同様戦闘能力と体力がずば抜けている。その分オツムの方が残念な感じではあるが。

弟分であるブレイブに良い所を見せようと一人で街を歩いていた際、空腹で倒れてしまう。

偶然通りかかった少女、高町なのはに救われ、そこに居候している。

最近ではウルトラマンとしての姿より翠屋のエプロン姿の方が様になってきている。  
過去にブレイブに言われた言葉のおかげで、恐怖を克服した事がある。

名前：八神 翔やがみ しょう

外見年齢：14歳

実年齢：不明

変身アイテム：ウルトラブレスレット・ジョーカー

本来の姿：ウルトラマンジョーカー

備考

ウルトラマンジャックの息子、ウルトラマンジョーカーが八神家の長男と名乗った仮の姿。

はやての両親のDNAをコピーして作り出した為、血液検査をしても兄妹であると分かる。

幼い娘を残して八神夫妻が他界し、それを哀れんだジョーカーが故郷への帰還不能も無視して生活してきた。

その為はやてに関する事なら何でも分かる。

光の国にいた頃はゼロとの差にコンプレックスを抱いていた。

それが嫌で故郷を抜け出し、単身マルチバースに突入後、この世界の地球にたどり着いた。

現在ではゼロ達と敵対関係となっている。

A、S 編第5話 肉体の限界（前書き）

タイトルがネタバレすぎる……。  
若干レンパートが短いです。

A、S 編第5話 肉体の限界

「ユウキ……」

フェイトはユウキの顔を覗き込む様に見る。

その目に映る少年は、酷く小さく、酷く脆く見えた。だからこそ彼の手を握ろうとしたのだが、出した手はすぐに引っ込んでしまった。

「っと、昔話はいここまで！ お風呂入ってくるね！」

「あつ……う、うん……」

無邪気な笑顔を向けられ、思わず言葉が出なくなってしまふフェイト。

ユウキはせつせと自分のパジャマを持ち、風呂場へと歩いていった。だが、その右手から光の粒子が一粒漏れた事に、フェイトは気付かなかった……。

ウルトラマンブレイブ 魔道師との遭遇

A、S 編第5話 肉体の限界

自室から出たユウキは、壁に背中を預け、荒い呼吸を繰り返していた。

「はっ……あぐっ……」

その表情は先程の無邪気なものとは違い、苦痛に歪んでいた。そして自分の右手をじっと見つめる。その指先からは、光の粒子が数粒漏れていた。

「やっぱり……無理だったのかな……」

諦めの混じった様な笑みを浮かべるユウキ。

ウルトラマンブレイブ。  
ヒビノ・ユウキ。

どちらも親の遺伝子を受け継いだりした訳ではなく、本人のイメージによって強引に作り出した肉体だ。セブン等の様にモデルを見ていれば良いのだが、ユウキの体はそのモデルすらも本人の記憶の中にしか存在しない。

ブレイブの姿も、ゼロとメビウスに憧れたプラスマスパークの欠片である彼が、その二人の体をモチーフとして構築したものだ。

棒の無いアイスクャンディー、芯の無いトイレットペーパーの様に、

その体は長くはもたないのだ。

そして先日 of 戦闘によるユウキの負傷。それが肉体の消滅を早める最大の原因になっていた。

ユウキは、その右腕に赤いナイトブレスを出現させる。

「記憶……消すしかないのかなあ……」

最も良い方法であり、最も辛い選択をポツリと口にし、すぐにナイトブレスを戻す。

「お風呂……入んなきゃ」

改めて風呂場に向かって歩き出した。

「レンさん……」

一方のなのはも、レンの横顔を見上げていた。

「んまあそんな訳で、俺は昔ヤンチャでしたって話だ。分かったか？」

「……ヤンチャなのは、今もなんじゃ……？」

思わずそんな事を口走ってしまうのは。  
あながち間違っではないが……。

「ほっほう、いつの間にか生意気に育ったなのなあ……」

ユラリ、といった様子でなのはに腕を伸ばし、その柔らかい頬をグニグニと引っ張る。

強引に様々な表情にされたのはは、目尻に涙を浮かべて謝罪を始めた。

「ぎよめんにやしゃい、ぎよめんにやしゃいいー!!」

「君の地球語は難しい……」

やれやれと首を振りながら、レンは手を離す。

なのはは唸りながら伸ばされた頬を元に戻そうとこね回す。  
それを見ながら、レンは急に真剣になって口を開く。

「なのは……お前は、誰かを教え導ける様な人になってくれ。俺みたいに、罪を犯す人が少しでも減る様に……」

「レンさん……はいっ!」

暗い表情になったレンの言葉に、なのはは笑顔で返す。

それを見て、レンも笑顔になるが、よく見るとなのはが口元を押さえてプルプル震えている。

「なんだよ……」

「いや……レンさんが、真面目なこと、言っていると……ちょっと、違和感が……」

笑いを必死に堪えている為か、言葉が途切れ途切れになっている。  
なのはが嫌な奴だからやっている訳ではなく、原因が自分にあることは、レンも重々承知である。だからこそ、彼にとっては果てしなく悔しかった。

「んだとコラァ……アン?」

「えっ? ちょっ、レンさ……にやああああああああああ  
!」

この後なのはが何をされたか、それは皆様のご想像にお任せします。

銀髪の女性に自身のことを話し終えた翔は、体をほぐす為に背伸びをした。

「んゝ……つと、まあそんな訳だ。これで俺だけ秘密聞いたって訳じゃなくなるな。ああゝスッキリした」

無理をして作ったような笑顔。それに気付いていながらも、女性は声をかけることができなかった。  
やがて、徐々に翔の瞼が落ちてくる。

「あ、あれ？　なんか、眠くなつて……」

「……心配ない。じきに目が覚める。今は……おやすみ……」

「そっか……あ、あんた、名前は？」

名前を聞かれた瞬間、女性の表情が曇った。  
名前を隠す為に、吟遊詩人を名乗った……そのことが分かった翔は、  
自分で名前を考える事にした。

「そうだな……俺がここに来る前に知った言葉で、妹も気に入って  
る——っていうのはどうかな？」

「っ！……とても、良い名前だ……気に入った」

「そっか、なら……よかつ……た……」

そう言い終わったとき、翔の体は光の粒子となって消えた。  
残された女性は、翔の言った名前を繰り返し呟いた。

——リインフォース

「……兄い……兄い！ 翔兄い！！」

翔が目を覚ますと、目の前にはやてとヴィータの顔がどアップで映  
っていた。

翔が目を覚ましたのを確認すると、二人はほっと胸を撫で下ろす。  
二人から色々言われるのを聞き流しながら、翔は闇の書を見る。

（なんでだろ？　なんか……　なんか闇の書とあつた気がするんだけど……？）

翔は、先程までの事を覚えていなかった……。

「翔……主を……騎士達を頼む……」

銀髪の女性がそう呟くと、背後の景色が歪む。  
その空間がガラスのように割れ、その奥に不気味な姿をした人物が  
多数並んでいた。

『ふん、ウルトラマン一人来た所で、我等に適うはずはないのだ！』

『それよりも、闇の書の主はいつになったら役目を果たすんだ！  
このままでは我等の計画が実行できない！』

女性に向かって言った人物とは別の人物が声を出す。  
その言葉に、もう一人の方は鼻で笑い飛ばす。

『心配いらん。じきに奴等が来る。我々は我々の準備をしておこう』

そこまで言っと、景色は元に戻った。

それを悔しそうに睨み、唇を噛み締める女性。

「ヤプール……」

ヤプール……確かに女性はそう呟いた。

A、S 編第6話 最高の相棒（前書き）

今日のエースな一言

ダイゴ

「これが…これが光なんだ!!」

ホリイ

「人間舐めたらあかんでえー!!」

二言だったWWW

今回はユウキがあの子の重要さに気付きます！

A、S 編第6話 最高の相棒

朝 6:30

八神はやては目を覚ました。

両横で眠っている翔とヴィータを見て一度微笑み、二人に布団をかけ直してリビングへと向かう。

そこでは、ソファーに座りながら眠っているシグナムと、彼女の足元で同じく眠っているザフィーラがいた。

そんな何気ない朝が、彼女にとっては掛け替えの無いものに感じられた……。

6:30

なのはとレンは、いつもの高台で魔力調整の練習を行っていた。

とは言っても、レンはウルトラ念力をどうにか具現化し様としているのだが……。

普段ならレイジングハートを使うのはだが、現在レイジングハートは破損し、修復の途中である為、それを補おうとこの様な練習をしているのだ。

二人とも胸の前に手を翳し、精神を集中する為目を瞑る。かすかに光が見えたが、それはすぐに引っ込んでしまった。  
レンとなのはは互いに顔を見合わせ、深くため息を突いた。

6 : 4 1

海鳴市市街地・屋上

そこではフェイトが、物干し竿の様な物を振るってユウキと模擬戦をしていた。

ユウキの方は武器なしと言うハンデつきだが、それでも両者譲ることなく互角の戦いを繰り広げている。

少し離れた所では、子犬フォームをとったアルフがそれを見つめていた。

八神家

はやては車椅子を器用に操作し、料理を手際良く作っていく。  
その軽快な包丁の音と、カーテンの隙間から差し込んだ朝日に、シグナムは目を覚ました。

「ごめんな、起こした？」

穏やかな笑顔を向けたはやてが、シグナムの方に向く。

「あ、いえ……」

自分にかかった毛布に気付き、シグナムは申し訳なさそうにそう答えた。

「ちゃんとベッドで寝なアカンよ？ 風邪ひいてまう……」

「あ、すみません……」

はやての注意に、シグナムは毛布を畳みながら答える。  
くすつと笑ったはやては、再び料理に集中した。  
シグナムの足元では、ザフィーラが口で器用に毛布を畳んでいた。

「シグナム、夕べも夜更かしさんか？」

「ああ、その、少しばかり……」

リモコンでリビングに明かりをつけるシグナムに、はやてはホットミルクを差し出した。

シグナムはそれを穏やかな表情で受け取る。

「すみません、寝坊しましたー！」

パタパタとシャルマルがリビングに入ってくる。  
それに対し、はやてはいつも通りのペースで挨拶をする。

「おはようシャルマル」

「おはようー！」

シャルマルは慌ててエプロンをつけながらそう答える。

「ああもつ、ごめんなさいはやてちゃん……」

「ええよ、気にせんで」

そしてようやく眠そうに目を擦ったヴィータと、彼女に顎を乗せながら歩いてくる翔がやってくる。

「ん〜……おはよ〜……」

「むによ〜っす……」

「おお〜、むっちゃ眠そうやな〜。ってか、翔兄いにいたっては何言うつるか分からへんし……」

寝ぼけたままの二人に、再びはやては笑みを浮かべる。  
フラフラと歩くヴィータと翔に、シャマルが声をかける。

「ほら、顔洗ってらっしゃい。翔君も」

「ん〜、ミルク飲んでから……」

「俺ココア〜……」

そんな三人のやり取りを見ながら、シグナムは自分の手元にあるホットミルクを見つめる。

その温かさを感じながら、ゆっくりと口に運んだ。

ウルトラマンブレイブ 魔道師との遭遇  
A、S 編第6話 最高の相棒

少しして……。

「えっと、どうかな……?」

白い制服に身を包んだフェイトが、その場でクルリと一回転する。  
その髪には、かつてなのはと交換したピンク色のリボンが2つついて  
いる。

「うん、バッチリ!」

ユウキはそれにサムズアップで答え、頭を優しく撫でる。  
一瞬くすぐったそうな表情になったフェイトだが、子ども扱いされている事に不満を感じたのかその手をゆっくりと降ろさせた。

「ユウキ、いい加減子ども扱いしないでよお……」

軽く頬を膨らませて文句を言うフェイト。  
それに一瞬鼓動が早くなるのを感じたユウキは、誤魔化す為に再び頭を撫でる。

「あはは、ごめんごめん」

「むうゝ、だゝかゝらゝ！」

そんな微笑ましいやり取りの中、時折ユウキは切なそうな表情を見せた。何かを隠している様な、押し留めている様な……。  
それに気がついたフェイトはユウキの表情を下から覗き込んだ。

「ユウキ、どうしたの？」

「へっ！？ いや、その……、フェ、フェイトがちゃんと友達作れるかなって、心配になっちゃって……」

「むっ、だからもうそんなに子供じゃないってばゝ！」

「何千年と生きた僕からしたら、十分子供の部類だよ」

「……ユウキだって中身子供の癖に……」

止まらないユウキによるからかいに、フェイトは顔を真っ赤にして講義する。

対するユウキも痛いところを突かれたのか、ぐっと呻いて必死に反撃の糸口を探す。

シャンプーハットが無いと髪が洗えない、未だに自分が一緒にいないと夜のトイレが怖い、この間エイミィと比べっこをしたときに自分の体重を少し誤魔化した……。

挙げれば幾らでも挙がるが、さすがにこれ以上言ったらフェイトが泣くと判断し、ユウキはフェイトを学校に向かう様促した。

時計を見て時刻を確認し、フェイトは慌ててカバンを掴んで家から飛び出していった。どうやらギリギリだったらしい。

フェイトが玄関から飛び出したのを確認したユウキはすぐに表情を歪め、壁にもたれかかって腰を下ろした。その額には大量に脂汗が湧き、呼吸は既に荒くなっている。

「はぁ……あぐっ……。また、タイミング逃しちゃった……」

以前記憶消去を決意したときから数日が経ち、ユウキは何度もフェイトの記憶を消そうと行動を起こしてきた。が、その度にフェイト

の表情に心を揺さぶられ、未だに実行できずにいた。先程のやり取りで、ユウキがしきりにフェイトの頭に手を置いていたのはその為だ。

「早くしないと……時間は、あんまり無いんだし……」

自身の右手を見つめる。その指先から、米粒ほどの大きさをした光の粒子が数粒こぼれる。

クイーンベリアルとの決戦までは、ブレイブギャラクシーことレクシーがいた為、彼は何もしなくても無尽蔵にエネルギーを受け取っていた。だが、そのレクシーはもういない。それとバキシمام戦での負傷が重なり合い、肉体の消滅は加速度的に進んでいた。

「やっぱり、レクシーがいないと……」

悔しそうにそう呟くユウキ。今更の様に彼の重要さ、そしてゾフィーが彼をユウキと共に地球に向かわせた理由を噛み締める。すると、ポケットから落ちたカプセルから声がした。

『兄貴、俺は最後までアンタと一緒にいるぜ。例え消滅するときであつても……』

「バードン……ありがとね……」

『レクシーの旦那の代わりに、俺がアンタを支える。だからもう、そんな悲しい表情しなさんな。な?』

「うん……ありがと……。でも、君は君でいて。レクシーの代わりとかじゃなくて、火山怪鳥バードンとして、僕と一緒に戦ってくれる?」

『兄貴……G I G。兄貴の、いや……ウルトラマンブレイブの体は、俺が絶対に守ってみせる!』

「ああ、頼もしいや……」

ほんの少しだけ、ユウキの胸に希望が芽生えた。

まさかバードンに励まされるとは思ってもみなかったと言っのもあり。

「そうだ……僕は……ウルトラマンなんだ……!」

その目には、決意と焦りの混ざった炎が燃えていた……。

夜

海鳴市のとあるビルの屋上で、なのは、フェイト、レンにユウキが空を見上げていた。

その視線の先には、ヴィータとザフィーラが浮かんでいる。

なのはとヴィータのやり取りの傍ら、レンとユウキは本来の姿、ウルトラマンに戻る。

その瞬間空が割れ、中からバキシمامが出現、それに続く様にベロクロンとバラバが出現した。

ゼロの足元で輝いた光が、形となってゼロに立ちふさがる。

『ジョーカー……』

『悪いなゼロ、俺達には時間がねえんだ！』

『お前それでも、ウルトラマンかよ！』

『そのせいで大切な人を守れないなら、俺はウルトラマンの名を捨てる！』

『んだと……！』

ジョーカーの言葉に、ゼロは拳を震わせる。

かつて彼は、実の父親によってウルトラ戦士を名乗る資格を剥奪された。その彼からすれば、自ら望んでウルトラマンの名を捨てる等、考えられない行為だった。無論、悪い意味で。

だからこそゼロは、彼に向かって宇宙拳法の構えを取った。彼の、ジョーカーの考え方を変えさせる為に……！

一方ブレイブは、超獣3体と対峙していた。

『さてと、こっちは本調子じゃないから、バラバはバードンに任せ  
ても良いかな?』

『合点承知!』

『ありがと……行け! バードン!』

バードンに相手をしてもらう超獣を指示し、カプセルを投げる。  
中から勢い良くバードンが出現し、そのままバラバを交戦し始めた。

『そんじゃ、行きましようか!』

ブレイブは左腕にブレイブブレードを出現させ、バキシمامに突っ  
込んでいった。

バキシمامもブレイブに向かい、ベロクロンがミサイルの連射でそ  
れを援護する。

「ハッ!」

ブレイブの頭部にある3本のブレイブスラッガー。それを脳波コントロールで操り、無数のミサイルを全て切り落とす。煙を破り、バキシمامに鋭い拳を食らわせる。

一瞬よろめいた所で、ブレイブブレードを振り下ろす。だがバキシمامも負けじとそれを回避し、至近距離で爪を振り下ろす。

「ゼアアアアアアッ!!」

それがブレイブに直撃し、大きく吹き飛ばされてしまう。空中で姿勢を変え、何とか踏みとどまるブレイブ。だが、すぐにその場に膝を突いてしまう。その胸のカラータイマーが、赤く点滅する。

『嘘だろ!? こんなに早くエネルギーが……っ!』

エネルギーの消費に驚いていると、ベロクロンのミサイルをもろに食らいブレイブブレードが折れてしまう。

『クソッ……!!』

そう毒づくブレイブに、バキシمامの巨大な角が発射された。

「デアッ！」

ジョーカーの振り下ろしたブレスレットランスと、ゼロはゼロスラッガー2本を使って防ぐ。  
そしてそれを弾き、スラッガーをツインソードにして切りかかる。

「デエエエエリヤアアアアア！」

ジョーカーは状態を捻ってそれを回避し、ゼロの胴体に手の平を当てる。

良く見ると、そこには青白い稲妻が走っている。

『スぺシウム……！』

『何！？』

『超っ光っ波あああああああああああ！！』

スペシウム光線の上位互換、スペシウム超光波がゼロに直撃し、辺り一面を青白く飲み込んだ。

迫る巨大な角。

ブレイブまで後数メートルと言う所で、ブレイブの両手にスラッガーが握られる。それを突き合わせツインソードにし、その刃で角を両断する。

そのまま最後のスラッガーを矢にし、光の弦を引き絞る。

『ブレイブ！ アローシューティング！』

光の刃が高速で走り、バキシمامの体を貫いた。

背後からベロクロンが迫るが、ブレイブブレスのサークルを勢い良く腕で回転させ、左の拳をカウンターの要領で叩き込む。

そこから放たれた極太の光線、『ライティングカウンター・ゼロ』が直撃し、ベロクロンは四散した。

「ぜ……ア……」

2体の超獣を倒したブレイブは力尽き、そのまま倒れてユウキの姿に戻った。

その手元に、バラバを倒したバードンのカプセルが握られた。

スペシウム超光波が決まり、ゼロの姿は消えた。

ジョーカーは荒い呼吸でその場に膝を突き、辺りを見回した。その瞬間、その頭を何者かが掴む。上を見ると、ゼロが右手でジョーカーの頭を掴んでいた。

『当たらなきゃ意味ねえぜ！』

『このっ……！』

振りほどこうともがくジョーカーを蹴り飛ばし、ゼロは一度大きく距離をとった。

『お前みたいな奴に……俺は負けない！』

ジョーカーは再び走り出そうとしたが、シグナムから念話が彼の頭に届いた。

『翔、今日の所は一旦引くぞ』

『けどっ!』

『いいから早くしろ! お前がいなくて、我らの主がどれだけ悲しむか分かっているだろ!』

『ちっ……はいよ……』

シグナムに気だるそうに返し、ジョーカーは改めてゼロを睨む。

『おいゼロ! 今日の所は一旦引いてやる、けどな! 次邪魔をしたら、ぜってー殺すからな!』

『面白え、受けて立とうじゃねえか!』

そう捨て台詞を残し、ジョーカーはその場から消えた。ゼロもレンの姿に戻り、慌ててユウキに駆け寄った。

「ただいま」

翔とヴォルケンリッター達が家に帰ったが、いつもの様にはやてからの返事が無かった。

不思議に思った五人がはやての部屋に入ると、はやては胸を押さえて苦しそくに呻いていた。

「「はやて!!」」

「はやてちゃん!」

慌てて全員が駆け寄り、はやての名前を呼ぶ。だが、はやてはそれに返事をする事もできず、ただただ呻いていた……。

同じ頃、自室で寝静まっているフェイトに、一つの影が近づいてきた。

その影はフェイトの傍で止まり、少し口を動かしてフェイトに手を伸ばした。

その腕から放たれた光で、一瞬だけ影の正体が見えた。

その影の正体は、彼女が最も信頼している人物、ヒビノ・ユウキだった……。

A、S 編第6話 最高の相棒（後書き）

次回、ウルトラマンブレイブ！

ユウキ

「僕はウルトラマンだから！」

フェイト

「ふざけないでよ！ 全部忘れるって言っの！？ ユウキの事、ユウキがこの世に居たって事も、皆忘れてしまえって言っの！？」

ユウキ

「でも……僕は……」

フェイト

「私は……ユウキの事が——っ！」

ユウキ

「それが……」

フェイト

「うん、それが……」

「「仲間なんだ……」」

次回、【フェイトの想い】

お楽しみに！

A、S編第7話 フェイトの想い（前書き）

今日のエースな一言

孤門

「絆…ネクサス!!」

## A、S 編第7話 フェイトの想い

僕が降り立った、掛け替えの無い星、地球……。

そこで出遭った、掛け替えの無い仲間達。

フェイト、なのはちゃん、ユーノ君、はやてちゃん、アルフさん、クロノ君、リンディさん、エイミィさん……。皆、僕の大切な仲間なんだ。ずっと憧れていた、ゼロ兄も含めて。

—— だから

だからこそ——

僕は、君とは居られないんだ——！

さようなら—— フェイト

ウルトラマンブレイブ〜魔道師との遭遇〜

A、S 編第7話 フェイトの想い

その夜、レンはなのはと静かに話をしていた。

ジョーカーの言った、「時間が無い」という言葉が気になっていたからだ。

「やっぱり、情報が少なすぎるな……」

「うん。ヴィータちゃん達とも、ちゃんとお話できると思ったのに……」

しなだれるなのはの頭を見ながら、レンは顎に手を当て、こづきり出した。

「なあなのは、アースラに行って、色々調べてみねえか？ ユーノも居るが、やっぱり自分達の目で見ただろうが早いと思う」

「そう……だね！」

なのはも了承し、明日の朝アースラに向かう事となった。  
なぜだか分からないが、莫大な不安を胸に抱きつつ……。

## 海鳴病院

シグナム、シャマル、翔の3人は、はやての担当医である石田先生に言われた言葉を思い返していた。

——脚の麻痺が徐々に上にも進行していて、このままでは命の危険もあるわね……。

ずっと苦しくて、辛かった筈だ。なのに彼女は、自分達の前ではいつも笑顔を絶やさなかった。

翔は、長い事一緒に居たのに気付いてやれなかったという事に苛立ち、同時に焦りが大きくなっていった。

はやては、たとえベッドの上であっても自分達の前では笑顔を見せ続けた。

自分がずっと傍に居て、その苦しみを和らげてやればどれだけ良いものか……。

だが、彼にはそれができなかった。

一度はやてに拒絶された、その記憶が彼のトラウマとなり、いつからかはやてと二人きりで話す事を避ける様になっていた。

「ごめん……はやて……」

そう呟き、蒐集に向かった。

闇の書の項は、まだ埋まりきってはいないのだ。

「あぐっ……うう……」

翔達が居なくなってから、はやては一人ベッドの上で苦しんでいた。全身から脂汗が湧き、布団をはだけて苦痛に悶える。

そんな病院のベッドに二つの影が伸びた。

それは確実に、人間のそれではなかった……。

ゆつくりと、ユウキはフェイトに手を伸ばす。

右腕に出現した赤いナイトブレスが発光し、記憶を消す為の準備に入った。だが、その光でフェイトは目を覚まし、迫り来るユウキの腕を咄嗟に掴んだ。

「ユ、ユウキ！？ なにしてるの！？」

「っ！ ……ごめん！」

驚きに目を見開くフェイトを見て、一瞬目を逸らしたユウキだったが、すぐに歯を食いしばってフェイトをそのままベッドに押し倒す。

「ふえっ！？」

訳が分からずテンパるフェイトだが、ユウキがいつもと違うのだけは分かり、すぐに抵抗する。

ユウキも抵抗するフェイトを抑えつけながら手を近づけるが、やは

り自分の気持ちが悪魔をして上手く力を入れられない。

「ユウキっ……なんなの……いきなり!？」

「……ごめん……っ!」

フェイトの質問に対しても、ユウキは誤魔化す様に呟くばかり。  
しばらく組み合いが続くが、ついにバルディッシュを起動させたフェイトが、柄でユウキの腹を殴りつけた事でそれは終了した。  
互いに荒い呼吸を繰り返し、それを正常に戻そうとして沈黙が流れる。

やがて、息を整えたフェイトが口を開く。

「答えてユウキ……なんでいきなりあんな事を？」

「……僕の事……忘れてもらう為……」

「っ!？」

突然言われたその言葉に、フェイトは驚きを隠せない。

「いや……どうして……?」

「前に言わなかったっけ？ 僕の生まれの事……」

「うん、聞いたけど……?」

「なら話が早いよ。僕の肉体は、もうじき消滅する。無理な構築のせいでね」

「そんな……」

薄く微笑みながら淡々と話すユウキに対し、フェイトは目尻に涙を浮かべていた。

それを気にする事も無く、ユウキは言葉を続ける。

「皮肉なもんだよね、憧れの人を模して構築した肉体なのに、その構築のせいで僕そのものが消滅の危機にある……」

「じゃあ何で、何で記憶を！」

「僕はウルトラマンだから！」

フェイトが強めに聞くと、ユウキもいつもと違って声を荒げる。

ハッとなってフェイトがユウキを見ると、その目からは大粒の涙が零れ落ちていた。

「僕はっ……誰にも、悲しんで欲しくないから……ぐずっ……だから！」

「その為に、全部忘れろって言うの……？ ユウキが消えちゃうかもしれないから、私達が悲しまない様に？」

「そうだよ！ だから「ふざけないでよ！」っ！？」

ユウキがフェイトの方を向いたとき、フェイトがユウキの頬を叩いた。

ユウキは頬を抑え、ただフェイトを見つめる。いや、フェイトの怒りと悲しみに満ちた表情に、見惚れていた。

「ふざけないでよ……全部忘れろって言うの？ ユウキの事、ユウキがこの世に居たってことも、みんな忘れてしまえって言うの！？ 冗談じゃないよ！ 一緒にいた時間がどれだけ大事か、どうしてそれが分からないの！？」

「フェイト……」

言い終わったフェイトは、肩で荒い呼吸を繰り返す。ユウキは、黙ってそれを見ながら、言葉の意味を考えていた。

そして、結論に行き着いた。

「あっ……」

「私は、大事な人を失った。これでユウキが消えちゃって、それを忘れたとしても、そんなの……ちっとも幸せじゃない。私達を悲し

ませたくないなら、生きて。人間だろうとウルトラマンだろうと関係ない、生まれなんてもっと関係ない！ 一つの命、ヒビノ・ユウキとして……」

「一つの、命……」

—— どうして気付かなかったんだろう

僕は、もう一人じゃないのに……。

この胸に、誓いの炎を灯したのに……、どうして忘れてたんだろう……？

それが、当たり前だったからなのかな？ 傍に居てくれるのが、当たり前になつてたから。

彼女を支えてるつもりが、支えてもらってたのは僕の方だったんだ……。

「……ごめんフェイト。目が覚めた」

「ユウキ……」

ようやく笑顔に向けたユウキに、フェイトも笑顔になる。

ユウキはわしゃわしゃと頭を撫で、フェイトの右手に自分の右手を重ねる。

すると先程までユウキの右腕にあったナイトブレスが、フェイトの右腕に移っていた。

「えっ!？」

「僕がもうこんな事しないっていう、誓いの証」

そして互いにしばらく見つめあった後、ユウキは退室しようと腰を上げた。

が、何かに襟首を引っ張られてベッドに倒れてしまう。  
そのすぐ横に、フェイトの顔が広がる。

「フェイト!？」

「……私が寝たのを見計らって、また来るかもしれないから……」

「だ、だからもうしないってばあー!」

そんな二人の微笑ましいやり取りを、ドアの隙間から3つの影が覗いていた。

当然の事ながら、アルフ、リンディ、エイミィだ。

「皆してなにやってんだか……」

クロノの冷静なツツコミは、他5名のはしゃぐ声にかき消されていた……。



A、S 編第7話 フェイトの想い（後書き）

次回、ウルトラマンブレイブ！

エイミィ

「情報汚染発生！ 何者かがメインプログラムに侵入しました！」

クロノ

「このままじゃ、アースラは墜ちる……」

ユウキ

「円盤生物！？」

レン

「シルバー……ブルームだと！？」

ユウキ

「自分自身を数値化して戦うしかない……」

レン

「ユウキ、後は頼んだぜ……」

なのは

「レンさああああああああん……」

次回、【銀色の円盤生物】

お楽しみに！

A、S 編第8話 兄弟の絆（前書き）

今日のエースな一言

メビウス

「最後まで諦めず、不可能を可能にする。それが、ウルトラマンだ  
！」

サブタイトル変更しました。

## A、S 編第8話 兄弟の絆

レンの考えにより、情報を集める為アースラに搭乗したユウキ、フ  
エイト、レン、なのは。

既に搭乗しているユーノ、クロノ、エイミイ等と共に、闇の書に  
関する情報の検索が進められていた。

が、どんなに時間をかけて探しても、闇の書の情報は出てこな  
かった。

それもその筈。アースラのメインプログラムに、何者かが侵入  
していたのだから……。

そしてアースラの前方に、無数の円盤が出現した。

「アレは！」

「円盤生物！？」

レンとユウキはそれに真つ先に気付き、アースラを停止させる。  
前方の出口に円盤生物が無数に居る為、先に進む事ができない。

「艦長、どうします？」

「なあに！ 俺達が行って全部残らず打ち落としてやるぜ！ なあ  
ユウキ！」

エイミイの焦りが混ざった声に、レンは鼻を親指で弾いて勇ましく答える。

ユウキも頷いたその瞬間、アースラが大きく揺れ、ブリッジの照明が全て消える。

「何が起こったの!？」

「分かりません! 急に……っ!」

リンディが他の局員に状況を聞くが、結果は分からなかった。だが、エイミイがある画面を見てパネルを叩くのを止めた。

「これって……!？」

「どうした? エイミイ……」

動揺にも似た声を漏らすエイミイに、クロノが聞く。

エイミイが指差した画面を見ると、そこには球体から幾つか穴が伸びた様な不思議な生物で埋め尽くされていた。

「なんだコレは!？」

「どうしたの……っ! こいつは、四次元怪獣ブルトン!」

「ブルトンだと!？」

クロノの肩越しに画面を見たユウキが、驚きに目を見開きながら叫ぶ。怪獣の名前に反応し、レンも確かめるように叫ぶ。  
すると再びアースラが揺れ、ブリッジの窓に赤黒い口の様な物が広がる。

「レンさん! アレは……!？」

「あの口……もしかして……!」

なのはがレンの袖を引っ張り、外の口を指差しながら尋ねる。  
レンがそれを睨むのと同時に、ユウキもポツリと呟く。そして二人の頭に、同じ答えが過ぎる。それは最も確信があり、最も危険な答えだった。

「円盤生物、シルバー……ブルーム……」

レンがゆっくりと口を開き、怪獣の名前を漏らす。  
レンとユウキはその名前が意味する恐ろしさを分かっているが、残りの人物は名前を聞いても首を傾げるばかりだった。

「かつて平行世界の防衛チームを全滅させた、史上最悪の円盤生物だ……」

全員に緊張を与える意味で、ユウキがレオから教えてもらった情報を皆に伝える。

が、それは逆に全員を不安に震わせるだけだった。

しばらくの間、アースラに思い沈黙が流れる。だがそれは、三度アースラが揺れる事で阻まれた。

「今は考えてる暇は無いか……ユウキ、俺が外の連中を叩く！お前はブルトンを！」

「そんな、あの数相手じゃ！」

ユウキにブルトンの方を任せるレンをユウキは全力で止める。

幾らかつての戦いで100体近くいた怪獣達を撃破したとは言え、あのときは怨念等ではなく強引に目覚めさせられたので、怪獣達は本領を発揮できなかった。

だが今回は違う。円盤生物達は、ブラックスター、あるいは別の何者かの命令でここに居る。その証拠に、各々先程の位置から動こうとはしていない。その中に単身挑むなど、死に行く様なものがあった。

「大丈夫。心配すんな！」

「でも、もしもの事があつたら！」

「俺を見縊るな！」

何とかユウキを落ち着かせようとするレンに、ユウキも食って掛かる。だがレンはそんなユウキの首を腕で抑え付け、壁に押し付ける。

「お前と違って、俺は弱くないんだよ」

「っ！」

「レン！」

ユウキを睨みながら、レンはユウキを侮辱した。その言葉にユウキはただ驚き、代わりにフェイトがレンを突き飛ばした。

しばらくの間、レンとフェイトの睨み合いが続く。その中心で心配そうなのはが見守る中、レンはゆつくりとウルトラゼロアイを右手に握り締める。

「さてと、強い俺はあいつらを落とすか。弱いお前はブルトンの相手でもしてろ」

「……分かった」

レンはユウキ達に背を向け、鼻で笑うようにそう言った。対するユウキはゆつくりと歩き、レンの背中に自分の背中を合わせる様に立

った。

それを感じたレンは、フツと薄く笑う。

「ユウキ、後は頼んだぜ……」

「レン兄いこそ、自分が死んだらどれだけ大勢の人が悲しむか分か  
つてる？」

「へっ、さあな」

「……前に言つたよね。命を懸けて戦うのは、笑顔でまた、仲間達  
に会う為だって」

「……だつたな」

ユウキも左腕にブレイブブレスを出現させ、中心の赤いサークルに  
右手を添える。

レンも力強くウルトラゼロアイを眼前に突き出す。

「……死ぬなよ、ユウキ」

「そっちこそね」

ユウキは勢い良くサークルを回し、左腕を突き上げる。  
レンも、勢い良くウルトラゼロアイを目に当てる。

「「変身っ!!」」

二人が同時に叫び、辺りを眩しいほどの光が包み込む。

光が止むと、二人の青年は神々しい光を放ちながら全く別の姿に変わり、ユウキだった戦士はモニターの中に、レンだった戦士はアースラの外へと飛び出して行った。

「レンさん……」

「ユウキ……」

なのはとフェイトは、祈る様にして目を瞑り、そう呟いた。

電子空間内

ブレイブは、ブルトンの前に降り立った。

岩の様な物に囲まれ、光の届かない不思議な空間。エネルギーの元が光であるウルトラ戦士、中でも光そのものから生まれた彼にとつては、不利すぎるフィールドだった。

だがブレイブは恐れる事も無く、先手必勝とばかりにブレイブシュートを放つ。

が、それはブルトンに届く事無く消滅した。

『なに!?!』

ブレイブが驚いていると、ブルトンの横に耳の大きな灰色の宇宙人が姿を現した。

『くつくつく、驚いたかねウルトラマンブレイブ?』

『お前は、イカルス星人!』

『イカルス星人』かつてウルトラセブンと激闘を繰り広げた宇宙人の一人だ。

『どうしてお前がここに!』

『私も空間移動は得意なのだよ』

そう言った瞬間、イカルス星人の姿が消える。  
ブレイブが探して辺りを見回すと、背後から声がした。

『極短い距離だがね』

『なっ！？』

ブレイブが声のした方へ振り向くが、イカルス星人は耳から棘の様な光線を放ち、ブレイブはそれを食らって吹き飛ばされる。

『うあああああ！！』

イカルス星人が指を鳴らすと、空間が歪み、その穴から無数の怪獣達が出現する。

『デインゾール』や『ケルビム』、『ゴモラ』、『レッドキング』、『パンドン』に『ベムスター』まで居る。

そしてここはあくまで電子空間な為、バードンを出すことができない。他の怪獣達は、ブルトンがあらかじめこの空間にしこんでおい  
たらしい。

『どれ、私はアースラの中に行くかな……』

「待てっ……！ まさか、最初からそれが狙いで！？」

当然

そう言った後、イカルス星人はその場から消えた。

追いかけて様としたブレイブだったが、ケルビムとパンドンの火球に阻まれてしまう。

ブレイブスラッガー3本を脳波コントロールで動かし、自身は肉弾戦及びブレイブブレードで怪獣達と応戦した。

# ウルトラマンブレイブ 魔道師との遭遇

A、S編第8話 兄弟の絆

デ  
エ  
エ  
エ  
エ  
エ  
エ  
エ  
エ  
エ  
エ  
リ  
ヤ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア

!!

ゼロは渾身の力を込めたワイドゼロショットを放ち、シルバーブルーメをアースラから離す。

そのまま畳み掛ける様にゼロツインソード、そしてエメリウムスラッシュでシルバーブルーメの触手を切り落とす。

『ハッ！ デアッ！』

順調にシルバーブルーメの体を切り裂いていると、何処からか突然降ってきたチェーンがゼロの左腕に絡みつく。  
そのチェーンの先には、銀色のフックの様な物が付いていた。

『これは、アストラの脚に付いてた……まさか！』

チェーンを辿って見ると、黒い体にマスクをしたような顔、『サール暴君マグマ星人』がアースラの上に立っていた。

『へっへ、まんまと罠に引っ掛かりやがったなあ』

『罠だと……！？』

『俺達は罠なんだよ！ お前とブレイブを分散する為のな！』

『なに！？ それじゃあ……ッ！』

ゼロは咄嗟にアースラを見る。そのまま透視能力でブリッジの様子を透かすと、心配そうにソワソワしているのはとフェイトが映った。

少し安心したゼロだが、すぐにマグマ星人を睨みつける。

『てめえ……！』

『おお怖い怖い。でもこの数だ、諦めた方が良くないじゃねえの？』

ドスの効いたゼロの声に臆する事も無く、マグマ星人は鼻で笑う。

『……最後まで諦めず、不可能を可能にする。それが……ウルトラマンだ！』

ゼロのオレンジ色した両眼が、その光を増した。

『ああそうかい。じゃあそのまま食われちまいな!』

マグマ星人が指示を出すのと同時に、シルバーブルームが巨大な口を空けてゼロに迫った。

アースラ内

「レンさああああああああああん!!」

なのはがその光景を見ながら悲鳴を上げる。  
他の者も、それに見入っていた。だが、その背後からゆっくりと、  
イカルス星人が近づいていた。

「っ! 危ない!」

いち早くユーノがそれに気付き、イカルス星人の放った光線から魔力バリアで全員を守る。

その緑色の円形バリアと、青白い無数の棘がぶつかり合い、激しく火花を散らす。

「くっ……」

「ユーノ君！」

「このっ！」

苦痛に声を漏らすユーノを、なのはが心配そうに見つめ、咄嗟にカード状態から槍型に自身のデバイス、デュランダルを起動させたクロノが、高速で光の弾丸、ステインガーレイを放つ。

それに気付いたイカルス星人はすぐに下がり、ステインガーレイを避ける。

『ほう、中々の腕だな』

余裕を見せるイカルス星人。

刹那、その全身から無数の棘が放たれる。

ユーノが再びバリアを展開し、それを防ぐ。だがサイズを大きくした性か、バリアそのものの強度が落ちている様で、徐々に輝が広がっていく。

「アクセルシューター！」

【Accel Shooter】

「ステインガースナイプ！」

なのはとクロノが放った光弾と、イカルス星人の放った光線とが相殺し、辺りを深い煙が包み込む。

その中からバルディッシュ・サイズフォームを起動させたフェイトが突撃し、その首目掛けて横に薙ぎ払う。

だがその瞬間、イカルス星人の姿が消える。

「消えた！？」

【Your back, sir!——後ろです、サー！】

「後ろ！？」

バルディッシュの声で、後ろに振り向くフェイト。だが、その眼前にすでにイカルス星人が迫っていた。

フェイトが恐怖に目を瞑った瞬間、辺りを銀色の光が包み込む。

『ヴォアッ！』

その雄たけびと共に、イカルス星人が丸いノコギリの様な物で両断される。

フェイトが恐る恐る目を開けると、そこには銀を中心に赤いライン

が入り、頭のトサカに丸い穴がある戦士、『ウルトラマンエース』  
が立っていた。

なのはエースと目が合った途端、何かを感じ取った様だが、思い  
出したかのように窓の外を見る。

「レンさん！」

迫り来るシルバーブルーメの巨大な口に、ゼロは死を覚悟した。  
殺られると思ったその瞬間、どこかからか声がした。

『最後まで諦めるな！』

『そうだゼロ。お前は、俺の息子だ！』

『この声……ッ！』

ゼロが顔を上げると、真っ赤な体にマントを付けた、鋭い眼光の戦士が二人立っていた。

その内の一人が頭部から刃を投げると、マグマ星人を弾き飛ばし、ゼロはチェーンの拘束から開放される。そのままもう一人の戦士とゼロが手の平を合わせ、緑と赤の混ざった光線を放ち、シルバールームを撃破した。

改めてゼロはその二人の戦士に向き直る。

『親父！ レオ！』

ゼロの父親、『ウルトラセブン』と、ゼロの師匠、『ウルトラマンレオ』だった。

するとアースラから光が飛び出し、先程の銀色の戦士の姿に変わる。

『エース！』

4人のウルトラマンは互いに頷き合うと、目の前の円盤生物軍団に向き直った。

さらに空間が裂け、ファイヤーモンスやオイルドリッカーといった超獣達が出現した。

『さっつてと、どうすっかな……』

アースラ内

「レンさん、良かったあゝ……」

なのはがほっとしてその場に尻餅を搦く。

だがこのままではラチが空かないと判断したクロノは、艦長であるリンディにこう言った。

「艦長、やはりここはアルカンシエルを使うしか……」

「そのためには、このメインプログラムが復旧しないといけないのよ……」

アルカンシエルとは、次元そのものを消滅させるほどの威力を秘めたアースラ最大の主砲である。

だがそれを撃つには、メインプログラムが元に戻らなければいけなかった。

この状況を打破する為には、ユウキに全てが懸かっていた。

「ユウキ……」

フェイトはモニターを見ながら、そう静かに呟いた。

『はぁ……はぁ……』

ブレイブのカラータイマーは既に点滅し、本人も息が上がっていた。ディノゾール、ケルビム、ゴモラの三体を倒したはいいが、残りのレッドキング、ベムスター、パンドンを相手に苦戦していた。

いずれもウルトラマンを苦しめた強敵ばかりで、ブレイブのエネルギーは残り少ない。

ベムスタービームを食らい、ブレイブは再び吹き飛ばされて地面を転がる。

『僕一人じゃ、ダメなのか……？』

ブレイブの頭に、そんな絶望が過ぎる。だがブレイブ、いやヒビノ・ユウキは、その考えを振り捨てて立ち上がった。

『いや……そうだね……。僕はもう、一人じゃないんだ！』

『うん、良く言ったよブレイブ！』

ブレイブの決意に応えるかのように、どこかから声がした。その声はブレイブにとっては馴染み深く、また最も安心のできる声だった。

見上げると、無限大を意味するメビウスの輪を模した炎が浮かび上がり、一瞬にしてレッドキングを撃破した。

その中心にあった光はやがて巨人の形となり、ブレイブの目の前に立った。

その姿を確認し、ブレイブは嬉しそうに叫んだ。

『メビウス教官！』

光が止むと、そこにはブレイブに似た頭部、赤を中心に金のラインで炎が描かれた戦士、『ウルトラマンメビウス・バーニングブレイブ』が立っていた。

メビウスはブレイブを見て頷き、ブレイブも意図を察したかのように頷き、全身に力を込める。

『ハアアアアアア……』

ブレイブの全身が赤く発火し、胸のプロテクターやブレイブスラッガーの側面に炎が描かれる。

『ウルトラマンブレイブ・バーニングブレイブ』へとヴァージョンアップし、メビウスと同じ様に構えた。

『行くぞ、ブレイブ！』

『はい、父さん！』

メビウスとブレイブは同時に怪獣達に向かっていき、息の合ったコンビネーションで怪獣達を殴りつける。

そして同時に飛び上がり、体を高速で回転させ、炎を纏ってベムスターを脚で貫く。

『メビウスピンク』と、『ブレイブピンク』が炸裂した。

休む暇も無く互いのブレスのサークルを回転させ、両手を発火させて腕を十字に組む。

『メビウムシュート』と『ブレイブシュート』が合体し、パンドンを撃破した。

必殺技を連打したにも関わらず二人は疲れを見せず、むしろ徐々に勢いが増している。

さすがに焦りを感じたのか、ブルトンは穴からアンテナを伸ばし、空間から消えようとする。

『逃がすか!』

『やるぞ、ブレイブ!』

二人が再び全身に力を込める。すると二人の全身が炎に包まれ、そのままブルトンを二人の両腕で抑えつける。

『ハアアアアアア……ゼアアアアアアアア!』

『メビウムダイナマイト』と、『ブレイブダイナマイト』の合体技、『ダブルダイナマイト』が炸裂し、ブルトンは四散した。メビウスとブレイブは互いに向き合い、光となってその空間から離脱した。

アースラ内

ブレイブはユウキの姿に戻り、メビウスと共にモニターの前に立った。

「ユウキ！」

フェイトがすぐにユウキに抱きつく。ユウキはそれを安心させるため、優しく頭を撫でた。他の皆も、ユウキを見てどこか安心した様子だ。

それを見て、メビウスはユウキに言った。

『君も、良い仲間を持ったね』

「はい！」

『一期一会、出会いは一度きりだ。その一度しかない出会いを大切にね。立派な魔道師と、遭遇したって思い出を、永遠に……』

「もちろんです！」

メビウスの言葉に、ユウキは満面の笑みを見せる。  
そしてメビウスはアースラの外に飛び出し、他のウルトラマン達と合流した。

「艦長！」

クロノが叫ぶのと同時に、リンディは透明な四角い箱に刺した鍵を横に傾ける。

「アルカンシエル、発射！」

アースラの先端から極太の光線が発射され、出口を塞いでいた円盤生物達を消滅させた。

『今だ！　ゼロ、君はブレイブ達と！』

『でも、お前らは！？』

『我々を誰だと思っている！』

メビウスがゼロを戦闘から離脱させ、エースが安心させる様にそう叫んだ。  
ゼロは悩んだ結果、力強く頷き、アースラの中に光となって入っていった。  
アースラが出口から出たのを確認し、メビウス達は超獣との戦いに集中した。

彼等が事件を終わらせてくれると信じて……。

A、S 編第8話 兄弟の絆（後書き）

次回、ウルトラマンブレイブ！

ジョーカー

『俺は、光の国へは戻らない！』

ジャック

『そうか……なら力づくで連れ戻す！』

はやて

「おじさんは翔兄いと同じ匂いがしますなあ」

ハヤタ

「そうかい？」

ジョーカー

『うおおおおおおおお！！』

次回、【家族の心】  
お楽しみに！

A、S 編第9話 家族の心（前書き）

今日のエースな一言

- 一つ、ハラペコのまま学校へ行かぬ事
- 一つ、天気の良い日に布団を干す事
- 一つ、道を歩くときには車に気をつける事
- 一つ、他人の力を頼りにしない事
- 一つ、土の上を裸足で走り回って遊ぶ事

b y ウルトラマンジャック（帰ってきたウルトラマン）

A、S 編第9話 家族の心

家族

本来なら、誰もが安らげる相手だろう。

俺にももちろん家族はいる。

故郷と、今の居場所と両方に。

でも、どちらにも嘘を付いている。

故郷の方には、俺はその宇宙で元気にやっていると。

今の居場所には、本当の家族であると。

いつかはれるのは分かってる。

でも……それでも……、

俺は、偽り続ける。

だって俺は……ジョーカー……道化師なんだから……！

ウルトラマンブレイブ―魔道師との遭遇―

A、S 編第9話 家族の心

はやての見舞いを終えた翔は、買出しの当番だった為スーパーに立ち寄った。

残り4人は料理が不得意な上、蒐集で疲れているので、せめて料理は自分がやろうと決意したのだ。最も、彼自身も料理は不得意なのだ。

買い物籠をぶら下げ、適当に品物を眺める。

「うーん、何を作ろうかな……？」

「それなら、おはぎなんかどうだ？」

顎に手を当てながら呟いた翔に反応し、誰かが後ろから声をかけてきた。

その瞬間、声に聞き覚えのあった翔はすぐに後ろを向いた。  
その先には、大柄な初老のサングラスをかけた男性が立っていた。  
それを見るな否や、翔の目が見開かれる。

「父……さん……？」

そこに立っていたのは、『八神翔』こと『ウルトラマンジョーカー』  
の父親、『郷秀樹』こと『ウルトラマンジャック』だった。

その夜、はやてに新たな見舞い客がやって来た。  
消灯時間が過ぎているにも関わらずやって来たその男性に、はやて  
は違和感を感じず、むしろ温もりを感じていた。

「おじさんは？」

「ハヤタ・シン。君のお兄さんの知り合いさ」

ハヤタと名乗った初老の男性は、近くの椅子に腰をかけてはやての左手を握った。

一瞬だけ表情が鋭く変わるが、すぐに先程の穏やかな表情に変える。その手を握り返したはやては、ゆっくりと手を自分の頬まで持ってきた。

「あはは、おじさんは翔兄いと同じ匂いがしますなあ」

「？ そつかい？」

「はい……やっぱり翔兄いは、私の本当のお兄ちゃんや無いんですね……」

「っ！？」

切なそうにベッドを見つめながらそう言い出すはやて。ハヤタはそれに驚きを隠せず、眉がピクリと動く。

「本当は、ずっと前から知ってたんです。せやけど私が……それを受け入れたくなくて……私の我侭のせいで、翔兄いはまだ自分が嘘を付き続けると思ってる。そのせいで、私と二人きりになっくれな……」

はやての目から、ボロボロと大粒の涙がこぼれる。ハヤタは少しそれを見た後、ゆっくりとはやてを抱きしめた。その状態で、はやては泣きながら喋り続けた。

「私っ、ホンマは翔兄いと一緒に居たい。二人きりになりたい！……せやけど……翔兄いは一緒に居てくれない。私の我儘のせい……。シグナムもシャマルもザフィーラもヴィータも、皆大事な家族や。でも……私にはやっぱり翔兄いが必要なんよ……」

やがて、涙と鼻水で話すことすらできなくなってしまうはやて。その背中を優しく叩きながら、ハヤタは夜空を見上げていた。その端に映るビルの屋上で、壮大な親子喧嘩が始まるうとしているのを感じながら……。

スーパ―の買い物袋を横に下ろした翔は、父親である郷と対峙していた。

肌寒い夜、その親子はそれすらも吹き飛ばすが如く激しくにらみ合っていた。やがて、郷が翔に向かって口を開く。

「ジョーカー！ 光の国へ帰る気は無いのか？ 今のお前なら、ウルトラ兄弟への加入もたやすいだろう」

「ここでは翔だっつつてんだろ！ それに俺は光の国へ戻る気なんて無い！ この地球に残り続ける！ その為なら、ウルトラマンの名を捨てる！」

光の国へ帰る様説得する郷だが、翔はそれを断固として拒み続ける。そして再び、ウルトラマンの名を捨てるという決意を露にする。郷はその言葉に一度目を瞑り、力強く見開いて右手を天高く掲げる。それを合図に、翔も右手を高く掲げる。

郷の右手が、翔のブレスレットが光を放ち、二人の姿を変える。人間達とほぼ同じ大きさになった『ウルトラマンジャック』と、『ウルトラマンジョーカー』が対峙していた。

はやてが泣き疲れて眠ったのを確認し、ハヤタはゆっくりと部屋を出た。あの親子の下へ向かう為だ。

だが、ハヤタは気付かなかった。いや、ハヤタでも気付かなかったとでも言っべきか。

はやてに近付く影が、白いカーテンに映っていた。

それがカーテンを裂き、はやてに手を伸ばした……。

『デエエエエリヤアアアアア！！』

勢い良くジャックに突進するジョーカー。そのまま拳を前に振りぬく。だが、ジャックはそれを片手で受け止め、腕を引いて胴体に膝蹴りを叩き込む。

『がはっ………』

『シエアッ！』

至近距離で『シネラマショット』をジョーカーに決め、轟音と共にジョーカーが吹き飛ばされる。

ふら付きながらも耐え切ったジョーカーは、右手首に付けたブレスレットを槍状にしてジャックに向かって投げる。

ジャックはそれを盾状にしたブレスレットで受け止め、ジョーカーに向かって投げる。

ジョーカーはそれを受け止め、右腕に戻す。

『そのブレスレットは元々俺の与えた物だ。それで俺に勝とうなんか2万年早い！』

『へっ、だったな……あんまりにもどうでも良過ぎて忘れてたぜ！』

『……本当に、光の国に戻る気はないんだな？』

『当たり前だ！ この星で、俺を待っている奴が居るんだ！ 例え拒絶されてても、傍に居れなくても、俺はあいつを守り続ける。どんな闇からも、どんな脅威からも！』

乳白色の瞳をより一層強く輝かせ、ジョーカーはジャックに殴りかかる。ジャックはあえてその拳を顔面で受け、同じ様にジョーカーの左頬を殴り飛ばす。

殴られた箇所を手の甲で拭いたジョーカーは、再びジャックを殴り付ける。ジャックも殴られた箇所を拭い、再びジョーカーが殴り付けてきた所と同じ箇所を殴り付ける。

そんな殴り合いが続き、互いのカラータイマーが点滅する。

『うううううおおおおおおおおお！！』

ジョーカーがジャックを殴る。そのときのジョーカーに、翔の姿が重なる。

殴り返すジャックには郷の姿が重なる。

そして翔と郷の殴り合いになり、互いに互いの頬を殴ってその場に仰向けになって倒れ込む。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸を繰り返し、顔中から血を流している翔。その傍に、ゆっくりと同じく血だらけになった郷が近付く。

動く事すらできない翔に拳を振り上げ、そして……

腕を掴んで強引に立たせた。

翔は意味が分からず、ただただ驚いていた。

「……お前の意思、見せてもらった」

「えっ!？」

「お前が決めた事なら、最後までやり遂げる。その子が死ぬまで、お前が傍に居てやれ。俺の受けた、悲しい仕打ちだけは……お前に味わって欲しくない」

「父さん……」

「どこへでも行け！　そして新しい家族を、いつか光の国に見せに来て」

そう言つて郷はジャックの姿に戻り、翔に背を向けて飛び去つていった。  
それを追う様に、ジャックの二重ラインの無い戦士、『ウルトラマン』が飛び立つ。翔はその二人の背中をじっと見つめ、深く頭を下げた。

「ありがとう、父さん……」

下を向いたその顔から、数滴の涙が零れ、夜の光に照らされた。

## 宇宙空間

地球から、黒い体の宇宙人が逃げ様としていた。

「まったく、あんなにウルトラ戦士が居るなんて聞いてないぜ……」

サーベル暴君マグマ星人である。セブン達から逃げ出し、一人地球を離れ様としていた。

そして前を向いた途端、マグマ星人の眼前に銀色の腕が突き出された。

その瞬間、マグマ星人の表情が変わる。

「お、お前は！」

「……消え失せろ」

その腕から放たれた、87万度の光線が、マグマ星人を焼き尽くした。

その爆風に赤いマントを靡かせながら、一人の戦士が地球を見つめていた。

宇宙警備隊大隊長『ゾフィー』がついに合流した。

A、S 編第9話 家族の心（後書き）

ほんのり生き抜き

> i 2 9 1 0 9 — 2 7 7 1 <

ユウキのイラストです。小さいですけどwww

次回、ウルトラマンブレイブ！

ユウキ

『あははははっ、いいね、綺麗だね！』

レン

『まだ分かんねえのか？ アレはお前の兄じゃない。化け物なんだよ！』

翔

「てめえら……！」

はやて

「うあああああああああ！！」

ユウキ

「ヒキラー、ザウルス……！？」

ヤプール

『フハハハハッ！ 我等の復活だあー！！！』

次回、【絶望の暗雲】

お楽しみに！

いよいよクライマックス！

A、S 編第10話 最終三部作？ 絶望の暗雲（前書き）

タイトルの通り、この話も入れて後3話で完結いたします。  
ぜひ、最後までお付き合い下さい。

A、S編第10話 最終三部作？ 絶望の暗雲

無事地球へと戻ってきたアースラ。

ユウキ達は、翔やヴォルケンリッター達を探してひたすら走っていた。メビウスと分かれる直前、ユウキに向かってメビウスはこう言った。

『そろそろ地球で、来たるべき戦いが起こる。それは今の君達だけだ勝つ事は難しいだろう。僕達も応援に行けるか分からない。だからこそ、もうジョーカー達といがみ合ってる暇なんて無い。みんな協力して戦うんだ。いいね？』

今の自分達だけでは勝つ事ができない……。それに一瞬肌が泡立つのを感じたユウキは、自らを奮い立たせて走り出す。元々互いに望まぬ争いなのだから、このまま事情を話せば分かり合える筈だ。そう信じて、彼は走り続けた。

ウルトラマンブレイブ 魔道師との遭遇

クリスマス・イヴのその夜。

はやては突然ベッドから姿を消し、病院の屋上へ召還された。その足元には、白いベルカの魔法陣が描かれている。

「な、なんやコレ……？」

はやての周囲上空に、銀の十字架に貼り付けにされたヴォルケンリッター達が浮いている。それぞれの十字架の上には、古代ベルカの文字でそれぞれの名前が書かれている。まるで、墓の様に……。

ヴォルケンリッター達は意識が無いのか、頭をだらりと下げている。

「シグナム……？ シャマル……？ ザファイラ、ヴィータ……？」

はやては怯えながら全員の名前を呼ぶが、誰からも反応は返って来なかった。するとその十字架らの中央に、二人の青少年が現れる。

「ユウキさん……？ と、もう一人は……？」

茶色い癖のある髪少年と、黒髪に鋭い目つきの青年。この二人が、まるで嘲笑つかのようにはやてを見下している。

『あはははっ、公開処刑場にようこそ。闇の書の主、八神はやてちゃん！』

「ユウキさん……？ ユウキさんが、皆にこないな事を？」

『見りや分かるでしょ？ 僕とレン兄いがやったのさ！』

はやてを見下しながら、冷たい笑い声を上げるユウキ。かつて話した彼とは全く雰囲気が違う事に、はやては驚いた。あのときは、凄く親切な少年だったのに……。

その少年の笑顔の裏には、こんな残酷な一面が隠れていたのか。そう思ったはやては、悔しそうに奥歯を噛み締める。

「お願いや！ 皆を、皆を放して！」

『い・や・だ。これから楽しい処刑祭りなんだよ？ いや、元々こいつらに命なんて概念は無いんだっけ？ 本人達は闇の書の処刑プログラムで、命を幾つも奪ってきたんだもんね』

[illegible]

はやての願いを込めた叫びも空しく、ユウキが指を鳴らす。するとレンが全員に向かって光波熱線を放つ。すると、ヴォルケンリッター達が足元から徐々に消えていく。

そして何の断末魔をあげる事も無く消滅し、そこには十字架のみが残っていた。

目の前で家族の消滅を見せつけられたはやては下を向き、大粒の涙を何滴も零す。

『あれ？ まだ覚醒しないの？ しょうがない、今度は特別に、君の大好きな人の死を見せてあげるよ』

ユウキがそう言うのと、はやてはベルカの魔法陣を模った三角錐に拘束され、ユウキ達三人はその場から消えた。

父親であるウルトラマンジャックとの壮絶な親子喧嘩を終えた翔は、  
買い物袋をぶら下げて家へと向かっていた。  
すると突然、目の前に二人のウルトラマンと、三角錐の中に拘束さ  
れたはやてが出現した。

「はやて！」

『翔兄い！』

三角錐の中から、くぐもったはやての声が聞こえる。そして翔は改  
めて二人のウルトラマンを睨む。

方やメビウスに酷似した頭部に、プロテクターやスラッガー等の相  
違点を併せ持った『ウルトラマンブレイブ』

そして方や何度も衝突し、自分に対して真っ直ぐ向き合ってきた相  
手、『ウルトラマンゼロ』だった。

「てめえら……！」

『さて、それでは楽しい公開処刑の始まり始まり』

「誰が処刑なんかされるか！」

ブレイブの言葉に強く反論し、右腕のブレスレットを輝かせる翔。辺りを眩しいほどの光が包み込み、翔の姿が変わる。

ウルトラマンジャックの、二重ラインが青くなつた戦士、『ウルトラマンジョーカー』の姿に戻つた翔は、二人のウルトラマンに向かつていった。

『デエエエエエリヤアアアアアアアアアア！！』

勢いに乗せて放たれた鋭い拳が、ブレイブの顎を捉え吹き飛ばす。背後から奇襲をかけてゼロが放つた拳を受け止め、胴体に蹴りを叩き込む。負けじとゼロが放つたエメリウムスラッシュを避け、右手に銀色の丸いノコギリ状の刃、『八つ裂き光輪』を纏わせた手刀を炸裂させる。

大きく吹き飛ばされたゼロを確認しながら、ジョーカーははやてに近づく。

『はやて、大丈夫か！？』

『うん。せやけど翔兄い……やっぱり……』

『……すまねえ、今まで騙してて。でもっ！』

『でも翔兄いは、私にとっては大切なお兄ちゃんや。私の我侭で翔兄いを苦しめてもって……そんな私でも良かったら、これから一緒に居てくれへん？』

『ああ、もちろんだ！』

涙を零しながらも笑顔を向けるはやてに、ジョーカーも力強く答える。先程ヴォルケンリッター達の消滅を目の当たりにしたにも関わらず、はやては笑顔になった。それはやはり、ずっと傍に居たウルトラマンジョーカー、八神翔の存在が大きいのだろうか。そして三角錐の檻ごしに二人の手が触れ合おうとした、その瞬間。

『は……い残念』

ジョーカーのカラータイマーを、背後から金色の刃が貫いた。ジョーカーがゆっくりと振り向くと、その刃の持ち主である金髪に黒い鎧を纏った宇宙人、『ババルウ星人』と、その横に立つ灰色の宇宙人『ザラブ星人』が立っていた。はやては口を両手で抑え、目を見開いて驚いている。

『あ……っはっはっは！ こんな単純な罠に引っ掛かるたあ、さすが光の国の落ちこぼれだぜ！』

『てめ……ら……』

何かを言いかけたジョーカーだが、その場に倒れて翔の姿に戻る。

『翔兄い！ 翔兄い！！』

はやてが翔に何度も声をかけるが、返事は来ない。翔は身動き一つせず、目を閉じたままだった。  
はやてはそれを見た後蹲り、胸の奥に溜まった怒りを開放するかのよう空に向かって叫んだ。

『ううああああああああああああああああ！！』

その叫びに答えるかのように海に黒いベルカの魔法陣が現れ、その中から形を持たない、怨念の集合体が出現する。

『さあ目覚めろ、怨念の悪魔、ヤプールよおお！！』

ババルウ星人がそう吼えると、おぞましい咆哮を挙げて魔法陣から超獣が出現する。

額に赤いクリスタルを持った『究極超獣Uキラーザウルス』の出現である。

その額から放たれた光線がはやてを包み、そのクリスタルの中に閉じ込める。巨大化して、ババルウ星人とザラブ星人が近づく。

『フハハハハッ！ これで地球は我々の……ッ！？』

高笑いをするババルウ星人に、Uキラーザウルスが光線を吐く。その光線に焼き尽くされたババルウ星人は、音も無く消滅した。

『ババルウ……ッ！』

それに驚き、声を上げたザラブ星人もまた、Uキラーザウルスの光線に焼き尽くされて消滅した。

「あれはっ！」

走っていたユウキも、その巨大な超獣の出現に脚を止める。

「Uキラー……ザウルス……」

メビウスから聞いたその名を呟き、額から滲み出る脂汗を拭う。そこに、レンとなのは、フェイトが駆け寄る。レンとユウキは互いに頷き合い、変身アイテムを構えた。だが、それを制するようになるのはが何かに気付く。

「あれはっ！」

その指が指した方向には、胸と背中から血を流して倒れている少年の姿が居た。四人はそれに駆け寄り、レンがその少年を抱え起こす。

「おい！　おい、大丈夫……ッ！」

「レン兄い、どうしたの？」

突然呼びかけるのをやめ、目を見開いたレン。それを不思議に思ったユウキが、レンに声をかける。その視線を辿ってみると、右腕にブレスレットが付いていた。そう、ウルトラマンジョーカーが付いていた物と、同じブレスレットが……。

「まさか、この人が！？」

「ああ、多分間違いない。こいつがジョーカーだ……」

レンはゆっくりと翔を寝かせ、一度その手を強く握った後、胸の前に置く。そして立ち上がり、その横にユウキが立つ。

「行くぞ、ユウキ！」

「はい、兄さん！」

そう力強く言葉を交わしたレンとユウキは、それぞれ変身アイテムを構える。レンはウルトラゼロアイを両目に、ユウキはブレイブブレスのサークルを勢い良く回転させ、叫ぶ。

「デユワッ！」

「ブレイブ！！！」

辺りを赤と青の閃光が包み込み、二人はウルトラマンの姿に戻って  
Uキラーザウルスと対峙した。

Uキラーザウルスの放った無数の触手を、ゼロスラッガーとブレイブスラッガーの計5本の刃が切り裂いていく。  
ブレイブ自身もブレイブブレスからブレイブブレードを出現させ、

バードンをカプセルから出して突進する。

だが、ブレイブブレードでは歯が立たず、ブレードがあっさりと碎けてしまう。バードンの火炎と、ワイドゼロショットも弾き返し、  
ウキラーザウルスは肩から光弾を放つ。

『ぐあああああああ！！』

その光弾をもろに食らい、大きく吹き飛ばされるゼロとブレイブ。  
バードンは空中から攪乱する作戦に出たが、再生した触手により叩き落されてしまう。

手元に戻ってきたスラッガーをキャッチし、ゼロとブレイブはカラータイマーの両横にそれを装着する。

『ゼロ！』

『ブレイブ！』

そのカラータイマーの横に装着したスラッガーに、銀色のエネルギーが溜まっていく。

『ツインシュウウウウウウウウット！！』

ゼロブレイブツインシュートが放たれ、Uキラーザウルスに直撃する。それでUキラーザウルスが少し後退するが、踏み止まってしま

う。  
その一撃でエネルギーを消耗したゼロとブレイブのカラータイマーが点滅する。残されたエネルギーは少ない。

そこでゼロは、ブレイブにある提案を持ちかけた。

『ブレイブ、俺達に残ったエネルギーは少ない……。だから次の一撃で決めるぞ！』

『そうしたいのは山々だけど、どうやって？』

『お前があいつの注意を逸らせ。その隙に俺がウルティメイトファイナルソードで真つ二つにする』

『そんな、無茶だよ！ アレは装備するだけでもエネルギーを消耗するっていうのに、そんな大技まで使ったらゼロ兄いの体が！』

『大丈夫、心配すんな』

『でも……』

ブレイブが注意を逸らし、ゼロが大技を叩き込むという作戦を提案

するゼロ。だがそれは、ゼロにのみ負担を大きく与えてしまう作戦だった。それを聞いてゼロと止め様とするブレイブに、ゼロはある言葉を言う。

『最後まで諦めず、不可能を可能にする。それがウルトラマンだ。つて、俺に教えてくれたのはどのいつだ？』

『っ！　そうだけど……』

『だったらよ、ゼロしかない可能性だつて、俺達の勇気で無限大に変えるんだ！　それが、不可能を可能にするってことだろ？』

『ゼロ兄い……………分かった、やろう！』

『おう！』

ゼロとブレイブは再びヒキラーザウルスに向き直り、その横にバードンが降り立つ。ブレイブが一步前に出て、全身にエネルギーを溜める。そして真つ赤な体にプロテクターやスラッガーの側面にファイヤーシンボルを描いた姿、『ウルトラマンブレイブ・バーニングブレイブ』にヴァージョンアップする。

その炎を受け、バードンも全身を発火させる。体が一回りシャープになり、嘴と目が鋭く、羽が大きくなった不死鳥を思わせる姿、『EXバードン』へと進化した。

そしてブレイブは師匠の大技、巨大な火球を飛ばす『メビウムバ

「スト」を、ウキラザウルスに向け連射する。  
EXバードンも、全身の炎を自身の体の形そのままで打ち出す『インビンシブルフェニックス』を連射する。

対するウキラザウルスも、その連射を後退しながらも全て受ける。

そして防御に意識が集中している隙に、ゼロはウルティメイトイージスを装着する。そして右腕に装着されたウルティメイトソードに、全エネルギーを込める。

『おっし、ブレイブ！ バードン！ 離れる！』

ゼロの合図と共に、ブレイブとバードンが周囲から離れる。

そしてゼロは、超巨大化させた光の剣を、ウキラザウルスに突き刺す。それを引き抜くと、ウキラザウルスの目から光が消え、動きが止まる。

ゼロとブレイブは光に包まれ、それぞれレンとユウキの姿に戻った。

レンとユウキは、互いに荒い呼吸のままその場に倒れる。そこに慌てて駆け寄り、抱き起こすのはとフェイト。

ユウキはフェイトの膝の上で横になったままだが、レンはなのはの肩に掴まって立ち上がる。

そしてウキラーザウルスを見る。すると突然、ウキラーザウルスの周囲が揺れる。

「な、なんだ!？」

ウキラーザウルスの下から巨大な体と、数本の巨大な脚が出現し暴れだす。

ウキラーザウルスが、『ウキラーザウルス・ネオ』として蘇ってしまった。

だが、既にレンとユウキにエネルギーは残されてはいない。果たして、この絶体絶命の状況をどう乗り切るのか……？

次回、最終三部作?へ続く……

A、S編第10話 最終三部作？ 絶望の暗雲（後書き）

次回、ウルトラマンブレイブ！

ユウキ

「僕達にもういがみ合ってる暇なんて無い！」

レン

「取り戻すんだ、俺達の光で！」

ユウキ

「行くよ、二人とも……最後の……！」

レン

「ああ……」

翔

「最後のっ！」

次回、【三人のウルトラマン】

フェイト

「ユウ……キ……？」

ブレイブ

『ごめんフェイト……約束……守れ……』

フェイト

「ユウウウウウキイイイイイ!!」

そして訪れる、突然の別れ……

A、S 編第11話 最終三部作？ 三人のウルトラマン（前書き）

今日のエースな一言

「人間は皆、自分自身の力で光になれるんだ！」byマドカ・ダイゴ

「俺は俺だ……ウルトラマンダイナだ！」byアスカ・シン

「この世界は、滅んだりしない」by高山我夢

「僕はもう一度貴方と、一緒に飛びたい……」by春野ムサシ

「絆……ネクサス！」by弧門一輝

「俺だって……俺だって、マックスなんだああ……！」byトウマ・カイト

「今まで……ありがとございました！」byヒビノ・ミライ

「その野望、俺が叩き潰す！」byウルトラマンゼロ

A、S 編第11話 最終三部作？ 三人のウルトラマン

——ここは、どこなん？

——なんや、すつごく眠たいんやけど……？

『すみません、我が主………』

——この声は？ 聞いた事ない声やけど……せやけど、なんだか懐かしい……。

——でも、何で謝つとるん？

『私がふがいないばかりに、この様な状況に陥ってしまいました……申し訳ありません………』

——この様な状況で……あ、何か出てきた。

——すつごく大きい怪物が、街を破壊してる……あれが、闇の書の中におったん？

『闇の書の闇として寄生していた異次元人が、先程の貴女様のお怒りによって目覚めてしまいました……プログラムを管理できていなかった私の責任です………』

——そんな事あらへんよ、原因は私にもあるんやし。

『ですがっ!』

——それに、多分大丈夫やと思うよ？

『?』

——翔兄いが、きつと何とかしてくれるから……。

ウルトラマンブレイブ／魔道師との遭遇／

A、S 編第11話 最終三部作？ 三人のウルトラマン

暴れ狂うヒキラーザウルス・ネオを見上げながら、ユウキ達は奥歯を噛み締めていた。

自分達にもう戦うエネルギーは残されていない。その現実が、彼等の心を折るうとしていた。

だが、無謀にもレンはウルトラゼロアイを眼前に突き出した。

「無茶だよレンさん！ それ以上戦ったら……！」

「けど、このまま黙って見てられるかよ！」

突き出した腕を、なのはが必死で抑える。それでもゼロの姿に戻ろうとするレンに、ユウキが言い聞かせる。

「今無謀に戦って負けたら元も子もない。まだ控えた方がよいよ」

冷酷に言い放つユウキだが、レンもそれが最良だと判断し、ゆっくりと腕を下ろした。

必死で食い止めようとしているEXバードンだが、全く歯が立たない。

今だ暴れ続けるヒキラーザウルス・ネオを見つめ、悔しい思いをし

ていると、背後で翔がゆつくりと状態を起こした。

「ん……あぐっ……」

「ま、まだ寝てなきゃダメですよ！」

傷口は止血してあるとはいえ、既に深刻なダメージを負っている翔。無理やり体を起こそうとする彼を、なのはが止めて横にする。が、翔はそれを払いのけてヒキラーザウルス・ネオを睨む。

「あいつの中に……はやてが……！」

「はやてちゃんが!？」

翔がポツリと呟いた言葉に、ユウキが大きく反応する。翔はユウキの方を見た後、続けてレンを見る。そして二人の正体を察したのか、目つきが鋭くなる。

「てめえらの手は借りない。俺一人であいつを倒す」

「バカ言ってんじゃねえ！ あいつの戦闘力がどれぐらいか、お前も知ってるだろ！？ 一人で勝てるほど甘くはねえ！」

あくまでも一人でヒキラーザウルス・ネオを倒そうとする翔を、レンが止める。

だがレンとユウキを信用していない翔は、それを振り払ってプレスレットを高く掲げる。が、その腕をユウキが掴み、翔の右頬を殴った。そして翔が、音を立てて倒れる。

普段のユウキからは考えられないその行動に、その場に居た全員が驚く。

「…… たった一人で戦ったら、その程度の怪我じゃ済まないんだよ？ 僕達にはもう、いがみ合ってる暇なんて無い。皆で戦うんだ、あいつを倒す為に……」

「んなもん、俺一人でできるっつってんだろ！ あいつは、俺が命に代えても倒す！」

「君が死んだら、悲しむ人が居るんじゃないの？」

「っ！」

「命を粗末にするな。例えば自分が死んでも良いって思っても、他の誰かが悲しむんだ。誰かを悲しませたくないなら、生きなきゃ。」

何より大切な、一緒に居る時間を守る為に」

ユウキが、ウルトラマンブレイブが、この星に来て初めて学んだ価値観。

『命』というものに対する、愛しさと大切さ。本人は親の血を引いて生まれた訳ではなく、そもそも純粋な『命』ではなかった。だが、それでも彼は『命』としての肉体と精神を持っている。

初めて経験する、『生命』としての実感。自分の身が滅んでも、誰も悲しまない。だからいつも捨て身で戦うんだ。そう考えていた彼だが、その考えはつい先日変えられた。

あのフェイトとのやり取りこそが、彼がこの星で得た、掛け替えの無いものだった。

だからこそ、彼は翔に伝えたかった。

『命』への自論、自分の新しくえたものを。

「一緒に居る、時間……」

「それはきつと、君にとつての掛け替えの無いものだよね？ 誰にも譲れない、守りたいものな筈だよね？ それを守りたいなら、一人で戦う、ましてや命に代えてもなんて言っちゃダメだ」

「ああ。命を懸けて戦うのは、笑顔でまた、仲間達に会つたためなんだからな」

言葉を続けるユウキに、レンが付け足す。そして俯いている翔に、ユウキが右手を差し伸べる。しばらく迷っていた翔だが、その手を掴み、立ち上がる。

「やれやれ、こんなだから俺はいつまで経っても落ち零れなんだよな……」

「そんな事無いよ。君はもう十分、新しいウルトラ兄弟の一人だよ！」

「へっ、サンキュ」

そう言葉を交わす翔とユウキの横に、レンが並ぶ。そしてそれぞれ顔を見合い、目の前で暴れているヒキラーザウルスを睨みつける。

「行くよ、二人とも。最後の……」

「ああ」

「最後の！」

三人の変身アイテム、『ブレイブブレス』『ウルトラゼロアイ』『ウルトラブレスレット・ジョーカー』が輝く。  
ユウキは中心のサークルを勢い良く回転させ、状態を捻った後天高く掲げる。

レンはウルトラゼロアイを両目に当てる。

翔は一度胸の前で右手を握った後、天高く掲げる。  
そして、三人が同時に叫ぶ。

「ブレイイイイイイイイブー!!」

「ゼロオオオオオオオオオオ!!」

「うおおおおおおおお!!」

夜の街を昼間の様に照らした後、三人のウルトラマンがUキラーザウルスの前に立った。

メビウスに酷似した顔に、ゼロを思わせるボディデザインの戦士、『ウルトラマンブレイブ』

頭に生えた二本の刃、ウルトラセブンを思わせるプロテクターと、額のビームランプを持った戦士、『ウルトラマンゼロ』

そしてウルトラマンジャックの、二重ラインが青くなり、右腕にブレスレットをつけた戦士、『ウルトラマンジョーカー』

既にカラータイマーが点滅しているが、三人は勇ましく目を光らせた。

——ほら、翔兄いが来てくれよった。

『ですが、彼等のエネルギーはもう……』

——んまあ何とかなるやろ。こっちはこっちで、色々やれる事があるんやろ？

『と、言いますと？』

——せやなあ……シグナム達を、元に戻す事は？

『可能ですが……』

——ほんじゃよろしく……えと、まだ名前聞いとらんかったねんけど……？

『名前は……まあ、闇の所の管理プログラムとでも』

——ええ！？ そんなん絶対おかしいて！ ……よし、私が名前をあげる。闇の書とか、呪いの魔道書とか言わせへん。私が呼ばせへん！

『ですが、もうあの闇は止まりません……』

——そこはええて。ほんじゃ、シグナム達の復活よろしゅうなあ。

——夜天の主の名において汝に新たな名を贈る。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース……。

『……新名称、リインフォース認識。これより、守護騎士プログラムの修復に入ります』

ゼロとジョーカーが空へ上がり、そこに向かって放たれる触手をブレイブとEXバードンが切り落とす。

ジョーカーはマイクロ化し、微弱なバリアを纏ってゼロの額の前に立つ。

『行け、ジョーカー！』

『ああ、ゼロ！』

マイクロ化したジョーカーを、ゼロがエメリウムスラッシュで打ち出す。

ウルトラセブンがかつて使った、『ステップショット戦法』である。勢い良く突っ込んでくるジョーカーに、ウキラーザウルス・ネオがミサイルで弾幕を張る。

その放たれた無数のミサイルを、ブレイブが高速で切り落とす。

『邪魔を、するなあああああああ！！』

ゼロもエメリウムスラッシュを連射してミサイルを打ち落とす。なのはとフェイトもセットアップし、魔砲もとい魔法を放って応戦する。

ミサイルの弾幕を掻い潜り、徐々に巨大化していくジョーカー。本来の大きさである状態に戻ると、右手を伸ばしてウキラーザウルスの額にあるクリスタルを掴み取る。



Uキラーザウルスの額を突き抜けたジョーカーは、手を開いてはやての様子を見る。

バリアジャケット

黒い袖なしの騎士甲冑に身を包み、その手には自身の身長ほどの金十字の杖が握られている。

はやての足元で白いベルカの魔法陣が輝き、その周りに四人の騎士が立っている。

夜天の主、『八神はやて』と、彼女の守護騎士、『ヴォルケンリッター』が再誕した。

ジョーカーはそれをゆっくりと地上に降ろし、そのまま自身も翔の姿に戻る。

「はやて！」

「翔兄い！」

どちらからとも無く互いに抱きつき、涙を流す。

「良かった……ホントに良かった……」

「うん、翔兄いのおかげや。ホンマにありがとう……」

「俺だけじゃねえ。あいつらのおかげだ……」

そう言つて振り向く翔。その先には、地上に降りたゼロとブレイブ、そしてEXバードンと、浮かんだままのなのはとフェイトが居た。

「皆が居たから、俺達はこうしてまた会えたんだ」

そう言つてはやて達に笑顔を向ける翔。その背後で、Uキラーザウルス・ネオが再び動き出す。

それにいち早く気付いたブレイブは、巨大なバリアをはる。そこに向かつて、Uキラーザウルス・ネオが黒くおぞましい光線を放つ。輝が広がっていくバリアを常時修復しながらそれを防ぐブレイブ。カラータイマーの点滅はどんどん加速していく。

『1のっ！』

ゼロとバードンが空へ上がり、Uキラーザウルス・ネオの注意を逸らそうと動き回る。だがUキラーザウルスは光線を撃ち続け、それがようやくワイドゼロショットで止まる。

バリアを消したブレイブは、腕をだらりと下げ、動かなくなった。

「ユウキ……？」

気になったフェイトが、ブレイブの正面に回る。  
すると、そのカラータイマーは輝きを失っていた。

「っ！」

『ごめんね、フェイト……約束……守れ……』

最後まで言葉を続けることができず、ブレイブの乳白色の目が輝きを失う。

そしてブレイブの体が淡い光に包まれ、ガラスの様に砕け散った。  
そのブレイブであった光が、粒子となって宙を舞う。  
その一つを掴み、フェイトはウルトラマンブレイブことユウキの現  
状を悟る。

「ユウキ……ユウウウウウキiiiiiiiiiii!!」

フェイトの悲痛な叫びが、海鳴市に木霊した。  
ウキラーザウルス・ネオは、破壊活動を強めていた……。

N  
E  
X  
T  
  
F  
I  
N  
A  
L  
  
S  
T  
A  
G  
E

A、S 編第11話 最終三部作？ 三人のウルトラマン（後書き）

次回、ウルトラマンブレイブ！

最終回、【再開の約束】

お楽しみに！

次回でとうとう、【ウルトラマンブレイブ〜魔道師との遭遇〜】完結！

A、S編最終回 最終三部作？ 再開の約束

「ユウキ……ユウウウウウキイイイイイイ！！」

フェイトの悲鳴も空しく、ヒビノ・ユウキことウルトラマンブレイブは消滅した。

その場に居た誰もが絶望したが、Uキラーザウルス・ネオは破壊活動を止めない。怒りが頂点に達したゼロは、無謀にも単身Uキラーザウルス・ネオに挑む。

『てめえ！ よくも……よくも俺の弟を！』

「レンさん！」

渾身の力を込めた『ゼロツインシュート』を至近距離で放つゼロ。EXバードンも後方で『インビンシブルフェニックス』を連発している。

だが、Uキラーザウルス・ネオはそれら全てを打ち払い、無数のミサイルをゼロとEXバードンに決める。

『ぐあああああああ！』

元々エネルギーも減っていたところに、さらにエネルギーを消費してしまっていた為、ゼロはその攻撃を受け倒れてしまう。そのまま淡い光に包まれ、ゼロはレンの姿に戻って海に落ちた。  
EXバードンもその場に崩れ落ち、動かなくなってしまった。

「レンさん、レンさん！」

なのはが勢い良く飛び出し、レンを救出に向かう。  
フェイトは地上でバードンを見つめながら、その場にただ立っていた。時折右手を握るが、それも力なく垂れ下がる。  
ヴィータの助けもあり、何とかレンを救出したなのは。レンは痛む傷を抑えながら立ち上がり、ウキラーザウルス・ネオを睨む。

「このまま……何もできねえのかよ！」

「こんなので終わりなん……?」

「……ちっ」

「このまま、地球は……」

レン、はやて、翔、なのはが暗く呟いたとき、なのはの頭に何者かの声が響く。

『本当にそう思うか？』

「えっ？」

なのはは、誰かの存在を感じていた。

そこに初老の男性『北斗星司』が現れ、姿が徐々に銀色の戦士に変わっていく。『ウルトラマンエース』となった男性は、再びなのはに呼びかける。

『君達になら、聞こえる筈だ。勝利を信じて共に戦ってきた、仲間の声が……』

「仲間……」

そう繰り返すと、意識空間は翔に受け継がれる。

翔がなのはの空間に、まるでメダルをひっくり返すかのように現れると、その目の前に翔の父親、『ウルトラマンジャック』こと『郷秀樹』が現れる。

『諦めてはいけない。地球の未来は今、お前達に託されたんだ』

「地球の未来……」

翔がそう呟くと、今度はレンにボタンタッチされる。

レンの意識の中に、彼の父親である『ウルトラセブン』の人間体、『モロボシ・ダン』が現れた後、赤いセブンの姿に戻っていく。

『彼等人間が居たから、我々ウルトラマンは、どんな強敵とも負けずに戦ってこれた。お前達なら、その事を教えられる……』

「俺達になら……」

そして意識ははやてへと繋がる。

はやての意識の中には、以前出会った男性、『ハヤタ・シン』が現れる。その姿が徐々に変わり、『ウルトラマンジャック』に酷似した姿の『ウルトラマン』へ変わった。

『そして救ってくれ、彼を。君達が培ってきたものがあれば、必ずや地球は、守りぬける……』

「はい、必ず！」

はやてがそう力強く答え、その意識は現実へと戻る。

ウルトラ兄弟の言葉を受けた4人は、フェイトの下に近付く。

「フェイトちゃん、顔上げて」

「守り抜くんだ！」

「ユウキさんと一緒に」

なのは、翔、はやての言葉に、フェイトは少しだけ顔を上げる。だがすぐに下を向いてしまう。

「何言ってるの……？ ユウキはもう！」

「聞こえる筈だよ？ ほら」

声を荒げるフェイトをなのはが宥め、優しく言い聞かせる。するとフェイトの、その場に居た全員の頭に、ユウキの声が響く。その瞬間、フェイトの右手甲に赤いナイトプレスが出現する。

『もう一度力を貸して下さい。僕達の……最後の戦いの為に！』

「ユウキ……？ ユウキなの！？」

金色の空間の中、フェイトの前に一人の少年が立っていた。

少し癖のある茶髪に穏やかな目。自分が選んだ、白地に赤と青のラインが入った服。そして左腕に出現しているブレスレット。『ウルトラマンメビウス』の使う、『メビウスブレス』が青くなったもの、『ブレイブブレス』である。

『ウルトラマンブレイブ』、『ヒビノ・ユウキ』がそこに立っていた。

「ユウキ、どうして……！？」

嬉しそうに涙を流しながら、ユウキに聞くフェイト。ユウキはそれに笑顔で答える。

「その赤いブレスレットは、奇跡の力を持つ伝説の超人、『ウルトラマンキング』が創ったものなんだ。それに、父さんが言ってた。

来たるべき戦いするとき、そのブレスが必要になると」

ユウキの説明に、フェイトの目に決意の炎が灯る。

「私達にはまだ、やれる事があるんだね……？」

ユウキがゆっくり頷き、フェイトは力強く答える。

「分かった。一緒に行くよ！」

立ち上がったフェイトは、再びヒキラーザウルスを睨む。

軽く後ろを向き、全員と目を合わせる。そして空を見上げ、ユウキに向かって叫ぶ。

「私達……皆も！」

赤いナイトブレスの短剣を一度引き抜き、もう一度差し込む。それが一瞬強く光り、そのてを前に出す。

周囲に居る人、『ヒビノ・ユウキ』と関わった人間の手が、そこに重ねられる。

「なあ、本当にあたし達も良いのか……？」

背伸びして手を重ねながら、ヴィータが済まなそうな顔をして呟く。  
ヴォルケンリッター  
他の守護騎士達も似た様な表情をしている。

「大丈夫だよ。ユウキだもん」

フェイトの意味不明な説得に納得したヴィータは、背伸びに集中し始めた。総勢12人の手が重なり、最後に光る手が添えられる。

丁度フェイトの反対側の所に、金色の光を見に纏ったユウキが笑顔で立っていた。そして全員と顔を見合わせ、その一団の頭上に巨大なメビウスの輪が出現する。

それぞれ状態を捻り、右腕を高く掲げ、ユウキのみ左腕を掲げる。  
そのまま、力強く叫ぶ。

『ブレイイイイイイイイイイイイイイイブ！！』

そう叫ぶと同時に全員が光に包まれ、ウキラーザウルス・ネオの前に立った。

『バカな！　なぜ貴様が！』

目の前に出現した巨人に、ヤプールが驚き声を荒げる。

ブレイブそのものをベースに、全身に不死鳥を描く模様が出現し、その背中からは天使の様な純白の翼が生えている。左腕には青いメビウスブレス、『ブレイブブレス』が、左腕には赤いナイトブレス、『ブラッディブレス』がそれぞれついている。

『ウルトラマンブレイブ・フェニックスブレイブ』がそこに立っていた。

『まだ分らないのか、ヤプール！　今の僕は、もう一人じゃない！』

ブレイブはヤプールに向かってそう答え、その両足にオレンジと緑のミッド式魔法陣が出現する。

『チェーンバインド!』

『ストラグルバインド!』

アルフとユーノがバインドを唱えると、それがブレイブの両足にある魔法陣から飛び出していく。そのバインドがUキラーザウルス・ネオの触手を数本纏めてねじ切る。  
続けて足元に巨大な銀のベルカ式魔法陣が出現する。

『縛れ、鋼の軛!』

Uキラーザウルス・ネオの足元から数本の刃が出現し、Uキラーザウルス・ネオの脚を切り落とす。

一瞬にして脚を奪われたUキラーザウルス・ネオはその場に落ち、苦痛に悶える。

その隙にブレイブは次の攻撃の構えに入る。

『良く分かんねえけど……ちゃんと合わせろよ、ヒビノナントカ!』

『ユウキだよ、ヴィートちゃん』

『ヴィータだ! ……つと。』

鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵、グラーファイゼン!』

ブラッディプレスから光が伸び、それがアイゼン・ギガントフォル

ムに変化する。

ブレイブは右腕ごと大きく振り回し、頭上で高く掲げる。

『轟天……爆碎!!』

ユウキとヴィータの声が重なり、アイゼンに光が宿る。

『ギガント!!』

『シユラアアアアアアアアアク!!』

ヴィータが叫ぶと同時にアイゼンを振り下ろし、ヒキラーザウルス・ネオの右前方を砕く。

そしてブレイブの意識の中、なのはが一步前に出る。

『次、高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン! 行きま  
す!』

今度はブレイブブレスのサークル上にあるクリスタルに、レイジン  
グハートが宿る。

左手を握って構え、そこに光が溜まっていく。

『エクセリオオオオオオン……バスタアアアアアアアア！！』

左の拳を突き出し、そこから4本の極太の光線がウキラーザウルス・ネオに直撃する。

ブレイブはそのまま、徐々に左の拳を開く。

『ブレイク……』

『シュウウウウウウウト！！』

手を完全に開くと、そこから4本の光線を巻き込んで極太の光線がウキラーザウルス・ネオに直撃し、左前方を木っ端微塵に吹き飛ばす。

『次、シグナムとテストロッサちゃん！』

心の中で、シャルの伝令が飛ぶ。

そしてシグナムが静かに目を瞑っている。

『剣の騎士、シグナムが魂……炎の魔剣、レヴァンティン。刃、<sup>やいば</sup>連  
結刃に続く、もう一つの姿……』

ブレイブは頭のブレイブスラッガーを2本外し、ツインソードとして繋ぎ合わせる。するとそれが輝き、『レヴァンティン・ボーゲンフォルム』へと変化する。

そして最後のスラッガーを矢にして、光の弦を引き絞る。

『翔けよ、隼あ！』

『シュツルムファルケン！』

シグナムの掛け声に合わせ、ブレイブが必殺技名を叫ぶ。

光の矢は高速でウキラーザウルス・ネオの右後方を打ち抜き、ブレイブスラッガーは頭部へ戻る。

そしてフェイトが一步前に出て、ユウキに声をかける。

『ユウキ、行くよ……』

『うん、フェイト』

ブレイブはどこかからか、白銀のアイテムを取り出す。それを握り締め、ユウキとして叫ぶ。

『バルディッシュ・ブレイブ！ セーット……アープ！』

バルディッシュ・ブレイブと呼ばれたそのデバイスが輝き、バルディッシュ・ザンバーフォームと同じ姿になる。  
そしてそれに左腕からエネルギーを注ぎ込む。バルディッシュ・ブレイブに雷が迸り、それを一回転して勢い良く振り回す。

『撃ち抜け、雷神！』

『ジェットザンバアアアアアアアア！！』

シグナム同様、フェイトの声に合わせてブレイブが技名を叫ぶ。

電気を帯びた光の刃は、鋭く伸びてヒキラーザウルス・ネオの左後方を切り落とす。

だが傷口が徐々に元に戻っていく。それを見計らってブレイブは空へ上がる。

『ほんなら……ユウキさん、サリーゴーヤ』

『G I G、はやてちゃん』

ブレイブが右手を天に掲げると、その手の平に白いベルカの魔法陣が出現する。そしてはやてが詠唱に入る。

『彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け！』

『石化の槍……！』

『ミストルティン！』

途中で詠唱をブレイブが引き継ぎ、はやてが技名を叫ぶ。

掲げた魔法陣から光が飛び出し、ウキラーザウルス・ネオに直撃し、そこからウキラーザウルス・ネオが石となり固まっていく。  
が、本体までは石にならず、石化を打ち破ってしまう。

だが、ブレイブは既に次の手を打っていた。

『行くぞ、ユウキ』

『了解、お義兄ちゃん』

ブレイブの左腕、ブレイブブレスのクリスタルに、一瞬槍型のデバイス、『デュランダル』が重なる。そのままクロノは詠唱に入り、辺りに雪が舞う。

『悠久なる凍土……凍てつく棺のうちに……永遠の眠りを与えよ』

……凍てつけ!」

『エターナルコフィン!!』

クロノの詠唱が終わった後、ブレイブが技名を叫び、左腕から氷が放たれる。それが徐々に広がっていき、ウキラーザウルス・ネオを氷付けにする。

だがウキラーザウルス・ネオは、恐らくファイヤーモンスの能力と思われる炎を使ってそれを溶かした。

そして頭上の空を割り、中から無数の超獣達が出現する。

『後は俺達の番だ!』

レンがそう叫び、ブレイブはブレイブスラッガーを2本、カラータイマーの横にセットする。

『ゼロ!』

『ブレイブ!』

『『フェニックスインシュウウウウウウウト!!』』

ゼロとブレイブが同時に叫び、強烈な光を放つ光線が超獣達を浄化する。

だが、それでも超獣達を呼び出し、自身もミサイルを連射するウキ

ラーザウルス・ネオ。  
続けて翔が前に出てくる。

『行くぜ、ユウキ!!』

『うん、ジョーカー兄さん!!』

ブレイブの両手に、青白い電気が流れる。そのまま右腕のスペシウムエネルギーとプラスエネルギーを、左手のマイナスエネルギーとスパークさせる為十字に組む。  
組んだ右手から、金色の光線が発射される。

『『スペシウム……光線ッ!!』』

フルパワーのスペシウム光線が炸裂し、ミサイルごと超獣を焼き払う。

そして止めに、両腕に全エネルギーと魔力が込められる。

ブレイブが左腕を斜めに掲げると、そこにメビウスの輪とミッドの魔法陣が出現する。

入れ替わる様にして右腕を掲げると、角ばった模様とベルカの魔法陣が出現する。

両腕をし字に組む瞬間、全員が叫ぶ。

『ブレイブフェニックス……』

『ストライカアアアアアアアアアアア！』

虹色に輝く光線が発射され、Uキラーザウルス・ネオに直撃する。最初は耐えていたUキラーザウルス・ネオだが、徐々に体が砕けていく。

そしておぞましい断末魔を上げ、大爆発を起こした。

だが、爆発した煙の中から、ヤプールが空へ逃げ出した。

『まだだ、まだ我々はやられん！ 怨念がある限り、幾度だって蘇る！ そしていつか、この星を……！』

『その度に、僕等ウルトラマンがお前を消す』

ヤプールの頭上に現れた赤に金の額、そしてモザイク上のプロテクターを身に付けた『ウルトラマンメビウス・インフィニティ』が金色の光線、『コスモミラクル光線』を放ち、ヤプールを消滅させた。

そして夜が開け、朝日が顔を除かせた。

フェニックスブレイブになった面々が並び立ち、その前にユウキ、レン、翔のウルトラマン3人が立っていた。

「翔、ホントに帰んのか？」

「ああ。いい加減帰らねえと」

「そう、寂しくなるわね……」

「お前がもう少し骨のある奴になって帰って来る事を期待している」

ヴィータ、翔、シャマル、シグナムがそんなやり取りをしているが、はやてはニコニコと笑顔を翔に向けていた。一番悲しんでくれると思っていたはやてが笑っているの、ちよつと寂しい翔。そんな翔に、レンが声をかける。

「翔、お前は残れ」

「はっ!？」

突然の事に驚き、腰を180度回転させる翔。グキッて言ったのは気にしない。

「親父やジャックには俺が言つとく。だからここにいろ」

「い、良いのか？」

「ウルトラマンゼロ、ウソ、ツカナイ」

なぜかカタコトになるレンに、翔は涙で顔をぐしゃぐしゃにして抱きつく。そして耳元で謎の宇宙語を連呼した後、八神家の面々に飛び込んでいった。

1人の人間として地球に溶け込んでいる翔をちよっぴり羨ましく思いながら、レンはクルリと背を向けた。

「レンさん……」

その背中を、涙目になって見つめるなのは。

レンは背を向けたまま、なのはに言った。

「なのは……次会うときまでに……もっと綺麗になつてろ。そして俺が……貰ってやるから」

「ぐすっ……うん……レンさんも、もっと強くて、もっとかっこ良

くなつてね!」

「ああ。ユーノ、それまでなのはを頼む」

「はい、レンさん」

若干鼻声になっているレンと堪えきれなくなったなのは。そしてなのはの背中を優しく摩ってやるユーノ。どうやらユーノは既にレンには勝てないと悟っていた様だ。

そしてレンはウルトラゼロアイを構え、目に当てる。

「デュワッ!」

後ろを向いたまま『ウルトラマンゼロ』の姿に戻り、ユウキにテレパシーを送る。

『ユウキ、先に行つて出口開いとく。遅れんなよ』

《分かった。ありがとう、レン兄い》

そのままゼロは空を見上げ、両手を広げて飛び立った。それを追う様になのはが走り出し、その背中に向かって叫ぶ。

「レンさあああああああん！！　またねえええええええええええ！！」

『さようなら』ではなく、『またね』という辺りが彼女らしい所だろう。

そして最後に、既に涙目になったユウキが全員を見渡す。

「最後の戦いが終わった今、僕には新しい使命ができました。もっと強くなって、もっと立派になって……いつかきっと……この星に帰ってきます！　必ず！」

その決意の籠った発言に、翔が笑顔で応対する。

「良い顔してるぜ、兄弟」

続けてはやても柔らかな笑顔を向ける。

「ユウキさん、気張ってや」

涙を拭いたのはも、それに続く。

「ユウキさんに出会えて、本当に良かったです！」

差し出された手と握手をして、再び辺りを見回す。

ユウキに向かつて笑顔を見せている、はやて、リインフォース、シヤマル、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、なのは、ユーノ、クロノ、アルフ、そして……。

「フェイト……コレ」

フェイトにバルディッシュ・ブレイブを託すユウキ。それを受け取ったフェイトは、涙を目尻に溜めながらもユウキに笑顔を見せる。

「ユウキ……行ってらっしゃい」

まるで母親の様な笑顔をユウキに向け、ユウキも涙目になった笑顔で答える。

「さようなら……今まで……ありがとございました！」

ユウキが一步後ろに下がると、その体が光に包まれる。

そのまま巨大化していき、ウルトラマンブレイブの姿に戻る。泣いているのか、肩が大きく上下していたが、やがて意を決したかのようには空へと飛び立った。

フェイトもまた、それを追う様にして走り出す。

そしてその背中に向かって、感謝の叫びを上げる。

「ユウキイイイイイ！！　ありがとおおおおおお！！」

その言葉が届いたのか、ブレイブは空中でメビウスの輪を描き、宇宙へと帰っていった。

それを見上げるフェイトの目は、晴れやかなものに変わっていた。

## 宇宙空間

トゥウインクルウェイと呼ばれる穴の前でブレイブを待っていたゼロと、ブレイブは頷きあって中に入る。直前ブレイブは地球の方を向き、心の中で呟く。

——いつか、また会う日まで

ウルトラマンブレイブ 魔道師との遭遇

A、S 編最終回 最終三部作？ 再開の約束  
完結

## A、S編最終回 最終三部作？ 再開の約束（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

これにて『ウルトラマンブレイブ〜魔道師との遭遇』全編完結致しました。

2月から始まったこの小説、約半年間続いてまいりました。

それもこれも全て読んで下さった皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

また、これで『魔道師との遭遇』は終わりますが、続編として『魔法少女との遭遇』が始まります。クロス先は『まどか マギカ』となります。

StrikerS編は現在だとやる予定はございません。ご了承下さい。

そして光の国へと帰っていったブレイブですが、道中という設定でコラボ先大募集です。ユウキを使いたい、ユウキをもふもふしたい、ユウキをにやんにやんしたいという方がいらっしゃいましたら、お気軽にコメントを下さい。

では最後にもう一度、ご愛読、本当にありがとうございました。

ハナト

## エピソード 運命の再開（前書き）

だって、プロローグあるし……

## エピソード 運命の再開

ウキラザウルス・ネオとの戦いから、6年後……。

フェイト達は中学生となり、学校生活の傍らそれぞれの夢に向かって過ごす日々を送っていた。

彼の残した、無限大の勇気を胸に抱きながら……！

ウルトラマンブレイブ 魔道師との遭遇

エピソード 運命の再開

とあるマンションの一室で、緑色の髪の女性が弁当を作っている。色合いを重視してトッピングしているあたり、娘に作っているのだろう。

その弁当の受け取り主が、中学生と思われる制服に身を包んで歩い

てきた。女性は受け取り主の少女に弁当を手渡す。

「はい」

「ありがとう、母さん……」

そう返したのは母とは似つかない金髪の美少女だった。

弁当の受け取り主【フェイト・T・ハラオウン】は正式にハラオウン家の養子となり、以前の自分を忘れないという意味も込めて【デスタロツサT】の性も残している。最も、ミッドチルダと呼ばれる世界ではそれが当たり前なのだが。

フェイトは弁当を丁寧にカバンにしまい、革靴を靴べらを使って履く。一瞬時計を確認し、遅刻しない事を確信してから玄関の戸を開けた。

空は青く澄み渡っている。

彼と出会った日も、また彼が帰っていった日も、同じ様に青空が広がっていた。

フェイトは空を見上げ、心の中で彼に挨拶をする。

（ユウキ、おはよう……）

そしてまた歩き出した。

フェイトが歩いていると、公園付近で少女の泣く声が聞こえてきた。気になったので向かってみると、案の定小さな少女が甲高い声を上げて泣いていた。フェイトはその子に近付き、優しく頭を撫でてやる。

「よしよし、どうしたの？」

「ひっく……ふーせんが……ぐすつ、とんでっちゃった……」

涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げ、空へと上がる赤い風船を指差し少女。風船は既に天高く登っており、普通の人間では取る事が不可能だ。そう、普通の人間なら。

（でも、ここで魔法を使うわけにはいかないよね……）

しかたなしにフェイトは少女の手を握り、安心させてやる。

「大丈夫、悲しくなんか無いよ」

「ひつく……ひつく……」

幼い甥っ子が居るので、彼女としてもこの様な事は得意分野であった。だが、力を使えば届くのになにできないというもどかしさがフェイトを苦しめていた。

そのとき、目の前を一羽の鳩が通り過ぎる。

そして顔の横から手が伸び、その手には赤い風船が握られている。

少女もフェイトも驚きに目を見開いていると、フェイトの後ろから声がした。

「はい」

とても穏やかで、とても温かくて、とても、懐かしい声が……。少女はそれを受け取り、フェイトの後ろに満面の笑みを見せる。

「ありがとうっ！」

「どういたしまして」

少女はそのままパタパタと駆けていった。

しゃがんでいたフェイトはゆっくりと立ち上がり、期待に胸を膨らませて振り向いた。その瞬間、空から青い体をした怪獣が降ってきた。

それにより大地が揺れ、街が崩れていく。

目の前の少年は怪獣の方を向いたまま、

「早く逃げて」

フェイトにそう言って走り出した。

フェイトは腕を伸ばすが、その手が掴む前に少年はどんどん先へ走っていく。

左腕に右手を翳し、勢い良く振り下ろした。その左腕を前に突き出し、隠す事もなく彼本来の名前を叫ぶ。

「ブレイブ！」

そのまま彼は光に包まれ、巨大化していく。

忘れもしない。自分がその姿を再び見る事を夢見て、いつかまた会えると信じて待っていたウルトラマン。

だからこそフェイトは、叫ばずにはいらなかった。

「ユウキ！」

【ウルトラマンブレイブ】が、地球に降り立った……！

『ゼアッ!』

ブレイブは勇ましく怪獣、【ディノゾール】に向かっていく。するとディノゾールは口から見えない何かを放ち、ブレイブを痛めつける。

『ガアッ!』

【断層スクープテザー】と呼ばれる、高速で動き回る鋭利な舌だった。ディノゾールはそれで何度もブレイブを攻撃する。すると突然、ディノゾールの断層スクープテザーが弾かれる。弾いた主は、明るい口調でブレイブに声をかけた。

『まったく、幾らザコだからって油断してんじゃねーぞ? また俺を壊す気か?』

『ゴメンレクシー。大丈夫。もう君を失ったりはしないから!』

『わぁーってるよ。んじゃ、さっさと決める』

『オツケー！』

声の主、赤い鳥の様な形をしたメカ【ブレイブギャラクシー】だった。

通称レクシーと簡単なやり取りをしたブレイブは、断層スクープテ  
ーザーを頭に付いた刃で切り落とす。

デイノゾールが痛み悶えてる隙に、懐に潜り込んで連打を叩き込む。

『ハアアアアアア！！ デアアアアッ！！』

止めといわんばかりにアッパーを叩き込み、デイノゾールが打ち上げられる。

そしてそのから空きになった腹部に狙いを定める。

左腕に付いたブレスレット、【ブレイブブレス】の中心にあるサークルを回転させ、腕を水平に伸ばす。それを頭上に掲げ、勢い良く振り下ろすと同時に十字に組む。

そこから放たれたオレンジ色の光線、【ブレイブシュート】が炸裂し、デイノゾールは空中で大爆発を起こした。

ディノゾールを倒したブレイブは、先ほどの少年の姿に戻った。  
15歳前後の、茶髪に穏やかな目つきが特徴の少年。6年前と、何ら変わらないその容姿に、フェイトは思わず抱きつきそうになるのを耐え、少年に声をかける。

「ユウキ……？」

少年はゆっくりと振り返り、フェイトに笑顔を向ける。

「ただいま、フェイト。大きくなったね」

「ユウキ……ユウキッ！」

少年がそう言った途端、堪えきれなくなったフェイトが少年、【ヒビノ・ユウキ】に抱きついた。

ユウキはそれを受け止め、優しく頭を撫でてやる。

「ユウキ、ユウキ！ ユウキッ！」

「うん、うん！ うんっ！」

心なしか、ユウキの目にも涙が溜まっている様にも見える。  
するとそこに、フェイトと同じ制服に身を包んだ少女2人と、少し  
違う服に身を包んだ青年が駆け寄ってきた。

「フェイトちゃん？ 何して……ユウキさん！」

「ホンマや！」

「ユウキ！」

栗色の髪をサイドポニーにした少女と、茶髪のショートカットにヘ  
アピンが特徴的な少女、そしてその少女と似ている目をした青年が、  
ユウキに気づいて走ってくる。

「なのはちゃん！ はやてちゃん！ 翔兄さん！」

ユウキは全員の名前を呼び、笑顔で皆とハイタッチを交わす。  
その公園には数人の若い男女の笑い声が響いていたとか……。

——それは、出会いの物語

—— 一人の『魔道師』と

—— 一人の『ウルトラマン』の

—— 心の交流を描いた物語

—— そのほんの一片に過ぎない

—— 彼等の出会いは何を生み出し、何をもたらすのか

—— その続きは、また別の機会に……

ウルトラマンブレイブと魔道師との遭遇

『ところでお前等、学校は？』

「「「「あっ……「「「「

完結

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8824q/>

---

ウルトラマンブレイブ～魔導師との遭遇～

2011年8月18日02時26分発行